

目次

■ 第20期理事長挨拶	1
■ 第20期役員・幹事・各委員会名簿	3
■ 特定非営利活動法人 日本分子生物学会 倫理要綱 制定について	4
■ 2017年度生命科学系学会合同年次大会 Consortium of Biological Sciences 2017 (ConBio 2017) 開催のお知らせ (その1)	5
【ご挨拶】	5
【大会組織】	6
【参加登録】	7
【プログラム概要】	7
【ワークショップの企画公募について(2017年3月15日(水)受付締切)】	17
【日程表 (予定)】	20
■ 第39回日本分子生物学会年会 開催報告	21
■ キャリアパス委員会 年会企画報告	22
■ キャリアパス委員会 年会における発表者の属性統計調査報告 バランスのとれた研究環境を築くために～2016属性調査、今後はどう活かす?～	46
■ 第6回(2018年)日本分子生物学会 国際会議支援募集のお知らせ	47
■ 国際会議支援システム利用について	48
■ 第20期新理事会準備会議記録	49
■ 第19期・第20期合同理事会記録	50
■ 平成29年度(第39回)通常総会記録	58
■ 平成28年度(2016年度)決算報告	60
■ 監査報告書	66
■ 平成29年度(2017年度)活動予算書	67
■ 学術賞、研究助成の本学会推薦について	69
■ 研究助成一覧	70
■ 各種学術集会、シンポジウム、講習会等のお知らせ	73
○広島大学知のフォーラム「広島大学から世界へ～世界のトップ研究者に聞く 第3弾～」	
○千里ライフサイエンスセミナー がんシリーズ第6回 「エピゲノム情報に基づくがんの制御」	
○第19回マリンバイオテクノロジー学会大会	
■ 賛助会員一覧	75

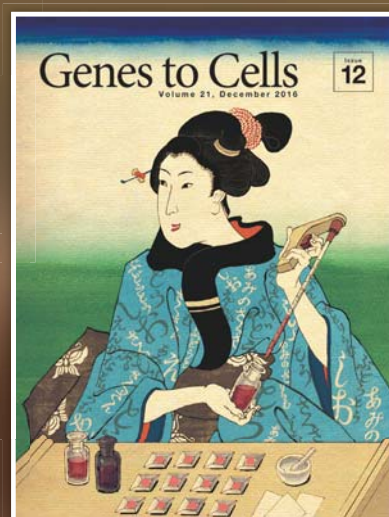


Genes to Cells

Published on behalf of the Molecular Biology Society of Japan

Edited by: Mitsuhiro Yanagida
Frequency: Monthly | Impact Factor: 2.481

日本分子生物学会の学会誌Genes to Cellsは、分子生物学の優れた研究成果を掲載し、著者にとって有益な学術情報や先見性の高い最新の研究情報を提供しています。全世界9,500以上の機関で読まれており、年間216,000件以上のダウンロード数を誇ります。是非Genes to Cellsにご投稿ください。



Genes to Cells 投稿の利点

- わかりやすく便利なオンライン投稿システム
- 2015年からの完全オンライン化でカラー掲載料がなくなりました
- 出版までの過程をお知らせするAuthor Servicesをご利用いただけます
- 早期出版EarlyViewサービスにより、最新号への収載を待たずにオンラインで出版されます
- 出版後6か月経過した全論文が無償公開となり、世界中からアクセス可能になります
- オープンアクセス希望者はオプションで『Online Open』(有料)を選択できます
- 2012年9月以降の総説は日本分子生物学会のサポートを受け OnlineOpen で公開中

オンライン投稿はこちら

<http://mc.manuscriptcentral.com/gtc>

2014年・2015年出版 引用数TOP論文 *2016年12月現在

Multiple genome modifications by the CRISPR/Cas9 system in zebrafish (Volume 19, Issue 7)
Ota, S; Hisano, Y; Ikawa, Y; Kawahara, A

Suppression of LUBAC-mediated linear ubiquitination by a specific interaction between LUBAC and the deubiquitinases CYLD and OTULIN (Volume 19, Issue 3)
Takiuchi, T; Nakagawa, T; Tamiya, H; Fujita, H; Sasaki, Y; Saeki, Y; Takeda, H; Sawasaki, T; Buchberger, A; Kimura, T; Iwai, K

TET3-OGT interaction increases the stability and the presence of OGT in chromatin (Volume 19, Issue 1)
Ito, R; Katsura, S; Shimada, H; Tsuchiya, H; Hada, M; Okumura, T; Sugawara, A; Yokoyama, A

ジャーナル閲覧ページ

www.wileyonlinelibrary.com/journal/gtc

日本分子生物学会員は無料でアクセスできます。
初回ユーザー登録は学会事務局まで (info@mbsj.jp)
登録後の問合せはWileyまで (cs-japan@wiley.com)

2016年10月、
iPhone, iPad用ジャーナルアプリを
使って閲覧できるようになりました。
無料ダウンロード →



WILEY

第 20 期理事長挨拶



会員の皆様へ

このたび第 20 期理事長に選任され、学会運営を担当することになりました。これからの 2 年間、どうぞよろしくお願いたします。

日本分子生物学会は 13,000 名を越える会員を擁する生命科学系で国内最大の学会です。今でこそ大規模学会ですが、1978 年の発足時の会員数は約 600 名でしたので、40 年足らずの間に 20 倍以上の規模に成長したことになります。分子生物学会はなぜこのような稀有な成長を遂げることができたのでしょうか。

『学問の進歩にともない、それぞれの分野はますます分化する傾向にありますが、……分子生物学会は、広い領域にまたがる研究者がそれぞれの専門分野で研究を続けつつ連携し、真に学際的立場に立脚した生命科学をつくることを目指すものであります。』

これは学会設立時の趣意書の一節です。渡邊 格先生をはじめ学会創設に携わった先生方の先見性と熱意が感じられるすばらしい文章で、その内容は年月を感じさせないことに驚きます（学会 HP の「会報 創立 30 周年記念特集号」に全文が掲載されていますので、ぜひご覧ください）。1978 年当時は、組換え DNA 技術が国内で広まりつつあり、分子生物学が〈生物学の一研究分野〉から〈生命現象を解明するための共通言語〉に移行した時期にあたります。それまで理学、医学、農学、薬学などの別個の枠組みの中で研究されていた生命現象を、分子生物学という共通言語を使ってボーダーレスに議論するために設立されたのが分子生物学会なのです。この〈学際的〉で自由な雰囲気こそが分子生物学会のアイデンティティーであり、さまざまな分野の研究者を惹きつける求心力となっているのではないのでしょうか。

この学際性という理念は現在に到るまで脈々と受け継がれています。たとえば、昨年 12 月の第 39 回年会プログラムを見てみましょう。「Nutri-developmental biology：成長・疾患・恒常性を調節する栄養への応答機構」、「本当にオモロイ生き物の分子生物学」、「設計生物学と進化学のあいだ」、「最先端の化学と生物学のミックス」、「メカノメディスン：メカノバイオロジーを基軸とした基礎から臨床応用まで」、「ちいさな数理の見つけ方」、「全細胞解析が拓くマイノリティ細胞研究」など、狭義の（古典的）分子生物学の枠にはおさまらず、新たな研究の潮流を感じさせるシンポジウムが多数開催されています。

学会の最大の活動である年会では、多様な分野の研究者が集い、立場を超えて生命科学を包括的に議論できる場を提供していきます。今年 2017 年は、篠原 彰年会長のイニシアティブのもと、神戸ポートアイランドにて、分子生物学会と生化学会を主催として国内の 32 学会の協賛による ConBio2017 という新しい形態で第 40 回年会が開催されます。来年 2018 年の第 41 回年会は、石野史敏年会長のもと、パシフィコ横浜にて単独年会として開催されます。会員の方々の積極的なご参加をお待ちしております。

第 20 期理事会では、第 19 期理事会および将来計画委員会からの提言をふまえ、以下の 3 点について重点的な議論を進めてまいります。

- 1) **年会のあり方**：これまで当学会では年会長に年会運営を一任する形になっていましたが、今後の年会運営においては年会長と理事会の連携を深めることになりました。これにより、他学会との合同開催等を含め、今後の年会運営のあり方について継続性のある議論を進めていきたいと考えています。
- 2) **国際対応**：学会の国際対応については、年会の一部英語化に加え、2013年より国際会議支援事業によりオリジナリティーの高い国際会議の開催を支援してきました。また、英文の学会誌である『Genes to Cells』の刊行も日本からの研究発信に貢献しています。ただ、近年、中国をはじめとする近隣諸国における生命科学研究は急激に発展していますが、当学会はその変化に十分に対応できているとはいえません。今後、海外の生命科学系学会との連携の可能性も含め、どのような「国際化」が会員にとってメリットがあり、日本の生命科学の発展に貢献できるのか、議論していきます。
- 3) **社会への対応**：昨年は、当学会会員である大隅良典先生がノーベル生理学・医学賞を受賞されるというたいへん喜ばしいニュースがありました。しかしその一方で、生命科学研究、とくに基礎研究をとりまく環境は、年々厳しくなり、課題が山積しています。若手研究者・女性研究者のキャリアパス、研究不正防止・研究倫理教育、小中高生に対する生命科学教育、などの諸問題に対して、各委員会における活動を中心に、積極的に取り組みます。また、生命科学系最大の学会として、政府や文部科学省などに対して政策提言をしていくことも必要だと考えています。すでに、キャリアパス委員会が企画したフォーラムでは文部科学省の方にパネリストとしてご参加いただくなどの試みを行っています。今後、関連学会や、生物科学学会連合、日本学術会議などとの有機的な連携も検討していく予定です。

分子生物学会は設立から約40年の間に多くの研究者と研究分野を取り込みながら、時代の流れとともに、しなやかに変化してきました。この柔軟性こそが当学会の強みです。これからどのように変化していくべきなのか、会員の皆様と一緒に考えていきたいと思っております。皆様のご協力とご支援、各活動への積極的なご参加をどうぞよろしくお願いいたします。

2017年1月
特定非営利活動法人 日本分子生物学会 第20期理事長
(東北大学大学院生命科学研究科)
杉本 亜砂子

第20期役員・幹事・各委員会名簿

理事長

(任期：2017年1月1日～2018年12月31日)

杉本亜砂子 (東北大・生命)

副理事長

小林 武彦 (東大・分生研)、小安重夫 (理研・IMS)

理事

阿形 清和 (学習院大・理)	五十嵐和彦 (東北大・医)
石川 冬木 (京大・生命)	稲田 利文 (東北大・薬)
上田 泰己 (東大・医)	大隅 典子 (東北大・医)
貝淵 弘三 (名大・医)	影山龍一郎 (京大・ウイルス・再生研)
菊池 章 (阪大・医)	木村 宏 (東工大・科学技術創成研究院)
胡桃坂仁志 (早稲田大・先進理工)	後藤由季子 (東大・薬)
小原 雄治 (遺伝研)	塩見 春彦 (慶應大・医)
白髭 克彦 (東大・分生研)	菅澤 薫 (神戸大・バイオシグナル総合研究センター)
中島 欽一 (九大・医)	仲野 徹 (阪大・医/生命機能)
中山 敬一 (九大・生医研)	鍋島 陽一 (先端医療財団先端医療センター)
西田 栄介 (京大・生命)	深水 昭吉 (筑波大・TARAセンター)
正井 久雄 (都医学研)	三浦 正幸 (東大・薬)
水島 昇 (東大・医)	山本 卓 (広島大・理)
吉田 稔 (理研・和光)	

監事

岡田 清孝 (自然科学研究機構 / 龍谷大・農)、近藤 寿人 (京産大・生命)

幹事

庶務幹事 稲田 利文 (東北大・薬)、深川竜郎 (阪大・生命機能)
会計幹事 三浦 正幸 (東大・薬)
編集幹事 上村 匡 (京大・生命)
広報幹事 塩見 春彦 (慶應大・医)
集会幹事 篠原 彰 (第40回年会)、井関祥子 (第41回年会)

第20期執行部

杉本理事長、小林副理事長 (キャリアパス委員長)、小安副理事長、
稲田庶務幹事 (理事)、深川庶務幹事、塩見広報幹事 (理事)

Genes to Cells 編集長

柳田充弘 (沖縄科学技術大学院大学)

賞推薦委員会

後藤由季子 (委員長)、稲田利文、小原雄治、深水昭吉、正井久雄

研究助成選考委員会

影山龍一郎 (委員長)、上田泰己、木村 宏、菅澤 薫、中島欽一

国際会議支援・選考委員会

石川冬木 (委員長)、五十嵐和彦、貝淵弘三、水島 昇、吉田 稔

キャリアパス委員会

小林武彦 (委員長)、井関祥子、大谷直子、加納純子、夾生 (道下) 江利子、
木村 宏、胡桃坂仁志、斉藤典子、中川真一、花嶋かりな、山本 卓

研究倫理委員会

白髭克彦 (委員長)、木村 宏、胡桃坂仁志、菅澤 薫

生命科学教育

胡桃坂仁志 (担当理事)

将来計画委員会

〈検討中〉

「日本分子生物学会 若手研究助成 富澤純一・桂子基金」第2期 基金運営委員会 (任期：2015年1月1日～2017年12月31日)

山本正幸 (委員長)、小原雄治 (副委員長)、上村 匡、大杉美穂、
近藤 滋、塩見美喜子、東山哲也、杉本亜砂子 (職指定)

特定非営利活動法人 日本分子生物学会 倫理要綱 制定について

2017年1月10日

会員の皆様へ

第19期理事長 荒木 弘之
第20期理事長 杉本亜砂子
19期・20期 研究倫理委員長 白髭 克彦

第19期研究倫理委員会での検討作業を経まして、このたび、第19期・第20期合同理事会におきまして『特定非営利活動法人 日本分子生物学会 倫理要綱』を制定いたしました。ここに発表いたします。

* 本倫理要綱に関するご意見等につきましては、以下までお願いいたします。

info@mbsj.jp

制定 2017年1月10日

特定非営利活動法人 日本分子生物学会 倫理要綱

日本分子生物学会は、分子生物学に関する研究・教育を推進するための学術研究及び普及啓発活動を行い、我が国におけるライフサイエンスの進歩に寄与することを目的としている。会員は、「真理の探究」を常に誠実に行うとともに、研究活動が社会からの信頼と負託を前提としていること、また科学者自身が自律的に行動して初めて自由な研究と科学の独立性を保つことが可能になるということを深く認識し、研究活動に関して守るべき「研究モラルとルール」（研究倫理と規範）について習熟することが強く求められる。ここで言う「研究モラルとルール」とは、真実に少しでも近づくために人類が編み出してきた科学的方法論を運用する上でのきまりごとである。このきまりごとを遵守してはじめて、科学者は研究結果の妥当性について論じることが可能となる。以下に指針を示す。

1. 社会的責任

会員は自らの専門知識・能力の維持向上に努め、自らが携わる研究の意義と役割を社会に向けて誠実に説明し、科学的に正確な知識の普及に努める。

2. 公正な研究活動

会員は自らの研究の立案・計画・申請・実施・報告などのすべての過程において誠実に行動する。科学者は研究成果を論文などで公表することで、各自が果たした役割に応じて功績の認知を得るとともに責任を負う。研究・調査データの記録保存や厳正な取扱いを徹底し、ねつ造、改ざん、盗用などの不正行為に加担しないことはもちろん、これらの行為の呼び水となるようなずさんな研究行為も排除する。

また、責任ある研究の実施と不正行為の防止を可能にする公正な環境の確立・維持も自らの重要な責務であることを自覚し、科学者コミュニティ及び自らの所属組織の研究環境の質的向上、ならびに不正行為抑止の教育啓発に真摯かつ継続的に取り組む。また、これを達成するために社会の理解と協力が得られるよう努める。

研究の実施、研究費の使用等にあたっては、法令や関係規則を遵守する。

3. 科学的公平性

会員は、研究・教育・学会活動において科学的方法に基づき公平な対応をする。他者の知的成果などの業績を正当に評価し、名誉や知的財産権を尊重する。

4. 利益相反

会員は、自らの研究、審査、評価、判断、科学的助言などにおいて、個人と組織、あるいは異なる組織間の利益の衝突に十分に注意を払い、公共性に配慮しつつ適切に対応する。

2016年12月6日から2017年1月6日において実施した、第19期・第20期の持回り理事会にて、上記を日本分子生物学会倫理要綱と定める。

2017 年度生命科学系学会合同年次大会 Consortium of Biological Sciences 2017 (ConBio2017) 開催のお知らせ (その 1)

会	期：2017 年 12 月 6 日(水)～9 日(土) (4 日間)
会	場：神戸ポートアイランド (神戸ポートピアホテル、神戸国際会議場、神戸国際展示場、神戸商工会議所)
大 会	長：第 40 回日本分子生物学会年会 年会長 篠原 彰 (大阪大学蛋白質研究所) 第 90 回日本生化学会大会 会 頭 大野 茂男 (横浜市立大学医学部)
演 題 登 録 期 間	：2017 年 7 月 3 日(月)～ 7 月 18 日(火)
事 前 参 加 登 録 期 間	：2017 年 7 月 3 日(月)～ 10 月 16 日(月) *サーバーメンテナンス等の関係で前後する可能性があります
主 催	：日本分子生物学会、日本生化学会
共 催	：FAOBMB
協 賛	：自然史学会連合、日本 RNA 学会、日本味と匂学会、日本医真菌学会、日本遺伝学会、 日本遺伝子細胞治療学会、日本宇宙生物科学学会、日本栄養・食糧学会、 日本エピジェネティクス研究会、日本解剖学会、日本癌学会、日本寄生虫学会、 日本ゲノム編集学会、日本ケミカルバイオロジー学会、日本細菌学会、日本細胞生物学会、 日本酸化ストレス学会、日本時間生物学会、日本実験動物学会、日本神経病理学会、 日本人類遺伝学会、日本生物物理学会、日本生理学会、日本蛋白質科学会、日本動物学会、 日本比較内分泌学会、日本微生物生態学会、日本病理学会、日本プロテオーム学会、 日本放射線影響学会、日本免疫学会、日本薬理学会 (1 月 25 日時点、計 32 学会、順不同)
大会事務局連絡先	：2017 年度生命科学系学会合同年次大会 (ConBio2017) 運営事務局 (株)エー・イー企画内) 〒 101-0003 東京都千代田区一ツ橋 2-4-4 岩波書店一ツ橋別館 4 階 Tel : 03-3230-2744 Fax : 03-3230-2479 E-mail : conbio2017@aeplan.co.jp
合同大会ホームページ	：http://www.aeplan.co.jp/conbio2017

【ご挨拶】

多くの学会で、年に一度すべての会員が参加する大会(年会)を開催しています。その目的は、会員の相互交流の場を提供する事にあり、これを通じて専門領域のさらなる深化と発展を促すと同時に、会員が専門外の関連領域の広い視野を養うことにあると思います。

日本生化学会が 1924 年(大正 14 年)に第 1 回の大会を開催して以降、今回が 90 回目の大会となります。日本分子生物学会が 1978 年(昭和 53 年)に第 1 回の年会を開催して以降、今回が 40 回目の大会となります。この二つの学会は、分子及び遺伝子の構造と機能という学問領域を共有し、学会員の重なりが多く、これまで合同の大会(年会)を幾度も開催して参りました。

この間、分子及び遺伝子の同定及び構造解析に関わる研究手法は革新的に発展しました。また、生体内の分子及び遺伝子の動態や動きを捉える手法、分子及び遺伝子の全貌を捉える手法が大きく進展しています。同時に、分子及び遺伝子各々の細胞レベルでの役割、個体レベルでの役割も、大きく進展しています。そして、分子及び遺伝子の構造及び機能を知るための様々な革新的な研究手法は、様々な学問領域と相互作用しながら、生命科学の様々な領域に大きな発展と変革を及ぼし、学問領域の壁を取り払いつつあります。

現在の生命科学の研究者は、好むと好まざるとに関わらず、分子及び遺伝子に紐付けられて蓄積した生命科学分野の

膨大な研究成果と日々向き合わざるを得ない状況が生じています。これに加えて、人口知能等情報処理技術の進展、研究成果の社会への説明と還元努力の必要性など、生命科学の研究現場を取り巻く状況は、まさに日進月歩の勢いで変化しています。

このような状況において、生命科学の各専門領域がさらに深化・発展するために、そして研究現場の研究者が新しい時代の生命科学研究に必要な素養を養う為に、「学会の枠」を越えた新しい場が必要であると考えました。本大会では、その試みの一つとして、これまで分子生物学会・生化学会の二学会で行ってきた合同年次大会の枠組みを広げ、生命科学分野の広い分野の学会と連携した合同大会を企画致しました。

本大会では、分子生物学会・生化学会の企画に加えて、協賛学会にも企画に協力していただきます。また、協賛学会の会員には分子生物学会、生化学会の会員と同じ条件で大会に参加、演題発表、公募ワークショップ企画提案をしていただくこととなります。

生命科学学会連合（30学協会）、日本医学会連合基礎部会（14学会）の学会その他に協賛を打診し、多くの学会からご賛同をいただきました（32学会）。ここにお礼を申し上げますと共に、本合同大会の成功に向けてご支援をお願いいたします。

2017年1月

第40回日本分子生物学会年会 年会長 篠原 彰
第90回日本生化学会大会 会 頭 大野 茂男

【大会組織】

〈大会長〉

第40回日本分子生物学会年会 年会長 篠原 彰（大阪大学）
第90回日本生化学会大会 会 頭 大野 茂男（横浜市立大学）

〈日本分子生物学会・日本生化学会プログラム委員〉

青木 淳賢（東北大学） 菅澤 薫（神戸大学）
五十嵐和彦（東北大学） 田之倉 優（東京大学）
石川 冬木（京都大学） 中野 明彦（東京大学 / 理化学研究所）
石原 直忠（久留米大学） 中山 敬一（九州大学）
伊東 健（弘前大学） 林 茂生（理化学研究所）
上村 匡（京都大学） 東山 哲也（名古屋大学）
遠藤斗志也（京都産業大学） 平野 達也（理化学研究所）
大隅 典子（東北大学） 深見希代子（東京薬科大学）
貝淵 弘三（名古屋大学） 三木 邦夫（京都大学）
黒田 真也（東京大学） 水野 健作（東北大学）
近藤 滋（大阪大学） 宮野 悟（東京大学）
佐藤美由紀（群馬大学） 柳 茂（東京薬科大学）
白髭 克彦（東京大学）

（2017年1月25日現在 敬称略、50音順）

〈協賛学会推薦プログラム委員〉

赤池 孝章（東北大学）〔日本酸化ストレス学会推薦〕
石濱 泰（京都大学）〔日本プロテオーム学会推薦〕
井上 豪（大阪大学）〔日本蛋白質科学会推薦〕
入江 直樹（東京大学）〔日本動物学会推薦〕
小川 道永（国立感染症研究所）〔日本細菌学会推薦〕
小椋 義俊（九州大学）〔日本細菌学会推薦〕
加藤 晃一（岡崎統合バイオサイエンスセンター）〔日本蛋白質科学会推薦〕

- 黒柳 秀人 (東京医科歯科大学) [日本 RNA 学会推薦]
 小林 純也 (京都大学) [日本放射線影響学会推薦]
 佐竹 炎 (サントリー生命科学財団 生物有機科学研究所) [日本比較内分泌学会推薦]
 佐渡 敬 (近畿大学) [日本遺伝学会推薦]
 高田 穰 (京都大学) [日本放射線影響学会推薦]
 谷 時雄 (熊本大学) [日本 RNA 学会推薦]
 徳永 勝士 (東京大学) [日本人類遺伝学会推薦]
 朝長 毅 (医薬基盤・健康・栄養研究所) [日本プロテオーム学会推薦]
 永井 健治 (大阪大学) [日本生物物理学学会推薦]
 中村 和弘 (名古屋大学) [日本生理学会推薦]
 成田 年 (星薬科大学) [日本薬理学会推薦]
 西田 基宏 (生理学研究所) [日本酸化ストレス学会推薦]
 早津 雅仁 (農業環境変動研究センター) [日本微生物生態学会推薦]
 菱田 卓 (学習院大学) [日本遺伝学会推薦]
 深田 吉孝 (東京大学) [日本時間生物学学会推薦]
 吉岡 充弘 (北海道大学) [日本薬理学会推薦]
 吉澤 晋 (東京大学) [日本微生物生態学会推薦]
 吉村 昭彦 (慶應義塾大学) [日本免疫学会推薦] (2017年1月25日現在 敬称略、50音順)

【参加登録】

事前登録受付期間：2017年7月3日(月)～10月16日(月)

◆参加登録費

種 別		金 額
事 前	会 員※	11,000
	学 生 会 員 (大学院生・学部学生) ※	3,000
	学 生 非 会 員 (大学院生・学部学生)	5,000
	非 会 員	17,000
当 日	会 員※	13,000
	学 生 会 員 (大学院生・学部学生) ※	5,000
	学 生 非 会 員 (大学院生・学部学生)	7,000
	非 会 員	22,000

※日本生化学会、FAOBMB、協賛学会 (5頁参照) の会員を含む。

【プログラム概要】

◆プレナリーレクチャー

すべてのプレナリーレクチャーはビデオ撮影し、会期終了後にオンデマンド配信する予定です。

会期終了直後は参加者のみを対象としたサイトで配信しますが、その後、半永久的に視聴できる研究・教育コンテンツとして、日本分子生物学会と日本生化学会のホームページ上に残していきたいと考えています。

〈プレナリーレクチャー演者〉

- 審良 静男 (大阪大学)
 遠藤 章 (株バイオファーム研究所 / 東京農工大学)
 大隅 良典 (東京工業大学)
 岸本 忠三 (大阪大学)

坂口 志文 (大阪大学)
田中 啓二 (東京都医学総合研究所)
谷口 維紹 (東京大学)
本庶 佑 (京都大学)
柳田 充弘 (沖縄科学技術大学院大学)
山中 伸弥 (京都大学)

(敬称略、50音順)

◆シンポジウム

日本分子生物学会・日本生化学会の合同企画によるシンポジウム 11 テーマ、協賛学会の提案によるシンポジウム 21 テーマを開催いたします。

〈日本分子生物学会・日本生化学会の合同企画によるシンポジウム〉

1. 糖質生物学・脂質生物学 分野

脂質を動かす、脂質が動かす～ここまでわかった細胞膜脂質研究～

New aspect of phospholipid dynamics of cell membrane: lipids regulate the fundamental cell functions

オーガナイザー：青木 淳賢 (東北大学)、深見 希代子 (東京薬科大学)

予定講演者：山本 希美子 (東京大学)、鈴木 淳 (大阪大学)、新井 洋由 (東京大学)、

進藤 英雄 (国立国際医療研究センター)、佐々木 雄彦 (秋田大学)、深見 希代子 (東京薬科大学)

リン脂質は細胞膜の単なる構成成分ではなく、基礎的な細胞機能から細胞内外へのシグナル発信にまで関わる非常に動的な生体物質である。リン脂質はゲノムにコードされておらず、複数の代謝酵素が関与する複雑な過程で生合成される。さらに、リン脂質のオルガネラ分布や細胞膜内層外層の非対称性分布等の空間的動態も厳密に制御されている。近年、リン脂質の代謝酵素や動態を制御する分子の実態が明らかにされ、また、リン脂質の可視化技術や質量分析技術等の発展により、リン脂質の量的、空間的動態制御の道が拓かれてきた。本シンポジウムでは、細胞膜脂質の動態変化が細胞機能さらには疾患発症等にどのように関わっているのか、分野を横断した展開をしたい。

2. タンパク質 分野

構造生物学の先端実験法

Advanced experimental methods for structural biology

オーガナイザー：田之倉 優 (東京大学)、三木 邦夫 (京都大学)

予定講演者：竹田 一旗 (京都大学)、吾郷 日出夫 (理化学研究所)、海野 昌喜 (茨城大学)、

小島 正樹 (東京薬科大学)、柺尾 豪人 (京都大学)、岩崎 憲治 (大阪大学)

生体高分子の構造情報を得るための実験的手法には、近年さまざまな進展があり、手法としての深化や多様化が進んでいる。それにしたがって、構造生物学的な視点も、これまでよりも拡がりをもつものになっている。例えば、立体構造の微細化・高精度化、あるいは対象試料や測定状態の多様化などである。本シンポジウムでは、X線および中性子線の回折・散乱、X線自由電子レーザー、NMR、低温電子顕微鏡など、さまざまな構造生物学の実験手法について、その最先端の現状を紹介し、構造生物学における実験法の将来を模索する。

3. 酵素・レドックス・生体エネルギー 分野

レドックスとエネルギー代謝の時空間的制御機構解明から見える新たな疾病制御戦略

Redox, Energy, Disease

オーガナイザー：伊東 健 (弘前大学)、柳 茂 (東京薬科大学)

予定講演者：未定

生命の起源にはレドックスを介した化学浸透によるエネルギー産生が、そして真核細胞の起源には細胞内共生によるミトコンドリアの誕生がある。この進化の起源に運命付けられたエネルギー的制約により、個体の老化や加齢による変性疾患などを考えることができる。このシンポジウムでは、レドックスシグナル、ミトコンドリアクオリティー制御、核—ミトコンドリア間のクロストーク、ミトコンドリアダイナミクスなどに焦点をあて、レドックス制御とエネルギー代謝の時空間的制御機構について最新の知見を紹介する。さらに疾患との関わりについて、とりわけ加齢に伴って発症するがんや神経変性疾患に対する次世代型の疾患予防戦略について議論したい。

4. 細胞の構造と機能 分野

オルガネラバイオロジーの新時代

New era of organelle biology

オーガナイザー：石原 直忠（久留米大学）、佐藤 美由紀（群馬大学）

予定講演者：水島 昇（東京大学）、中戸川 仁（東京工業大学）、杉浦 歩（東京薬科大学）

オルガネラの機能や形を制御する基本メカニズムについては飛躍的に理解が進み、2013年と2016年にはこの分野から2度のノーベル賞も生まれた。オルガネラ研究は次のステージへと深化し、詳細な分子機構の解明に加え、多彩な生理機能やその調節機構も明らかになってきている。一方で、これまでの概念を覆すような新しい発見も生まれており、いまだ活発な議論が交わされている領域である。本シンポジウムではオートファジーやミトコンドリア膜動態、ペルオキシソーム生合成など様々なオルガネラに関する最新の研究成果を紹介し、次世代のオルガネラバイオロジーについて議論したい。

5. 細胞応答 分野

細胞の進路選択

Course decision of cells

オーガナイザー：中野 明彦（東京大学／理化学研究所）、水野 健作（東北大学）

予定講演者：伊藤 俊樹（神戸大学）、井上 尊生（Johns Hopkins University）、稲垣 直之（奈良先端科学技術大学院大学）、戸島 拓郎（理化学研究所）、東山 哲也（名古屋大学）

細胞は、細胞外のさまざまな環境・刺激に応答し、さまざまな行動を起こす。誘因物質に向かったり忌避物質から遠ざかったりする走化性行動は、細胞骨格の再構築や膜交通の活性化などを伴うダイナミックな過程であることが知られている。中でも「ガイダンス」は、細胞の伸張突起を大きく変形させながら正しい進路に導く細胞応答であり、神経細胞の軸索や種子植物の花粉管において分子機構が詳細に理解されつつある。本シンポジウムでは、この「ガイダンス」に焦点を当て、関連トピックをあわせてこの分野のトップランナー達に講演をいただき、今後の進路について議論したい。

6. ゲノムと遺伝情報 分野

遺伝情報の維持と制御の多層的理解に向けて

Multi-layer regulation and maintenance of genetic information

オーガナイザー：山口 雄輝（東京工業大学）、林 眞理（京都大学）

予定講演者：未定

遺伝情報を担う超巨大分子複合体である染色体上では、転写、複製、接着、凝集、脱凝集など実に様々な反応が共役しながら進行し、遺伝情報の適切な発現と正確な維持が保障されている。これらの反応は局所的染色体構造から染色体ループ、高次染色体ドメイン、全染色体の挙動など多層的な要素に影響を受けていることが徐々に明らかになっているが、未だにその全容解明には至っていない。そこで本シンポジウムでは、近年急速に発達しているゲノム編集や染色体高次構造解析手法などの新規技術を活用したアプローチによる最新の研究を紹介し、この多層的制御の理解に新たな光を当てた議論を展開したい。

7. 発生・再生 分野

発生生物学—これからの挑戦

オーガナイザー：近藤 滋（大阪大学）、林 茂生（理化学研究所）

予定講演者：梅園 良彦（兵庫県立大学）、大澤 志津江（京都大学）、遠山 祐典（MBI シンガポール）、林 克彦（九州大学）、小田 祥久（国立遺伝学研究所）、丹羽 隆介（筑波大学）

今後の発生生物学の目指すべき課題について6つの話題を設定し、気鋭の若手に分野の過去と未来についてのオーバービューに時間をとって語ってもらい、その上で各自の研究を紹介してもらう。

8. 疾患生物学 分野

最新オミクス科学によるがんの理解と治療戦略

Deciphering cancer biology and therapeutic strategy by the cutting-edge OMICS sciences

オーガナイザー：中山 敬一（九州大学）、宮野 悟（東京大学）

予定講演者：宮野 悟（東京大学）、牛島 俊和（国立がん研究センター研究所）、油谷 浩幸（東京大学）、
中山 敬一（九州大学）、曾我 朋義（慶應義塾大学）

近年の次世代シーケンサーおよび質量分析計の急速な進歩および普及は、網羅的な視点から大量のデータを扱う「ビッグデータ時代」の幕開けを生命科学にもたらした。オミクス科学の到来によって、科学者の興味と偶然の発想に左右される従来型の「仮説ドリブン研究」から、「データドリブン研究」への転換が各分野で始まりつつある。がんはそもそも遺伝子の変異によるシステム破綻が起こり、無限増殖ループに陥った状態であるから、システム全体としてがん細胞が正常細胞と何が異なるのかを網羅的に調べれば、その特性の理解や治療法の探索が可能になると考えられている。本シンポジウムでは、ゲノム・エピゲノム・トランスクリプトーム・プロテオーム・メタボロームの各階層におけるオミクス科学の最先端の知識から、がん克服への道を探る。

9. 神経科学 分野

神経科学研究技術の最前線

Frontiers in technology for neuroscience

オーガナイザー：貝淵 弘三（名古屋大学）、大隅 典子（東北大学）

予定講演者：永井 拓（名古屋大学）、松尾 直毅（大阪大学）、恒川 雄二（理化学研究所）、今吉 格（京都大学）、
Gonçalo Castelo-Branco（カロリンスカ研究所）

究極の目的として我々の脳やこころを理解するためには、脳・神経系の分子や細胞を同定したり制御するための精緻な技術が必要である。幸い、ここ数年の間に種々の分子生物学的解析技術が神経科学分野に応用されるようになってきただけでなく、神経科学分野で開発された技術が逆に遺伝子発現制御にも応用されることにもなった。本シンポジウムでは、プロテオミクス、細胞特異的遺伝子改変、標的細胞ゲノム編集技術、遺伝子発現の光操作、1細胞遺伝子発現解析など、神経科学研究における最先端技術について紹介する。

10. 植物、農生物学、食品科学 分野

生殖サイエンスのフロンティア ～分子・細胞動態から農業展望まで～

Frontiers of Reproduction Researches -from Molecular and Cellular Dynamics to
Agricultural Visions-

オーガナイザー：東山 哲也（名古屋大学）、木下 哲（横浜市立大学）

予定講演者：辻 寛之（横浜市立大学）、吉村 崇（名古屋大学）、赤木 剛士（京都大学）、
伊川 正人（大阪大学）、水多 陽子（名古屋大学）

「いかにして子孫を残すか？」は生物学における根源的な問題である。多くの生物は、子孫を残すために最も良い環境条件を感知し、生殖相手を引き寄せ、極めて厳密な選択過程を経て子孫を残す。近年、動植物においてその制御機構の一端が、最新のテクノロジーにより次々と明らかにされている。また、こうした知見を人類の営みに還元すべく、農業展開を視野にいたした試みが始まっている。本シンポジウムでは、動植物における生殖サイエンスのフロントランナーから話題提供頂き今後の展望を議論したい。

11. バイオテクノロジー、新領域、進化 分野

シン・バイオ - 分野を超えるインパクト -

Impacts beyond the disciplines

オーガナイザー：黒田 真也（東京大学）、白髭 克彦（東京大学）

予定講演者：未定

サイエンスを志すみなさんには、それまで生きてきた人生観・世界観を変えるアッと驚くサイエンスとの出会いの原体験があるはず。そういう研究は分野を超えて、あなたや私の心に直接訴えてくるインパクトがあるものです。今回、座長を仰せつかった二人は研究分野が違うので分野設定に悩みました。そこで、原点に立ち戻りお互いの好きなサイエンスを集めました。そして、それは驚くほどオーバーラップしていました。今回のメニューはちょっと、いやかなり自信があるかも。きっとこのセッションは皆さんにもインパクトを与えることができるのではと思います。そう思ったら感想を聞かせてくれるとうれしいです。

〈協賛学会の提案によるシンポジウム〉

〈日本 RNA 学会〉

RNA 修飾によるエピトランスクリプトーム制御の新展開

Emerging world of RNA modifications and epitranscriptome

オーガナイザー：鈴木 勉（東京大学）

予定講演者：Chuan He（University of Chicago）、河原 行郎（大阪大学）、鈴木 勉（東京大学）

RNA は転写後に修飾を受けて成熟し、その本来の機能を発揮することができる。現在までに 130 種類を超える多様な RNA 修飾があらゆる生物種から見つかった。RNA 修飾は単純な RNA 分子に化学的な多様性を付与することで、様々な生命現象に関わることが知られている。RNA 修飾は、修飾酵素 (writer) と脱メチル化酵素 (eraser) によってダイナミックに制御され、またリーダータンパク質によってその情報が読み取られる。また、RNA 修飾の欠損や制御異常はヒトの疾患の原因になることが知られている。この分野を牽引するエキスパートと最新の成果を共有したい。

〈日本遺伝学会〉

遺伝学とエピ遺伝学

Genetics and Epigenetics

オーガナイザー：佐々木 裕之（九州大学）、角谷 徹仁（東京大学）

予定講演者：佐々木 裕之（九州大学）、角谷 徹仁（東京大学）、小林 武彦（東京大学）、立花 誠（徳島大学）、
深川 竜郎（大阪大学）、齋藤 都暁（慶應義塾大学）

エピジェネティクスは、当初は個体発生を理解するための考察からはじまりましたが、今では、ゲノムの進化や染色体の制御、再生医療、集団遺伝学まで含め、多くの生命科学分野における考え方の枠組として強力で働いています。本シンポジウムでは、遺伝学の延長としてエピジェネティクスをとらえ、遺伝学上の問題を解くためにエピジェネティクスを活用している演者により、この発展しつつある分野の熱気と展望を伝えることを目指します。

〈日本遺伝子細胞治療学会〉

遺伝子治療ベクターの技術革新

Advances in vector technology innovation towards clinical gene therapy

オーガナイザー：三谷 幸之介（埼玉医科大学）、岡田 尚巳（日本医科大学）

予定講演者：谷 憲三朗（東京大学）、中村 貴史（鳥取大学）、中西 真人（産業技術総合研究所）、
久保 秀司（兵庫医科大学）、宮川 世志幸（日本医科大学）

遺伝子発現ベクターや遺伝子導入細胞を活用した遺伝子治療薬が欧米を中心に開発され、一部は既に販売承認されている。近年ではベクターの改良や治療技術の技術革新に伴い、安全性や有効性が格段に高まり、様々な神経・筋疾患、網膜疾患やがんに対する効果が期待されている。ウイルスベクターに関してはこれまで様々なものが研究され、幹細胞への遺伝子導入にはレンチウイルス、神経・筋組織にはアデノ随伴ウイルスに由来するベクターが有用であるが、さらに今後、臨床的有効性や安全性を高めるため、様々な新規ベクターの開発が期待される。本シンポジウムでは遺伝子治療ベクターの技術革新を紹介し、今後の方向性や課題について議論する。

〈日本宇宙生物科学学会〉

宇宙環境利用生物学 — 重力・放射線の生物影響 —

Life Science Research in Space: Gravitational and Space Radiation Biology

オーガナイザー：東谷 篤志（東北大学）、日出間 純（東北大学）

予定講演者：古川 聡（JAXA）、高橋 秀幸（東北大学）、日出間 純（東北大学）、高橋 昭久（群馬大学）、
茶谷 昌宏（昭和大学）、森田 啓之（岐阜大学）、成瀬 恵治（岡山大学）

今日、人類は宇宙という微小重力かつ特殊な宇宙放射線環境へと活動の場を広げつつある。しかしながら、人類が宇宙での長期活動を可能にするためには、微小重力環境、宇宙放射線環境、そしてそれらの複合作用が生物（動植物）に及ぼす影響を分子、細胞、個体レベルで的確に把握する必要がある。本シンポジウムでは、宇宙生物科学研究に携わる研究者を迎え、これまで国際宇宙ステーション（ISS）を利用して行われてきた宇宙生命科学研究、また現在計画中の宇宙実験を紹介していただく。そして、今後、宇宙生物科学研究分野に課せられた課題、展望について議論する。

〈日本寄生虫学会〉

原虫学・寄生虫学が現代のトップサイエンスにもたらす貢献

Impact of modern protistology and parasitology on cutting edge science

オーガナイザー：野崎 智義（国立感染症研究所）

予定講演者：平井 誠（順天堂大学）、案浦 健（国立感染症研究所）、見市 文香（佐賀大学）、

福岡 健 ダニエル（長崎大学）、Ghulam Jeelani（国立感染症研究所）、西川 義文（帯広畜産大学）、

山本 雅裕（大阪大学）

現在の原虫学・寄生虫学は最先端の科学全般、特に生化学・分子生物学・生化学・遺伝学等における技術革新の恩恵を受け、高いレベルの研究成果を生み続けている。同時に過去の原虫学・寄生虫学は、現在の分子生物の教科書に標準的に見られるトリパノソーマの抗原変異 (Antigenic variation)、RNA 編集 (RNA editing)、トランススプライシング (trans-splicing) などの生命機構の根幹において重要な生命機能の発見においてパラダイム転換を生む重要な役割を果たした。本シンポジウムでは過去 10 年の間に原虫学・寄生虫学が生んだ他領域への影響力の高い研究成果の代表的なものを紹介し、今後の原虫学・寄生虫学の生命科学における重要な立場と役割について論じたい。

〈日本ゲノム編集学会〉

ゲノム編集技術の現状と展望

Recent advances and prospects in genome editing technology

オーガナイザー：山本 卓（広島大学）、真下 知士（大阪大学）

予定講演者：佐藤 守俊（東京大学）、佐久間 哲史（広島大学）、畑田 出穂（群馬大学）、

真下 知士（大阪大学）、堀田 秋津（京都大学）、佐々木 えりか（実験動物中央研究所）

目的の遺伝子を自在に改変するゲノム編集技術は、2013 年始めの CRISPR-Cas9 の開発によって、全てのライフサイエンス研究者のための技術となった。本シンポジウムでは、ゲノム編集によって可能となってきた遺伝子改変技術やモデル細胞・動物作製に焦点を当て、最新の研究成果を紹介するとともに、ゲノム編集を用いたライフサイエンス研究の今後の展開について議論する。

〈日本ケミカルバイオロジー学会〉

ケミカルバイオロジー研究の最前線

Chemical biology update

オーガナイザー：浦野 泰照（東京大学）、萩原 正敏（京都大学）

予定講演者：萩原 正敏（京都大学）、吉田 稔（理化学研究所）、長野 哲雄（東京大学）、

上杉 志成（京都大学）、袖岡 幹子（理化学研究所）、浦野 泰照（東京大学）

ケミカルバイオロジーとは、全く新たな機能性化学ツールの開発により、生物学・医学研究を強力に推し進めることを狙う研究分野である。例えば創薬研究において、その出発点となる治療標的の同定と病態要因の解明が重要であることは言を俟たないが、近年全く新たな発想に基づく画期的な機能性化学ツールが数多く開発され、生命現象や病態の新たな側面を浮き彫りにすることが可能となっただけでなく、全く新たな視点からの生体機能や病態の精密制御につながる画期的な成果も報告されるようになってきた。本シンポジウムでは、日本ケミカルバイオロジー学会で報告された最新ケミカルバイオロジー技術を、その開発経緯から応用例まで幅広く紹介し、参加者の研究領域との分野横断的な研究の促進を図る。

〈日本細菌学会〉

いま、細菌学者は何をやっている？ —バクテリアの病理と生理と分子生物学—

What's going on in Bacteriology?

- From a perspective of bacterial pathology, physiology, and molecular biology-

オーガナイザー：小椋 義俊（九州大学）、小川 道永（国立感染症研究所）

予定講演者：中根 大介（学習院大学）、三室 仁美（東京大学）、垣内 力（東京大学）、西野 邦彦（大阪大学）、

芦田 浩（千葉大学）、藤永 由佳子（金沢大学）

細菌学は、17 世紀の微生物の発見から始まり、パスツールやコッホらの尽力により学問分野として確立された。それ以来、細菌学は、様々な生命科学研究に多大な影響を与え、新たな学問領域を提供し続けている。日本の細菌学の

発展を支えてきた日本細菌学会は、北里柴三郎先生が開催した第1回大会から今年で90年を迎えた。いま、細菌学者は何をやっているのか？本シンポジウムでは、次世代の細菌学を担う6名の研究者に、バクテリアの病理・生理・分子生物学について、最新の知見を紹介頂き、これからの生命科学に細菌学者がどのように貢献できるか議論したい。

〈日本細胞生物学会〉

イメージングを超える：細胞生物学の新しい挑戦

Beyond Imaging: new challenges in cell biology

オーガナイザー：岡田 康志（理化学研究所）

予定講演者：岡田 康志（理化学研究所）、青木 一洋（基礎生物学研究所）、大浪 修一（理化学研究所）、
Bo Huang（UCSF）

これまで、細胞生物学は、新しい顕微鏡技術が別の研究手法と組み合わせられることで発展してきた。電子顕微鏡による微細形態観察と、細胞内分画法などの生化学的手法・分子遺伝学的手法の組合せによって、細胞生物学が誕生した。蛍光顕微鏡法とGFP、組換えDNA技術の組合せによって、細胞生物学研究のスタイルが大きく変わったのも記憶に新しい。近年、超解像顕微鏡に代表される新しい顕微鏡技術や光遺伝学など光を用いた操作手法が活発に開発されている。本シンポジウムでは、これら新技術を開発・活用する若手研究者を集め、次世代の細胞生物学について考えてみたい。

〈日本酸化ストレス学会〉

活性イオウ種を介したレドックスシグナリングとエネルギー変換

Thiol and sulfide-mediated redox signaling and bioenergetics

オーガナイザー：赤池 孝章（東北大学）、西田 基宏（生理学研究所）

予定講演者：Jon M. Fukuto（Sonoma State University）、赤池 孝章（東北大学）、
市瀬 史（マサチューセッツ総合病院／ハーバード大学）、西田 基宏（生理学研究所）、
本橋 ほづみ（東北大学）、Peter Nagy（National Institute of Oncology）

生体内のレドックスバランスは、親電子物質の産生系とその消去・代謝系によって厳密に制御されている。活性酸素や一酸化窒素、およびこれらに由来する二次活性種によって生成される内因性親電子物質や、食事や環境に含まれる外因性親電子物質は、主に細胞内タンパク質に含まれるシステインチオール基や生体内硫化物と化学的に反応することでレドックスシグナリングを活性化する。一方、細胞内で生成される求核性の高い活性イオウ種（システインパーサルフィドやポリサルフィドなど）は親電子物質と特異的に反応し、その代謝・消去に関与する。最近の研究から、これら活性イオウ種がミトコンドリアで産生され、電子伝達系の制御にも積極的にかかわることが明らかになってきた。本シンポジウムでは、活性イオウ種による親電子物質を介するレドックスシグナリングの制御やその細胞内エネルギー変換における役割について世界の最先端研究を紹介する。

〈日本時間生物学会〉

環境周期と生物時間のメタ・チューニング

Meta-tuning of biological timing into the environmental cycles

オーガナイザー：八木田 和弘（京都府立医科大学）、深田 吉孝（東京大学）

予定講演者：秋山 修二（分子科学研究所）、大出 晃士（東京大学）、吉種 光（東京大学）、
Jean-Michel Fustin（京都大学）、八木田 和弘（京都府立医科大学）、遠藤 求（京都大学）

地球上に生命が誕生したのは、37億年前ともそれ以前とも言われている。それから現在まで、生物は地球上で多様に進化し繁栄を続けてきた。その過程で、昼夜のリズムや公転に伴う季節性変動など、変えようがない地球環境に適応することは、生物が生き延び、繁栄するための鍵であった。このように、地球環境の周期性変動に生体機能を適合させることは、生命活動効率の最大化につながり、生存に有利であったと考えられる。最近、生体リズムを表出するにあたって、様々な生命機能リズムを同期させ、効率的に時間情報を機能発現に繋げていく姿が浮かび上がってきた。地球の動きに規定された環境サイクルと生命機能とのメタ・チューニングによる統合的な生体環境適応の原理について、学際的なメンバーで議論したい。

〈日本人類遺伝学会〉

ゲノム医科学の新展開

New perspectives in medical genomics

オーガナイザー：徳永 勝士（東京大学）、戸田 達史（神戸大学）

予定講演者：長崎 正朗（東北大学）、松本 直通（横浜市立大学）、戸田 達史（神戸大学）、
徳永 勝士（東京大学）、岡田 随象（大阪大学）、武藤 香織（東京大学）

本シンポジウムでは、ゲノム医学領域における諸分野の最近の成果について紹介し、今後の展望について議論する。(1)大規模全ゲノム配列解析により詳細な多様性データが得られており、日本人に適したゲノムワイド関連解析(GWAS)用 SNP アレイも開発された。(2)次世代シーケンサーの活用により希少疾患や難病の原因遺伝子変異が次々に明らかとなっている。(3)原因遺伝子変異の機能が解明され、新たな治療法の開発に繋がる例も出てきた。(4)感染症を含む多因子疾患についても感受性遺伝子多型・変異の探索が加速化されている。(5)大規模メタ GWAS データの情報解析によって発症機序の理解や新規薬剤の開発が進んでいる。(6)このような研究を健全に進め、ゲノム医療を実現するための研究倫理の確立や社会への説明と発信が極めて重要である。

〈日本生物物理学会〉

少数性の生命科学：Minor 要素の振舞いがシステム全体に影響を及ぼす思わぬ仕掛け

Minority in life science: An unexpected trick by the action of minor elements that affect the whole system

オーガナイザー：永井 健治（大阪大学）

予定講演者：小松崎 民樹（北海道大学）、永井 健治（大阪大学）、田端 和仁（東京大学）、
前島 一博（国立遺伝学研究所）、石島 秋彦（大阪大学）、上田 泰己（東京大学）

一見、一様にみえる細胞集団を注意深く観察すると、異質な細胞がわずかに含まれていることが見出される。しかも、大多数の細胞集団の中において圧倒的少数であるこの細胞が、細胞集団全体の振る舞いを大きく変えてしまうことがある。本シンポジウムでは、従来見過ごされてきたこのようなマイノリティ細胞を科学するために必要な、細胞集団中の全ての細胞を高精度に観察する技術をはじめ、マイノリティ細胞を生成するメカニズムや法則に関する理論、さらにその生物学的な役割について議論する。

〈日本生理学会〉

生体恒常性の脳内メカニズム：生命維持の本質に迫る

Central circuits for homeostasis: the core mechanism of vital functions

オーガナイザー：中村 和弘（名古屋大学）、桑木 共之（鹿児島大学）

予定講演者：鬼丸 洋（昭和大学）、桑木 共之（鹿児島大学）、三枝 理博（金沢大学）、
檜山 武史（基礎生物学研究所）、中村 和弘（名古屋大学）

生体恒常性維持を担う仕組みには、体液調節、体温調節、睡眠調節、循環調節、呼吸調節などさまざまな自律的調節系があり、これらは生命維持システムの根幹の生理機能である。しかし、それらを制御する中枢神経機構にはまだ不明な部分が多い。そうした恒常性維持調節を担う中枢神経機構の本質の解明に「真正面から」取り組んでおられる若手からシニアまでの先生方をお招きし、各調節系の中枢神経機構について、基礎知識から最新の研究成果までを御講演頂く。こうした調節系の神経機構同士の接点や機能的相互作用を見出すことで、生体の恒常性維持全体の統合的仕組みの解明につなげることを目指す。

〈日本蛋白質科学会〉

拡大する蛋白質科学のフロンティア

New frontiers in protein sciences: From central dogma to diseases

オーガナイザー：田口 英樹（東京工業大学）、遠藤 斗志也（京都産業大学）

予定講演者：田口 英樹（東京工業大学）、高田 彰二（京都大学）、濡木 理（東京大学）、
野地 博行（東京大学）、遠藤 斗志也（京都産業大学）、田中 元雅（理化学研究所）

生命科学の各分野がボーダーレスとなっている中で蛋白質科学も例外ではない。精製蛋白質を用いた立体構造決定、安定性・フォールディング研究と言った「古典的」な蛋白質科学が深化しているだけでなく、細胞生物学を始めとしたさまざまな分野に越境して幅を拡げつつある。本シンポジウムでは、従来の蛋白質科学の枠組みを超えたフロンティアでの研究を紹介することで、今後の生命科学における蛋白質科学の役割について議論を深めたい。

〈日本微生物生態学会〉

地球生命圏を支える微生物 —その新たなる生態と機能

Microorganisms creating biosphere on the earth: their novel ecology and functions

オーガナイザー：南澤 究（東北大学）、吉澤 晋（東京大学）

予定講演者：花田 智（首都大学東京）、吉澤 晋（東京大学）、稲垣 史生（海洋研究開発機構）、
菊池 義智（産業技術総合研究所）、南澤 究（東北大学）

微生物は全ての生物の中で最も生息圏が広く、超深海や温泉などの極限環境から我々の腸内まであらゆる環境を住処にすることができる。これは、約 40 億年の時間をかけて作り上げられた微生物機能の驚異的な多様性を示すと同時に微生物が地球生命圏を支えていること意味している。本シンポジウムでは、様々な環境微生物研究の最新の知見を発表していただき、近年明らかになった新たな生態や生物機能について議論したい。また、生命科学研究やそれを支えるバイオリソース構築における非モデル生物研究の重要性と貢献についても考えてみたい。

〈日本病理学会〉

病理を活用したがん研究の面白さ—分子病理学最前線—

Exciting pathology-Research front of molecular pathology-

オーガナイザー：田中 伸哉（北海道大学）、竹内 賢吾（がん研究会）

予定講演者：清川 悦子（金沢医科大学）、榎本 篤（名古屋大学）、津田 真寿美（北海道大学）、
竹内 賢吾（がん研究会）、金井 弥栄（慶應義塾大学）、西原 広史（北海道大学）

がん遺伝子の発見から 30 年以上が経過した現在、がん化のシグナル系の解明が進み、次世代シーケンサーの登場でがんの新規遺伝子異常の発見やプロファイル分類が展開され、がんの個別化医療も急速に進んでいる。その中で今回病理学会の共催シンポジウムを企画するにあたっては、病理学の研究としての魅力をアピールするために、病理学を基盤とするがん研究の最前線的话题を紹介したい。ライブパソロジー、バイオマテリアルとがん幹細胞研究、治療標的としてのがん浸潤研究、モデル系から新治療薬の同定、新しいキメラ遺伝子の発見、病理検体バンクからの研究の展開、NGS を用いた変異解析と個別化医療などのテーマについて、病理学的手法を中心とする研究はもとより、分子生物学的解析であっても、研究の一部に病理学が組み込まれており、成果を挙げる上で、病理学がキーとなっている最前線の研究について幅広く議論できるシンポジウムとしたい。

〈日本プロテオーム学会〉

プロテオミクス：複雑性への挑戦 ～分離か選択か？～

Proteomics: Challenge to the sample complexity

オーガナイザー：梶 裕之（産業技術総合研究所）、植田 幸嗣（がん研究会）

予定講演者：石濱 泰（京都大学）、松本 雅紀（九州大学）、朝長 毅（医薬基盤・健康・栄養研究所）

五島 直樹（産業技術総合研究所）、植田 幸嗣（がん研究会）、梶 裕之（産業技術総合研究所）

タンパク質の総体を意味する「プロテオーム」という科学用語が現れたのは 1995 年。生命現象の解明にはタンパク質全体にわたる網羅的な解析が必要だという考えは注目され、プロテオミクス黎明期には「群盲、象を評す」の寓話や絵でその意義が表された。暗闇で、手元の狭い領域を照らす明かりを頼りに巨象を特徴付けることは、誤解を招く可能性がある。タンパク質の領域では、質量分析を主体とした大規模解析技術が開発され、1 万種以上のタンパク質の同定や定量が可能になってきている。しかし翻訳後修飾などでタンパク質多様性は増加し、分析対象は今なお大きい。この複雑性との戦いに切り込む効果的な手法は、徹底的な分離か、注目する対象の選択か？最新の取り組みを紹介いただく。

〈日本放射線影響学会〉

放射線発がんの分子生物学

Molecular biology on radiation-induced carcinogenesis

オーガナイザー：高田 穰（京都大学）、小林 純也（京都大学）

予定講演者：稲葉 俊哉（広島大学）、大塚 健介（電力中央研究所）、島田 義也（放射線医学総合研究所）

広島長崎の原爆やチェルノブイリ原発事故など、数々の不幸な歴史が示すとおり、また医療被曝による二次発がん、福島原発事故後の低線量被曝による健康影響の可能性等を鑑みても、放射線発がんのメカニズムを明らかにすること

は学術的にも社会的にも重要な課題である。その本質的メカニズムはいまだ十分に解明されていないが、研究は進展しつつある。放射線影響学会は、放射線の生体影響の解明をめざす学術団体として、多くの分野の生命科学系研究者が集う今回の学術集会に、放射線発がん研究の重要性を提示し、分子生物学に基盤をおく先端的研究成果を議論するシンポジウムを提案する。

〈日本免疫学会〉

転写とエピゲノム制御による免疫細胞の分化制御と疾患

Regulation of differentiation of immune cells by transcription factors and epigenetic modification, and their relationship to diseases

オーガナイザー：吉村 昭彦（慶應義塾大学）

予定講演者：中山 俊憲（千葉大学）、黒崎 知博（大阪大学）、樗木 俊聡（東京医科歯科大学）、
谷内 一郎（理化学研究所）、河本 宏（京都大学）、吉村 昭彦（慶應義塾大学）

免疫は元来は感染から身を守るための防御反応であるが、一方で身体を守るための免疫システムに異常が起きると様々な疾患に陥る。アレルギーや自己免疫疾患はもとより、現在ではアルツハイマーのような神経疾患、肥満や糖尿病と言った代謝性疾患などほとんどあらゆる疾患に免疫がからんでいることがわかっている。したがって免疫の理解は疾病の理解に欠かせないものである。さらには抗体や細胞療法など免疫研究は多くの疾病の治療にも役に立っている。これらの免疫応答を支える細胞は多くは造血幹細胞から分化した細胞で、成熟した後も様々なサブセットへ分化して特徴的な機能を発揮している。このような発生分化の調節は当然ながら鍵となる転写因子の発現調節とエピジェネティックな制御によって行なわれる。本シンポジウムでは免疫学と分子生物学の接点リンパ球やマクロファージなど代表的な免疫担当細胞の分化、成熟を転写因子とエピゲノム制御の観点から議論する。

〈日本薬理学会〉

シングルセル解析が切り開く薬理学の新潮流

Single-cell analysis leads to new insights in pharmacology

オーガナイザー：成田 年（星薬科大学）、山中 章弘（名古屋大学）

予定講演者：山中 章弘（名古屋大学）、泉 高司（第一三共株式会社）、二階堂 愛（理化学研究所）、
洲崎 悦生（東京大学）、成田 年（星薬科大学）

疾患を理解するためには、個々の細胞の heterogeneity、“ゆらぎ”といったシングルセルの細胞挙動を捉える必要があります。近年開発された、光遺伝学、薬理遺伝学、電気生理学的手法、細胞分離法、高感度イメージング手法などの実験技術の発展に伴い、疾患特異的活性化細胞や薬物標的細胞の同定ならびに人工的機能調節が可能となってきました。このようなシングルセル解析から得られる情報により、複雑な難治性疾患の病態メカニズムの解明に近づくことができると予想されます。そこで本シンポジウムでは、上記技術を駆使した新しいアプローチによる、シングルセル機能解析と特定神経細胞活動制御による神経科学研究の最新の知見ならびに創薬スクリーニング関連手法について紹介します。

◆ワークショップ（公募締切：2017年3月15日水）

日本分子生物学会、日本生化学会ならびに協賛学会（5頁参照）の会員より企画を公募します。
後述の募集要項をご参照の上、奮ってご応募ください。

◆一般演題（一般口頭発表、ポスター発表）

演題登録受付期間：2017年7月3日(月)～7月18日(火)

採択された全ての一般演題は、ポスター発表を行っていただきます。

また、一般口頭発表への採択希望を募り、審査のうえ採択された演題については口頭での発表も行っていただきます。演題申込みに関する詳細は、次回会報および決定次第合同大会ホームページにてお知らせいたします。
なお、本年は、日本分子生物学会、日本生化学会の会員に限らず、FAOBMB、協賛学会の会員（5頁参照）も演題投稿いただくことができます。多数の投稿をお待ちしております。

◆ランチョンセミナー

企業との共催によるランチョンセミナーを開催いたします。

◆オンデマンド配信

プレナリーレクチャーの全講演、ならびに指定シンポジウム・公募ワークショップのうち配信希望のあった企画について、会員参加者のみに限定した「オンデマンド配信」を予定しています。会員参加者は、会期終了後の一定期間（会期翌日から2か月を予定）内であれば、聞き逃した講演をWebで視聴できるようにする予定です。プレナリーレクチャーを除く講演のオンデマンド配信は、合同年會に参加した会員（協賛学会の会員を含む）のみを対象とし、非会員参加者、および合同年會に不参加の会員は視聴できません。ぜひ合同年會にご参加の上、ご活用ください。視聴は参加者一人一人にID、Passwordを発行して、視聴してもらう形式になります。また、配信終了後、発表者には視聴された方のお名前と所属をお渡しする予定です。

【ワークショップの企画公募について（2017年3月15日(水)受付締切）】

ワークショップの企画を日本分子生物学会、日本生化学会ならびに協賛学会の会員の皆様より公募します。ご提出いただいた企画案は、厳正なる審査を行い、採否を決定します。

審査にあたっては、1) 分野間のバランス、2) これまでにない新鮮な企画であること、3) 比較的中堅・若手の講演者が予定演者に含まれていること、などを基準とさせていただきます。

採否結果は4月中旬頃に応募者へご連絡します。下記募集要項をご確認のうえ、奮ってご応募ください。魅力あふれる企画をお待ちしております。

◆募集要項

- ・ 1企画あたりの時間は2時間30分で、90～100企画を採択予定です。
- ・ オーガナイザーは、日本分子生物学会、日本生化学会、または協賛学会（5頁参照）の会員に限ります。
- ・ 演者は、オーガナイザーにてご指定いただきます。一般演題からの採択はありません。
- ・ オーガナイザー、および日本分子生物学会、日本生化学会、協賛学会のいずれか（もしくは複数）に所属する演者は、会員価格にて参加登録をお願いいたします。
- ・ 日本分子生物学会、日本生化学会、協賛学会のいずれにも所属していない演者の参加費免除に関しては条件がありますので、事前に事務局にお問い合わせいただければ幸いです。
- ・ 海外、国内在住を問わず、大会から演者に対する旅費・宿泊費の補助はありません。

◆応募要領

合同大会ホームページより応募フォーマットをダウンロードの上、下記事項を明記して、3月15日(水)までに大会事務局宛にE-mail (conbio2017@aeplan.co.jp) でご提出ください。

- 1) タイトル（日本語・英語）
- 2) 概要（日本語 全角400字程度・英語 半角800字程度）
- 3) オーガナイザーの氏名、所属（日本語・英語）、連絡先、所属する主な学会名（複数回答可）
- 4) 予定演者の氏名・所属・連絡先・年代（30代、40代、50代など）、所属する主な学会名 ※応募時点での講演承諾は不要です
- 5) 以下の発表分類を参照の上、該当する大項目と小項目の組み合わせ（複数選択可）をお選びください。そのほかの場合は適当な分野名を記載してください。
- 6) 予定する講演言語（日本語・英語・演者が選択）
- 7) 予想される聴衆数
- 8) ワークショップ企画のオンデマンド配信を希望しない場合には、その旨を、理由と併せて必ず応募時にお伝えください。

※開催枠に限りがありますので、例年とは異なり、採択されない場合もありますので、その場合はご理解いただければ幸いです。

【一般演題 発表分類一覧】

大項目		小項目
1	糖質生物学・脂質生物学	糖タンパク質・プロテオグリカン
		レクチン
		糖鎖関連酵素
		グライコミクス
		糖脂質
		リン脂質
		生理活性脂質
		ステロール、ステロイド、リポタンパク質
		脂肪酸、貯蔵脂質
		リピドミクス
		その他
2	タンパク質	構造生物学、機能予測
		フォールディングと品質管理
		タンパク質分解
		タンパク質修飾
		プロテオミクス
その他		
3	酵素・レドックス・ 生体エネルギー	酵素の反応機構、調節、阻害
		酸化還元酵素、金属酵素
		酵素一般
		補酵素、ビタミン、ミネラル
		生体エネルギー変換、電子伝達系
その他		
4	細胞の構造と機能	トランスポーター
		核と細胞小器官の構造と機能
		細胞内物流システム
		オートファジー
		細胞骨格、細胞運動、細胞接着、細胞外マトリックス
		細胞周期、細胞分裂、細胞極性
		アポトーシス、細胞死
		その他
5	細胞応答	細胞外シグナル分子、受容体、イオンチャネル
		核内受容体
		G タンパク質、シグナル伝達タンパク質
		プロテインキナーゼ、ホスファターゼ
		ストレス応答、レドックス応答
その他		
6	ゲノムと遺伝情報	ゲノム、染色体、核の構造と機能
		クロマチン、エピジェネティクス
		DNA 複製、DNA 組換え、DNA の変異と修復
		転写調節
		RNA プロセッシング、輸送、翻訳、非コード RNA
その他		

分 野		項 目
7	発生・再生	生殖細胞、受精
		初期発生、器官形成、形態形成
		幹細胞、細胞分化
		発生工学、再生医療
		その他
8	疾患生物学	がん
		免疫、免疫疾患
		感染症
		代謝疾患、生活習慣病、メタボロミクス、老化
		脳、神経、精神疾患
		遺伝性疾患
		診断・検査、異物代謝、毒性学
		その他
9	神経科学	神経系の発達と分化
		シナプス伝達、可塑性、記憶、学習、行動
		感覚、生物時計、光周性
		その他
10	植物、農生物学、食品科学	植物のオルガネラ、細胞、器官形成
		植物ゲノムと遺伝子、オミックス解析
		光合成、環境応答、植物病原微生物
		植物ホルモンと情報伝達
		農生物学、食品科学
		その他
11	バイオテクノロジー、新領域、進化	バイオインフォマティクス
		システムバイオロジー、合成生物学
		分子進化、分類
		オミックス解析技術（ゲノミクス、プロテオミクス、メタボロミクス）
		遺伝子工学、核酸工学、ゲノム編集
		タンパク質工学、抗体工学、細胞工学
		ケミカルバイオロジー
		バイオイメージング、バイオセンサー
		その他
12	その他	その他

◆企画提出およびお問合せ先

2017年度生命科学系学会合同年次大会（ConBio2017）運営事務局
（株式会社エー・イー企画 内）

〒101-0003 東京都千代田区一ツ橋 2-4-4 岩波書店一ツ橋別館 4階

Tel：03-3230-2744 Fax：03-3230-2479 E-mail：conbio2017@aeplan.co.jp

【日程表（予定）】

	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21
12月6日(水)				プレナリーレクチャー 10:30-11:25	ランチョン セミナー 11:45-12:45				プレナリーレクチャー 16:00-16:55	プレナリーレクチャー 17:10-18:05		フォーラム/ 学会企画 18:45-20:15		
		シンポジウム/ワークショップ/ 一般口演 9:00-11:30				展示会 見学	ポスター発表・討論 13:15-15:45			シンポジウム/ワークショップ/ 一般口演 16:00-18:30				
			機器・試薬・書籍展示 10:00-17:00											
12月7日(木)				プレナリーレクチャー 10:30-11:25	ランチョン セミナー 11:45-12:45				プレナリーレクチャー 16:00-16:55	プレナリーレクチャー 17:10-18:05		フォーラム 18:45-20:15		
		シンポジウム/ワークショップ/ 一般口演 9:00-11:30				展示会 見学	ポスター発表・討論 13:15-15:45			シンポジウム/ワークショップ/ 一般口頭発表 16:00-18:30		分子生物学会総会・ 高澤基金贈呈式 18:45-20:15		
			機器・試薬・書籍展示 10:00-17:00											
12月8日(金)				プレナリーレクチャー 10:30-11:25	ランチョン セミナー 11:45-12:45				プレナリーレクチャー 16:00-16:55	プレナリーレクチャー 17:10-18:05		フォーラム/ 学会企画 18:45-20:15		
		シンポジウム/ワークショップ/ 一般口演 9:00-11:30				展示会 見学	ポスター発表・討論 13:15-15:45			シンポジウム/ワークショップ/ 一般口頭発表 16:00-18:30				
			機器・試薬・書籍展示 10:00-17:00											
12月9日(土)														
		シンポジウム/ ワークショップ/ 一般口頭発表 9:00-11:30	フォーラム/ 学会企画 11:45-13:15	シンポジウム/ ワークショップ/ 一般口頭発表 13:30-16:00	一般口頭発表 16:45-17:45									

第 39 回日本分子生物学会年会 開催報告

昨年 11 月 30 日(水)から 12 月 2 日(金)の 3 日間、パシフィコ横浜にて開催しました第 39 回日本分子生物学会年会は、7,665 名という多数のご参加と、3,030 題にのぼる一般演題のご発表をいただき、盛会のうちに終了いたしました。

39 回年会では、「基礎研究に徹する」ことの楽しさ、大切さ、素晴らしさを(再)認識する機会を提供することを最重要課題と考え、「半端なベクトルに出口無し! ~徹底した基礎研究から広がる応用~」というテーマの下、約 2 年間にわたり、三浦正幸組織委員長をはじめとする組織委員、村田茂穂プログラム委員長をはじめとするプログラム委員とのディスカッションを重ね、年会の企画・構成に取り組んできました。

昨年 4 月には熊本地震の発生により、分子生物学会の会員が所属する各大学・研究機関においても甚大な被害が生じました。年会では、支援策として、被災した学生会員の参加登録費 42 名分を全額免除としたほか、演題採択となった 31 名の被災学生会員に 5 万円の旅費補助を併せて行いました。被災された皆様には心よりのお見舞いを申し上げますとともに、一日も早い復興をお祈りいたします。

39 回年会のプログラムの特徴としては、「プレナリーモーニングセミナー」として、過去の分生単独年会では開催されなかった特別講演枠を設け、基礎研究に徹して偉大な功績を残されてきた国内外の先生方に自由なテーマでご講演いただきました。また、シンポジウムとワークショップの区別をなくし、シンプルにシンポジウムのみを 3 日間で 114 枠開催しました。このうち 76 の公募シンポジウムでは、一般演題から計 160 題が採択されて口頭発表を行ったほか、これまで指定企画のみに限られていた海外招聘演者への旅費支援を公募企画にも拡大して行うことで、国際化の推進を試みました。また過去 3 回の年会で行われた海外在住の若手研究者に対する旅費補助企画も継続して行い、選考の結果、16 名に対する旅費支援を行いました。

例年大変な盛り上がりで分子生物学会最大の特徴ともなっているポスターセッションでは、282 名という多数の会員にポスター座長としてご尽力いただき、発表 4 分、質疑応答 3 分の持ち時間を仕切っていただくことで、前後のフリータイムでさらに白熱した議論を誘導するしかけとしました。また、ポスターセッションの時間帯にビー

ルを無料配布するというかつてない企画も試み、中にはご批判もあったかもしれませんが、リラックスした雰囲気なかでサイエンスの議論を楽しむ雰囲気づくりに一役買っていたのでは、と思っております。

夕方のプログラムが大変充実していたのも本年会の特徴だったと言えると思います。2 日間にわたり 18 枠のフォーラムが開催され、いずれも盛況だったほか、最終日には「ゲノム編集は生命観を変えるか?」という時宜をとらえたテーマの市民公開講座が開催され、平日の夜という時間帯にも関わらず、多くの市民、会員の皆様にご参加いただきました。

ちょうど 1 年前の会報で会員の皆様にお伝えした年会コンセプトのなかで、日本の研究体制が、人や社会に直接役立つ成果を求めるあまり、固定された出口に誘引されることによって活力を失ってしまう可能性に対する危惧と、何ものにも邪魔されない自由な方向性の追求が許容されてはじめて、科学における真理の探究が爆発的な力を発揮するという考えを述べさせていただきました。昨年は分子生物学会会員の大隅良典先生がノーベル生理学・医学賞を受賞されるという大変喜ばしいニュースがありました。記念講演で大隅先生がおっしゃった「科学を何かに役立てるためのものではなく、文化としてとらえ、育んでくれる社会になってほしい」というメッセージは、私のみならず多くの研究者の声を代弁してくださったものと思います。本年会が、参加者にとってサイエンスの議論を深め、知的交流を広げる一助となったようでしたら幸いです。

本年会の開催にあたりましては、依然厳しい経済情勢のなかで寄付、展示、ランチョンセミナーや広告にご出捐いただきました企業・団体の皆様に感謝いたしますとともに、お忙しいなかシンポジウム企画やポスター座長候補の推薦、プログラム編成にお時間を割いてくださったプログラム委員の皆様、また事前準備から開催当日まで一丸となって年会の企画運営に尽力いただいた組織委員ならびに AE 企画の皆様と、年会に貢献していただきましたすべての方々、およびご参加くださった皆様にお礼を申し上げます。

第 39 回日本分子生物学会年会
年会長 一條 秀憲
(東京大学大学院薬学系研究科)

キャリアパス委員会 年会企画報告

―若手研究者のキャリア形成における問題と展望―

2016年の年会では例年通り2つのランチョンセミナーの企画を立てました。今回もケータイゴングによる双方向会議システムを使用し、両企画とも大盛況でした。

一つ目は年会初日に「卓越研究員制度の活かし方―選ぶ側の論理と選ばれる側の論理」というテーマで行い、ゲストには文部科学省人材政策推進室の唐沢裕之室長に来ていただきました。前半は唐沢さんより卓越研究員制度の説明と初年度の実施結果についてご説明いただきました。後半は事前アンケートの結果とこれまでの委員会での議論を元に唐沢さんを交えてパネルディスカッションを行いました。内容については学会ホームページで公開している全文記録を是非お読みください。

卓越研究員制度の問題点として委員会で議論していたのは、年齢制限、マッチング率の低さ、生命系の倍率の高さなどです。「年齢制限」については、事前の文科省との打ち合わせでは、企業から要望もあり引き上げは難しいとのことでした。しかし2015年に実施した「ポストドクアンケート」では、分生会員のポストドクの59%は35歳以上という集計データがあることから、40歳未満の卓越応募要件は厳しいと言わざるをえません。これについては再検討をお願いしました。次に「マッチング率の低さ」についてですが、今年度は「卓越合格」になった卓越候補者の約半数が採用に至らなかったようです。この方たちには来年度もチャンスがあるようですが、来年度はまた新規の「卓越合格」がでますので、引き続き状況は厳しいものとなるでしょう。1つの方策として、アカデミアと企業の募集を分けるなどして候補者の分散を図ってはどうか、との意見を伝えました。また、卓越候補者の名簿の公開も要望しました。卓越候補者が自主的に公開しているウェブサイト (<http://komodak.wixsite.com/takuetsukouho>) もあるようですが、やはり文科省からの公式版をだしていただいて、候補者のマッチングのさらなる後押しをお願いしたいです。最後に「生命系の倍率の高さ」ですが、24倍と2位以下をダブルスコア以上で引き離してダントツ1位の超難関となっています。募集の数を増やしてもらえるのが一番いいのですが、募集の区分を変更するなどして、一極集中を多少なりとも緩和する工夫はできると思います。

卓越研究員制度はまだ始まったばかりで問題山積ですが、委員会では今後もフォローし、文科省と協力して、若手研究者の元気の出る制度に作り上げていきたいと考えています。

もう一つの企画は、年会二日目に「これでいいのか大

学院教育！」というテーマで行いました。最初に私小林が事前アンケートの結果報告と問題点の整理をしました。文部科学省高等教育局大学振興課の菊地久美子大学院係長も傍聴に来られ、会場から貴重なご発言をいただきました。菊地さんとはセミナーの後も委員と1時間ほど懇談を行いました。セミナーで出た意見、アンケート結果は文科省に持ち帰って検討していただけるそうです。

私のプレゼンでお伝えしたかったことは、博士課程を修了しても将来アカデミックでポジションを得られる方は全体の10%にも満たない時代になったということです。大学教員はその辺を考慮して、研究指導はもちろんのこと、多方面で活躍できる人材の育成を目指すべきだと思います。

最近「ポストドク問題」等もあり、博士課程進学者数は減少していますが、それでも私が卒業した25年前に比べると約2.5倍に増えています。しかし、恐ろしいことに大学教員数は増えていません。これが多忙な教員を生み出し、教育の質、ポストドク問題にも影響を与えています。教員の数を簡単には増やせないとしても、すべての大学、部局で同じことをやる必要はないわけで、効率化をはかれるところは、まだまだあると思います。

このセミナーを通して、下のような負のスパイラルに陥るのは絶対に避けたいと思いました。このまま放っておくとその可能性も無きにしも非ずです。

ポストドク問題→博士課程の進学者減少→教員の削減→日本のサイエンスの衰退

上のようにならないためにポストドク問題を解決できたらいいのですが、こちらは雇用の問題なので、簡単にはいきません。次に有効で生産的なのは博士課程の進学者数の減少をくい止めることです。博士修了者が以前に比べて増えたと言っても、未だイギリス、ドイツの人口比で半分です。これ以上減ると、本当に科学技術立国を目指す日本の将来は暗くなってしまいます。会社の経営者や行政官が当たり前のように博士号を持っている欧米との差が開くばかりです。博士課程への進学者を減らさないためには、その後のキャリアで博士修了者が活躍できるような仕組みを欧米並みにしっかりと作る必要があります。

博士課程の進学者減少に関して重要なことをもう1つ。大学院博士課程の学生に対する経済的支援をもっと充実させるべきではないでしょうか。現状では一部の学振DC採用者などを除き、多くの博士課程学生は仕送り、バイト、返還義務のある奨学金で生活費をまかない、授

業料も納めています。これはグローバルスタンダードから、かなりかけ離れています。

大学院生は日本の社会にとって重要な存在であるということをしつかりアピールして、私がキャリアパス委員会の委員長を務める2年間で、少しでも待遇が改善されるように努力いたします。

どうぞお力をお貸しください。

キャリアパス委員会
委員長 小林 武彦

【卓越研究員制度の活かし方

—選ぶ側の論理と選ばれる側の論理】

- 日 時：2016年11月30日(水) 11:30～12:45
- 会 場：パシフィコ横浜 会議センター3階301
- 講 演：唐沢 裕之（文部科学省科学技術・学術政策局人材政策課 室長）

2016年のキャリアパス委員会主催ランチョンセミナー・キャリアパス企画では、今年度より始まった卓越研究員事業について取り上げました。事前アンケートには485人の方にのべ374件の自由回答を頂き、当日は約260人の方に会場まで足を運んでいただきました。しかしながら、振り返ってみるに、これだけ多くの方にご協力いただいたにもかかわらず、「この事業をどのように自分なりに活用するかヒントになるようなものをそれぞれの立場の人に持ち帰ってもらおう!」、という当初の目標はあまり達成できなかった、というのが正直な感想です。実際、177人の方に答えていただいた事後アンケートの結果は「まあまあ面白かった」という人が半数近く、こういったアンケートに答えてくださるのは元々強い関心を持っていただいている人が圧倒的多数、というポジティブバイアスを補正すれば、「まあまあ面白い」は「イマイチ」と読みかえるべきで、もう少し事前準備をしつかりとしないとランチョンセミナーという限られた時間内で実質的な話し合いにはならない、ということを痛感した次第です。

今回のキャリアパス企画は、2016年3月30日のキャリアパス委員会の会合において卓越研究員事業を取り上げてみようという方向性が決まり、4月18日に一度文科省を訪問して、「この制度をどのように活かしていけば良いのかを考える会にしたい、是非担当の方に参加していただきたい」、という希望を伝えました。その際、文科省では夏に人事異動があるので、もし新しい担当者の参加を検討されているのであれば人事異動が終わった秋口のタイミングで内容を詰めた方が良いのではないかというアドバイスをいただき、文科省の方にもいろいろと尽力していただいたところ、9月上旬に人材政策課で

対応していただけることになりました。その後、「採用される側」の知り合いの若手研究者の方にも協力していただいてアンケートを作成し、9月26日にアンケートを実施、その結果を持って11月8日に、小林委員長と事務局の並木さんと再度文科省を訪問しました。その時はランチョンセミナーでご講演いただく予定だった塩崎課長とお会いできるはずだったのですが、その前日に起きた研究不正関連の事案への対応で急遽キャンセルとなり（研究不正め、）、代わりに人材政策課の課長補佐や係長の方に対応していただきました。アンケートの結果はかなり厳しいものであったこともあり、そのあたりを率直に伝えすぎてしまって話がなかなかみ合わなかったところもありましたが、若手研究者が活躍できるような環境を作ろうと日々尽力されている文科省の方々の辛苦はひしひしと伝わってきました。ただ、なんとなくですが、議論の中で、一番の当事者である若手研究者が置き去りにされているような印象を受けたのも事実です。一番印象に残ったのは、ポストを提示しながらも採用に至らなかった機関があまりにも多かったことは問題なのではないか、という点についての議論において繰り返し耳にした、「この事業は大学や研究所の人事権に抵触しないように設計されている」というコメントです。そういうことは考えたこともなかったので、こうしたら良いのではないかと、ああしたら良いのではないかと、僕らが脊髄反射的に考えることは、この基本方針に照らし合わせると editorial reject になるのかと妙に納得してしまいましたが、もう少し採用される側の立場を考えた議論がなされても良いのではないかと思います。また、卓越研究員候補者のリスト公開が何故できないのか、というこちらの質問に対して、担当者の方が「応募機関のインセンティブ」という言葉をよく使われていましたが、耳慣れない言葉で、最初は何を言っているのかよく分かりませんでした。確かに、文科省の補助金事業にどの機関も応募してこなかったら事業そのものが成り立たなくなりますし、大学なり研究所なり企業なり、ポストを用意してこの事業に応募してきた機関への「インセンティブ」を大切にするのは分からない話ではありませんが、応募する側の主たる層である若手研究者を一番大切にすべきはずなのに、ここでもやはり真の当事者が置き去りにされているのでは、という違和感を少なからず感じました。

その後、キャリアパス委員のパネリストの間でスカイプ会議を行い、これまでの経緯を振り返って問題点を整理し、特に、企業へのキャリアパス、いわゆる「卓越浪人」への対応、年齢制限、の3点に的を絞ってパネルディスカッションをしてゆくことになり、会場の意見もできる限り拾っていくことを確認し、当日のランチョンセミナーに臨みました。

残念ながら当初予定していた塩崎課長は予算編成時期ということもあり国会対応のために参加が叶いませんでしたが、唐沢室長に急遽ご登壇頂き、一応、形だけは文科省—採用機関側—応募者の3つの立場の人が一堂に会することができました。主な反省点は以下の4点です。

1) 事前打ち合わせが足りなかった

可能であれば、文科省の側の人と交え、スカイプ会議で良いので数回は話し合う機会を設けるべきだった。

2) ケータイゴングで会場の意見を拾えなかった

司会の能力不足のせいでもあるが、会場からの意見をピックアップする時間を個別に設定したほうが良かった。

3) 講演の時間が長すぎた

打ち合わせ不足のせいでもあるが、時間配分を見誤った。ここを15～20分ほどにしておけばもっと会場の意見を拾えたかも。

4) 司会の練習不足

練習に費やした時間が短すぎた。

反省することばかりでしたが、たとえ大成功でなかったとしても、こういう企画を学会として粘り強く続けていくことは大切なことではないかと思えます。特に、文科省の方々は「採用する側」の方々と接する機会が多いと思えますが、「採用される側」である若手研究者の声をフィルターなしに聞く機会というのは、基本的にはゼロに近いのではないかと思います。聞こえてくる声がゼロであれば、問題は存在しない、ということにもなりかねません。構成員の多くを学生や若手研究者が占める分子生物学会の年会において、当事者である若手研究者の声を施策側に伝えてゆく意義は、決して小さくないはずで、今後も、いろいろな人の手で、いろいろな形でこの手の企画が続いていくことを望んでいます。

(文責：座長・中川 真一)

<アンケート> 集計結果 (四捨五入しています)

【問1】 あなたの年齢は？

① 24歳以下	32	18.1%
② 25～29歳	27	15.3%
③ 30～34歳	33	18.6%
④ 35～39歳	27	15.3%
⑤ 40～49歳	34	19.2%
⑥ 50～59歳	18	10.2%
⑦ 60歳以上	6	3.4%
計	177	100.0%

【問2】 あなたの身分・職階は？

① 学部学生	12	6.8%
② 大学院生 (修士)	20	11.3%
③ 大学院生 (博士)	22	12.4%
④ ポスドク	30	16.9%
⑤ 大学教員 (助教・講師・准教授)	51	28.8%
⑥ 大学教員 (教授)	18	10.2%
⑦ 研究員	10	5.6%
⑧ 主任研究員・チームリーダー・室長以上	5	2.8%
⑨ 企業	8	4.5%
⑩ その他 (民間助成財団職員)	1	0.6%
計	177	100.0%

【問3】 このセッションを何で知りましたか？（※複数回答可）

① 学会ホームページ	51	25.1%
② 年会ホームページ	64	31.5%
③ 会報	6	3.0%
④ プログラム集	51	25.1%
⑤ ポスター	5	2.5%
⑥ 会場内の広告	16	7.9%
⑦ フェイスブック	0	0.0%
⑧ クチコミ	4	2.0%
⑨ その他（Twitter）	2	1.0%
⑨ その他（通りすがり）	1	0.5%
⑨ その他（ランチョンセミナー事前予約）	1	0.5%
⑨ その他（記述なし）	2	1.0%
計	203	100.0%

【問4】 このセッションを開催した時間帯はどうでしたか？

① ランチョン形式でよかった	168	94.9%
② ランチョン以外の時間帯がよかった	5	2.8%
※ 未記入	4	2.3%
計	177	100.0%

【問5】 前半の講演はいかがでしたか？

① とても面白かった	31	17.5%
② まあまあ面白かった	75	42.4%
③ 普通	60	33.9%
④ あまり面白くなかった	6	3.4%
⑤ つまらなかった	0	0.0%
※ 未記入	5	2.8%
計	177	100.0%

【問6】 後半のディスカッションはいかがでしたか？

① とても面白かった	30	16.9%
② まあまあ面白かった	74	41.8%
③ 普通	29	16.4%
④ あまり面白くなかった	9	5.1%
⑤ つまらなかった	2	1.1%
※ 未記入	33	18.6%
計	177	100.0%

【問7】 今後このような試み続けるべきだと思いますか？

① 是非続けるべき	128	72.3%
② 続けるべきだが方法を変えた方がよい	33	18.6%
③ やめた方がよい	1	0.6%
④ わからない	7	4.0%
※ 未記入	8	4.5%
計	177	100.0%

【問8】このセッションに関する感想をお聞かせください。

- ・時間が足りないようだ
- ・コネのあるなし問題は、一般的にはない方が平等のように思えるが、コネなしにすると大学名とかが有利になるし、逆に不利になる人もいる。また、一緒に働く人がどういう人か知ってからの方が研究はチームワークなのだから重視するのはいいような気がする。
- ・もう少しディスカッションの時間が長い方がよかった。この制度によって、博士号もった人の今後の職（働ける場）が広がってほしい。
- ・卓越研究員制度について理解できた。候補者の半分以下しか採択されないのは制度として問題があるように感じる。
- ・企業とのマッチングや、企業がどんな研究をやっているかわからないという意見があったが、分子生物学会には多数の企業が参加している。学会として企業に研究紹介をすすめてはどうか？例えばポスター発表に企業枠を作ったり、企業用の研究紹介コーナーを作ったり。
- ・Ph.D.の将来は、不安がいっぱいです。
- ・卓越研究員事業1年目の動向を聞いて参考になりました。
- ・夜でもっと長く
- ・時間短く、双方向性が低い。
- ・いかにも“カンリョウ”という人が出てきて、興味深い。
- ・生の学生やポスドクの声に対してのディスカッションがもっとあるとよい。
- ・ふざけるな！ 実情を知らなすぎる。パネリストも勝者の論理だ！
- ・知らない人は取りにくいので教授等が知り合いの人に卓越に応募するようすすめれば良いという小林先生の意見、表面上はマッチング率が上がるが力もったところにお金が回るだけで意味がない。
- ・制度（事業）の現状・課題を知ることができて、よかった。
- ・リアルタイムでアンケート結果がわかり、面白かった。
- ・勉強になりました。
- ・卓越の制度の価値がいまいちわからなかったです。募集されている人数と応募した人の人数に差が生じたのは仕方のない部分もあると思うので、根本的には解決をするのは難しいなと思いました。
- ・制度に関して、良く理解できた。
- ・現在41才、女性ですが、出産育児休暇等でブランク有です。ライフイベントのブランク有無で年齢制限を考えて頂けたらと思います。
- ・卓越について勉強になりました。
- ・スライドの字が小さい。スライド枚数が増えてパッパと切りかわってしまっても良いので大きい字にしてほしい。オーディエンスから募ったコメントについての言及が少ない。
- ・立場のへだたりを感じられて良かった。
- ・ポスドクのキャリアパスについて考える良い機会になった。
- ・会場の意見を拾う→アンケートの題材に使う パネリストの意見がつまらない。文科省の人だけでいい。
- ・タイムリーで良かったです。研究大学の教員の雇用状況においてシニアの雇用が増えている分中間、若手の分が減っていることがわかった。
- ・色々な問題・改善点があるとは思いますが、様々なキャリア・パスを生み出すためには多くの試み・制度が必要と思うので、どんどんとり組んでほしい。ただ卓越研究員制度に受かる人は学振にも受かるのではないかな。業績のとり方などは難しい気がする。
- ・コメントから質問をもう少し取り上げた方がよい。せっかく参加しているのだから、ある程度は回答するとより議論が盛り上がると思います。パネルディスカッション時間がもう少し長いと良いと感じた。
- ・ポスドク・アカデミックなキャリアに関する状況についてのデータがたくさんあり、状況把握にいいセッションでした。
- ・修士・博士課程に進んだ後のことが学べてよかった。聴いている人の意見がみれるのは面白い。
- ・企業側がパネリストにいない。アクセスキーが消されてしまって入れなかった。
- ・様々な立場からの意見や、事業の問題点がわかったのがよかった。
- ・研究環境に関する制度変更などに関するセミナーは積極的に参加しないこと多く、このような場で知識をインプット、リフレッシュアップデートしてもらえると助かります。
- ・「卓越」ときくと、とても優秀な研究者のためのポストという印象がありますが、中をみれば産学官。名前と内容がマッチングしていない。優秀だけど社会に出られないアカデミア only の人はたくさんいる。その人を救う制度も必要。
- ・パネルのコメントがあまりとり上げられていなくてごんねん。もっとうまく進行してほしい。
- ・就活生でもあるので、すごく身近に感じた。
- ・卓越について疑問があったので参加してよく理解でき、問題点等も把握できて良かった。
- ・文科省の情報がリアルタイムにきけてよかった。
- ・自分の大学（私大）では資金は有りそうなので、大学側が積極的にPIに働きかけて若い人のポストをつくってあげるべきと思った。（良い人に大学にきてもらう）
- ・就職って大変
- ・日本は少数特化型より分散型、多数底上げ型のやり方で良いと思う。AMEDも含めて、卓越研究員制度はやめた方がよい。
- ・分かりやすかった。
- ・フロアからの声を取り上げる機会がないので、議論が一方通行だった気がする。
- ・その場で行うアンケートは良かったと思います。
- ・世界的に見ると企業のR&Dはポスドク2年の経験を必要とするので、ポスドク／助教の経験の撤廃はナンセンスかと。グローバル人材の育成を考えると研究経験は必要かと思います。
- ・ディスカッションがおしたので、プレゼンの時間は短縮してほしい。
- ・候補者として勉強になった。
- ・よかったと思います。会場からのコメントに回答していただけるとより良いと思います。
- ・もっと時間がほしい
- ・意見投票システムのアプリをちがうものにしたほうがよさそうです。E.x. イマキク、スグキク 投票された意見に「イイネ」をつけられるので、会場の興味がある質問がpick up しやすくなると思います。
- ・どこでも多様性は必要だと思います。
- ・マッチングが何をしているのか、やっぱりよくわからなかった…。

- ・後半の時間をもっととってほしい。
- ・「若手」として想定されているのは30～40歳のようですが、それ以前、大学～院修了後数年の人間への扱い、置かれる環境が全くふれられておらず、とても限定的な印象でした。
- ・パネルディスカッションよりフロアからの質問に答えてもらいたかった。
- ・データの解析を文科省任せにしない方が面白い結果が見れるかも。
- ・皆の意見がみられて面白かった。
- ・皆が参加できる形式で、とてもよかったです。
- ・若手研究員の独創的研究に期待します。
- ・27才・地方大学・D2学生です。参加してよかったです。
- ・小林先生が我々が言いたいことをいってくれてよかったです。
- ・もう少し時間が必要。
- ・時間をもう少しとるべき
- ・議論の中心がマッチングできない人についてになっていたが、そこに達するのが難しいことなので、他人事の話のようになってしまった。幅広い層の研究者が幸せになれる制度にしてほしい。
- ・制度がよくわかった。
- ・ランチョンよりも、もう少し時間をとって議論した方が、有意義だと感じた。応募する立場の若手も、パネリストに必要。
- ・フロアの質問に対しての回答が少なすぎる。
- ・もっと Communication できたらよかったです。カキコミ式は Good → もっと QA に発展すれば有意義！
- ・前向きな取り組みで素晴らしいと思いました。来年度も是非よろしくお願いします。
- ・何のために大きく書き込みを出しているのか？ フロアの意見もひろってほしい。パネラーが自分の意見をのべるだけの時間が長いです。
- ・卓越研究員に関する情報をまとめて知ることができ、よかった。
- ・話題あたりのディスカッション時間をもう少しのばしてほしい。マッチングの低さは大問題。
- ・後半のディスカッションは興味深かったです。
- ・もっと、メッセージを取り上げて欲しい。
- ・文科省、学振の人をもっと何人か増やすべきだった。一方的な議論になっていると感じた。
- ・官僚の人 v.s. 司会・委員長という形に終始したイメージ。フロアの人メッセージを出す必要はなく、単に後で議論をまとめた冊子でも済む印象。
- ・参加型のパネルディスカッションに参加するのが初めてだったので面白かった。ポストを求める研究者と文部科学省の間で研究に専念できる環境に関して意識のずれがあると感じた。
- ・企業の人も1人入れたらちがったかも。
- ・皆、若い人(30前半)を欲しがることが再認識できた。年齢は、人間としての成熟度の指標のひとつであり、企業の中にもうまく入れると思うが…。特に、子育ての経験のある女性は、仕事の効率化の意識は相当高く、またコミュニケーション能力も若手や男性研究者に比べ断然高いですよ！小林さんが、学振DC→学振PD→卓越研究員…という話をされていたが、それならばなおさら申請資格の40才未満はやめて欲しい。なぜなら、学振PDも、数年前から学位取得後5年以内となり、年齢制限は廃止されてますよ！現在40才の私は制度の過渡期にある現在はとてもツライ！！40才未満を救済する制度らしいが、期限つきポストをやりつづけてる40才以降はどのように救済するのか？ポスト1万人計画の被害者は40才以降ですよ！
- ・フロアの意見がリアルタイムでわかるのはよかった。
- ・今後、卓越研究員事業の発展・改善・成熟に期待したいと思います。
- ・制度自体あまり知識がなかったので、よい機会であった。
- ・卓越研究員の話をお聞かせいただきました。このような制度に年齢制限があるのが腹立たしいです。海外の複数の大学で修業して、研究能力に自信をつけて帰国したら職が見つからないという状況は、笑えません。若くして職につきながら低レベルな発表をしている方を見ると、つくづくそう思います。
- ・具体性がない。わざわざ人が集まって行う程の内容ではなかった。

【問9】 来年以降のセッションで取り上げて欲しいテーマがあれば教えてください。

- ・特になし
- ・卓越研究員以外の一般研究員の将来はどうか？
- ・研究費の削減に関するものや、大学院生(博士)の進路など。
- ・40才以上のキャリアパスに関してテーマ設定して頂きたいです。
- ・研究者同士が結婚した場合、勤務先が近くでない場合、別居あるいはどちらかが研究を諦めることになる問題
- ・たまには男女共同参画もとり上げて欲しいです。(最近、キャリアパスの問題に片寄りがち)
- ・企業不在のキャリアセッションの意味がわからない。結局民間は希望していないのかと思います。
- ・教員の削減について(国立大学)
- ・教員削減時代での研究環境の改善対策立案とそのための予算確保
- ・同じテーマで1年後どうなっているかをやってほしい。
- ・文科省の人と話せる貴重な機会なので、JSPS事業を継続的にとりあげてほしい。
- ・任期制スタッフの更新制限のあり方(改めるべきポイント)
- ・上司に恵まれなかった場合の若手研究者の生き残り術
- ・キャリアパス(博士後の)を、本人が意識し、本当に考え始めるのがとても遅いと感じています。私(京大M1)の周りでも、目的意識があって大学や院にきている者は半分もいない様子です。すると、問題の根は中～高校生の頃の教育や環境となってくると思います。そのような問題意識が、今、社会を動かせる立場の方々にもっと広がることを期待します。(そのようなテーマのセッションも期待します)年上の方々には期待したい内容です。ぜひお願いします。
- ・引き続き同じネタを取り上げて欲しい。
- ・来年も今年度の成果を聞きたいです。
- ・任期制助教制度のあり方 良い点・悪い点
- ・引きつづきこのテーマをつづける。
- ・クロスアポイントメント制度について

- ・企業での研究をイメージできていない方が多い印象なので、「企業研究者のキャリアパス」についての議論を是非お願いします。
- ・卓越研究員
- ・学部別の研究・開発職の採用実績
- ・類似しているが博士号取得者の進路の多様性について、皆で議論する必要がある。
- ・女性研究員のライフイベントを含めたポジションへの展望とか？
- ・子育て女性研究者のサバイバル法

【問 10】 本年会での属性調査（添付資料）をご覧になった感想をお聞かせください。

- ・女性が少ないから育児の支援をするというのはおかしい。そもそも女性ばかりにさせるのではなく、男性がひきうけやすくする方がいい。
- ・特になし
- ・特にありません。
- ・詳しく書いてあり良かった。
- ・女性の現在おかれている状況がよくわかった。
- ・欧米と比較し、女性の割合が明らかに低いと思います。
- ・女性が増えた方がいいと思う。
- ・女性の率、今後 UP していく必要性を感じました。
- ・若い女性が研究を続けるためにはやはりオーガナイザー・スピーカーの立場の方を増やす必要がある。少し積極的に女性を増やす制度があっても良いと思う。良いロールモデルに気づく機会となるはず。以前シンポジウムのスピーカーの半数が女性となったものがあつた。オーガナイザーの方が考えて F/M 比を工夫したのだと思う。
- ・女性は研究の進歩が遅いのでしょ。無理矢理何とかするべきではない。
- ・最近、少しだけ女性のスピーカーが増えてきたかもしれない。
- ・グラフ・数値が多く分かりやすい資料でした。
- ・毎年同じ内容でつまらない。
- ・とくになし
- ・女性の organizer, speaker が少ない理由は女性の PI と助教などの少なさに起因する結果だと思います。その意味で分生の比率は生命研究業界の縮図といえると思いました。
- ・話を聞きつつ、短時間で見るには分かりにくい資料でした。発表者、オーガナイザーの女性の比率が低いという事は、どこかに問題があるのだと思います。その原因と対策とに迫ってもらえると良かったと思います。
- ・女性の方が、発表やオーガナイズするのがきらいなのではないかと思いました。
- ・会員の 25% が女性だが、オーガナイザーやスピーカーの女性が占める割合は、10～15% であり、少ない。おそらく、教授級の職に女性が少ない。そのため、そのような階級の女性を増やすべき。しかし、増やすことばかり考えて、能力・実績のない女性を登用することがないように注意すべき。
- ・長年みてますが、なかなか女性の割合が上がりにせんね。
- ・スライドを Web 上にあげて、オープンアクセスにしてほしい。
- ・Figure の凡例のフォントが小さかった。
- ・参考になりました。
- ・女性率が低いのが残念。

【問 11】 その他、ご自由にどうぞ。

- ・ハンドルネームでメッセージを送るのはいいアイデアだと思うが質問とかに答えてもらえないなら、逆にない方がいい。
- ・中川先生おつかれさまでした。
- ・アカデミアと企業で評価するポイントが異なるのではないかとこの点は重要ではないかと思いました。
- ・このセミナーで、応募資格がないこと知りました。
- ・コメントを取り上げて、内容に答えてほしかったです。
- ・卓越に採用される人が応募者約 800 人に対して 160 人（?）、就職が決まった人が 80 人だとそういう人に出会う機会がおそらく私には無さそうで、できることならそういう人をロールモデルとして今後のキャリアを考えたいのもっと情報開示をしてほしい。そもそも D 進する人が周囲に少なく、就職先がなかった時のためのリスクマネジメントや研究ではない職で妥協するためにどうしたかなど、成功しなかった時のイメージができなさすぎて進学をためらってしまう。教授に相談したところで彼/彼女はポストを得た人なのであまり参考にならない。
- ・前半の講演はもっと短い方がいい。最後にもう一度「期待するか」アンケートをとったら？ No ばかりになったはず。
- ・Academia と企業は分けた方がいい。野心的テーマを資金付で来てくれるならぜひ欲しいですね。
- ・レジュメが欲しかったです。
- ・とくになし、でも将来学生減、教員減でつぶれる大学多いでしょうね。
- ・海外からの参加者です。会場に Wi-Fi が入らずコメントを送れませんでした。文科省の人のコメントで「意見として聞き検討したい」というのが多かったのですが、文科省の人の個人的な考えが聞きたかったです。
- ・メッセージを聞き手が送りながら、ディスカッションを進めるスタイルが良いと思いました。
- ・毎度思いますが、投票意見をベースにした Discussion がされてないのがもったいない。テーマを 1 つにしぼって、会場の興味ある意見をたくさんひろうほうが、100 人集まる意味もある。分生にしかできないとくみだと思うのでよりブラッシュアップを期待します。
- ・「職」が安定しないと生活、生存もおびやかされる日本の社会は生き辛いなと思います。
- ・前半の講演の最初の分析説明が長かったので卓越研究員制度についてももう少し詳しくききたかったです。
- ・スマホでのコメントは面白いが、フロアの参加者も含めて生でディスカッションした方が活発になるのでは？
- ・まず、あふれる 40 代をどうにかしてほしい。
- ・Q&A がもっと必要
- ・もっとフロアの意見をひろってディスカッションしてほしい。
- ・ネットを介して Yes, No を聞く方法はすごくいいと思いますが、ネットが使えない人のために Wi-Fi をとばしてほしいです。

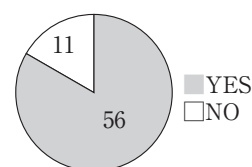
- ・おもしろい企画でした。
- ・パネルディスカッションが面白い（充実している）。夜、ビールでも飲みながら行う方が面白いと思う。
- ・今回のテーマは非常に重要な問題なので継続すべきだと思う。
- ・大学生の頃、海外へ留学し、年配の女性が定年退職後に若者とともに学生として学んでいたりと、多様性があり、刺激的であった。また、ごく自然にそのような機会が多くみられていた。日本では、その点でも、多様性を指摘しながらも年齢制限を設けるなど多様性に否定的だと感じざるを得ない。
- ・コネが多すぎてポジションがないのうそ公募が多すぎる。うんざり。

〈ケータイアナライズシステム〉

〈アンケート〉 集計結果（四捨五入しています）

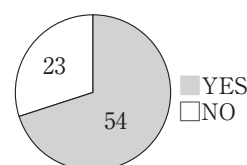
設問 1. 卓越研究員制度に期待していますか？

・ Yes	56	83.6%
・ No	11	16.4%
計	67	100.0%



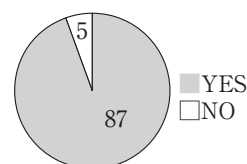
設問 2. 企業で研究してみたいと思いますか？

・ Yes	54	70.1%
・ No	23	29.9%
計	77	100.0%



設問 3. 卓越研究員のリストを公表した方が良いと思いますか？

・ Yes	87	94.6%
・ No	5	5.4%
計	92	100.0%



コメント一覧

No	ハンドルネーム	コメ ン ト
1	おやじ	卓越研究員制度に期待します。
2	ぴけどん	受け入れ側としては任期なしは不可能。せめて、選ばれた人には数年のポストクの権利が欲しい。せっかく卓越研究員に選ばれてもマッチングできないのは絶望以外にないよ、
3	JJ.	修士卒も申請できるようにして欲しいです
4	Sk	面接は大切なスクリーニングプロセスだと思います。面接渡航費の支援をしてでもしたほうが良いと思います。
5	子育てブランクあり研究員	博士号取得まだ2年目ですが、2人の子育てでブランクあり、今年40歳です。申請資格ないのがホントにツライ
6	いまい	企業の研究って具体的になにしてるかあまりわからない
7	jh	企業向けは経産省、アカデミックは文科省のように分けて制度を作ったほうがいい。少なくともアカデミックポジションの募集としては制度設計が甘い。
8	sk	結局、ポストクのフェローシップの域を抜けれていない感があります。
9	yk	博士卒の人がすべて大学の教員になれない以上、もっと人材が民間に行けるような社会にしなきゃいけないし、学生やポストクもその現状をしっかり認識すべき。卓越研究員はそのきっかけになる制度になり得るのでは？
10	学生	企業の研究職＝技術職のイメージ。
11	ナナシ	製薬会社に候補者としてアポを取って面接にいきましたが、文科省からの資料が届いていないと言われました。30代後半だと、研究よりは管理職候補だと言われて、企業で好きな研究はできないのだなと思いました。
12	企業研究員	聞き逃したのかもしれませんが、企業に入社した人と、卓越研究員で企業で研究してる人の違いは何ですか？お給料？任期？
13	taka	受け入れ機関の面接があるのだから、結局受け入れ機関の人とコネがないと採用されない。卓越研究員に選ばれましたからぜひ採用して欲しいと言っても無理。企業側としてもそうなのでは？

No	ハンドルネーム	コメント
14	たるお	このアンケートのページのアクセスの仕方をもう一度説明したほうが、解答率が上がるのでは？
15	ポスドク1年目	現状のマッチング率を受けても、次年度以降予算を安定して確保できるのでしょうか？科学技術費が削減されている中で、安心感がありません。
16	sk	受け入れ機関にとって卓越研究員の任期後の取り扱いが難しそう。 任期無し雇用 or40 過ぎの無職？
17	地方私大 PD	卓越研究者は任期ありポストですか？ テニユアとの違いがはっきりと感じられない。
18	mi	安定を必要としているのは、30代後半から40代だと思います。
19	あんぱん	マッチングした83人の中で推薦枠ではない人は何人いたの？
20	Yuki	6番の方と同じ意見です。アカデミアの方は、漠然と企業での研究はルーチン作業ばかりのイメージが強いと思います。そういったイメージが最終的に企業を敬遠する理由の1つではないでしょうか。
21	学生	卓越は、学振からのステップアップにはならないでほしい。学生時代に全て決まって、学振が取れなければ研究者になれなくなりそう。
22	D-loop	卓越研究員に選ばれるような実績のある方なら卓越研究員にならなくても就職先はみつかるのでは？才能（たとえば企業が欲しているような能力）、能力はあるのに実績がともなわない人もマッチングできるようなシステムが必要では？
23	d3	コメントで流れてくる基本的な質問についてはコメントで答えてあげればこういうシステムももっと良くなる気がします
24	taka	あんぱんさん、推薦枠かともとも強力なコネがある人しか実質採用されていないと思います。制度としては普通の学振特別研究員の方がフェアでは？
25	jh	落下傘候補のように申請書で選んでも募集機関の要望と違う基準で選ぶからむしろマッチングうまくいかないのは当然予想できた。 PD,DCの選考があまりいいとは思ってないので、その延長の制度だと斬新な人は受からないと思う。
26	aska	今の段階で決まっている人はほとんどがアカデミアからの推薦なのでは？だとしたら普通に任期なしになれる人が通ってこの制度で本当に救われる人があまりいないという危険性があるのでは？
27	大猿	我が国では、この手の制度に年齢制限が付き物なのが、残念です。そもそも年齢で門前払いされるのは、何とかならないでしょうか。 海外のいくつかの大学で何年も研究生活を送り、能力に自信を付けて帰国したら就職先が無いという状況は、笑えません。
28	sss	候補者の中で、採用先が決まらない場合は、候補者として審査を通ったという実績は意味の無いものになるの？
29	J.J.	博士号取得者が安定したポジションに着けないのは、社会にニーズがないから。 そもそも博士号取得者を量産することが間違っているのでは？
30	aa	23番のd3さんに同意です。ここのコメント欄にある質問をもう少し取り上げた方が良いセッションになると思います。
31	ポスドク1年目	マッチングが目標にたどり着かない現状で、次年度以降安定的に予算を確保できるのでしょうか？
32	(^ω^)	結局企業のニーズと研究者のシーズがあっていない以上、なかなか企業の卓越研究員って増えないんだろなあ。
33	KI	設問3、「卓越研究者」と「卓越研究者候補」を分けて質問しないと正確ではないのでは？
34	いまい	年齢制限撤廃したら、制限ありの場合とアプライする年齢層に違いはあるのかな
35	drug	制度を知りませんでした。企業では出ないような創薬アイデアを持つ方なら、年齢関係なく興味ありますね。
36	d2	卓越研究員制度終了後も、職場は保証されない。 安定した職場を求める者にとって、この制度の意義がよくわからない。
37	TY	民間を志向する人は、そもそもこの制度を利用せず、自力で何とかしてる人が多いのではないだろうか？と、自らの経験から思います。
38	a	年齢制限ではなく、年齢別にクラス分けして募集しては？
39	\(^o^)/	パネリストはどちらかというと選ぶ側の人ばかりだよなぁ。一方通行になってるのでは？

No	ハンドルネーム	コメント
40	びけどん	知り合いのオーストラリア人は60歳で博士号とって大学の講師になっているのに。日本の年齢差別はひどすぎる。
41	J.J.	次やる時は皆のメッセージを手元のデバイスでも見れるようにして欲しいです！
42	.	36さんの言うとおりの安定が保証されない限り卓越研究員のメリットが感じられないです。
43	大猿	米国では求人条件に年齢を入れるのは禁止ですね。差別だから。
44	びけどん	採用する側の先生の政治力で決まってしまう。卓越研究員に応募してもらって通ったのに。
45	RA	もしマッチングがいかんかったら、ある程度の期間後に、候補者リストを公開して、いわば、一般公開マッチングに移行するような2段階で考えていけばよいのではないのでしょうか？ 今後の卓越研究員事業の改善・発展・成熟を期待したいと思います！
46	中堅	卓越研究員の審査において、女性を積極的に引き上げるよう別の審査員から要請があった。しかし、卓越レベルにある女性を探し当てるのが困難であった。
47	sk	パネルに現役研究者側が居ないとディスカッションにならないと思います。 次回に期待します。

【これでいいのか大学院教育！】

- 日時：2016年12月1日(木) 11:30～12:45
- 会場：パシフィコ横浜 会議センター3階301
- 司会：胡桃坂 仁志（早稲田大学理工学術院、構造生物・創薬研究所 所長）

「大学院教育」は教育を受ける博士課程の学生のみならず、進学を検討する修士課程の学生、指導する教員も関心を寄せている。本セミナーの開催に先だって大学院教育に関するアンケート調査を行った結果、500を超える多くの回答をいただき、大学院教育に対する関心の高さが浮き彫りになった。今回のキャリアパス委員会企画セミナーでは、「これでいいのか大学院教育！」と題して、まずはキャリアパス委員会委員長であり、生物科学学会連合のポストク問題検討委員会委員長である東京大学分子細胞生物学研究所の小林武彦先生より、アンケート結果の要点をご紹介いただき、大学院教育が抱える問題について講評をお願いした。

〈変化する「博士」という資格の役割〉

冒頭、博士の大量生産時代に入った結果、博士の資格としての役割が変化していると小林先生は述べた。具体的には1990年代の博士の大量生産時代によって博士の役割が変わり、何かを研究して成果を出した人（論文博士）から、定められた課程を修了し、高度な教育を受けた人（課程博士）となってきている。そして役割が変わったため、その活躍の場も多様化し、アカデミック職だけでなくいろいろな分野で活躍が期待されている。現状の課題として、(i)博士号取得者の全てがアカデミック職に就くことは難しく、(ii)博士が生き残るためには新たな「技」の習得が必要である、という点が挙げられ、このために大学院教育を見直す必要がある。つまり高度な

教育という点で大学院教育の重要性を改めて考え直さなければいけない。

アンケート調査の結果において、「大学院進学時に卒業後の就職状況や進路についての説明はありましたか？」という設問に対し、「なかった」という回答が多数であった。「大学院修了後の進路についての希望」が、「海外/国内でポストク」、「企業の研究職」、「助教など大学常勤職員」がほとんど同じ数の結果であったことを考えると、これらの選択肢についての説明が大学院生に対して行われることが望ましい。一方、「将来の希望職に就くための就活以外の準備をしていますか？」、「就活を有利に進めるための取り組みを行っていますか？」という設問に対しては「いいえ」が多数であった。博士の役割が多様化している現状では、これまでとは異なる多様な準備を要することを再認識する必要がある。また、「大学院での指導や教育は充分である（あった）と感じますか？」という設問に対して、「不足」「放置」との回答が3割に上り、大学院教育における大きな課題であると指摘された。「現行の大学院教育制度において、どのような点を改善した方がよいと考えますか？」という設問には様々な意見が挙げられており、特に「講義と研究の比重」、「英語教育」、「研究室異動の難しさ」の3点が目立った。「大学院において、どのような内容の講義をおこなったらよいと考えますか？」は「統計学、プログラミング、インフォマティクスなど」、「研究倫理」、「論文・申請書の書き方」、「国内外の研究者によるセミナー」という実利的な4つの内容についてもっと講義が欲しいという意見が多かった。特に英語に関しては、プレゼン・論文作成の訓練は重要なので増やすべきだという意見が一番多かった。英語力は研究者としてのみならず、様々な職種においても重要になるので、是非トレーニングして欲しい。講評の最後に小林先生は、「大学院教育の見

直し時期にそろそろ来ており、制度だけでなく、精神面も変えていかなければいけない」と締めくくった。

その後、パネリストが登壇し、聴衆とケータイゴングを利用したパネルディスカッションが行われた。議論のテーマとして「なぜ大学院に進学したのか」、「現在の学生と教員の比率はどうか」などオーソドックスなテーマから、「博士課程進学後のキャリアに関する不安」といった内容など、幅広い意見を汲み上げることで、型にはまらない自由な議論が展開された。特に盛り上がった3つのトピックを中心に本議論を振り返りたい。

〈指導教員あたりの学生数は少なくすべき？現状維持？〉

現在の教員：学生の比率は1:6～8であり、アンケート結果ではもっと少ない方がいいという意見が挙がった。理想的には教員1人に対して5名程度（各学年1～2名）だろうと指摘する意見がある一方、学生間で切磋琢磨することも大事であり、ある程度多い方がいいのではないかという意見も挙げられた。教員と密に付き合っていきたいのか、学生同士で切磋琢磨し合いたいのか、という二つの考えの両立が難しいために、意見が分かれるのであろうと分析された。続いて、大学院教育に「システムティックで質の保証された教育」「どこでも活躍できるような知的生産能力を身につける教育」「とにかく研究だけでできればいい」などのいずれを求めているかが議論された。アンケートの結果、多数の聴衆は「どこでも活躍できるような知的生産能力を身につける教育」を求めており、従来考えられていた「とにかく研究だけでできればいい」という考え方の学生が減少していると指摘された。一方、教員は「研究重視」型が多数である。教員側が学生に望むものと、学生が望んでいるものが違うということを入れないと、今後の大学院教育の改善は困難であろう。また、欧米では常識である、博士課程学生の給与に関しても、日本では立ち後れている。これには社会的な支援が必要であり、我が国の基礎研究を世界的なレベルに保って行くためには、実現に向けて常に働きかけていくことが重要であろう。

〈副指導教員制度の効用〉

大学院教育において、教員と学生のマッチングが重要であると唱える声が多かった。最初から良いマッチングができればそれに越したことはないが、間違ったマッチングの場合、副指導教員制度を活用すべきだという指摘がなされた。風通しのいい教育制度を構築するため、副指導教員制度について名古屋大の取り組みを例に紹介していただいた。副指導教員の存在は、指導教員とは異なった視点でのコメントをもらい、学生の視野を広げるのに有用である。もちろん教員の板挟みにあい、学生が悲惨なことになるように、教員側のモラルも重要である。

確かにこの制度が正しく機能しないこともあり得るが、副指導教員制度を正しく活用することは学生にとって多くのメリットがあり、今後はより多くの大学で導入すべきであると結論づけられた。これに伴い、充実した大学院教育のできる研究室についても言及された。大学院教育がうまくいく研究室はポストドクを多数有する研究力を持った研究室である場合が多い。研究成果をポストドクが中心的に出してくれれば、PIは学生に過度に期待する必要がなくなり、より大学院生のレベルに合わせた大学院教育が可能となる。一方、研究の主戦力が大学院生だけの場合、大学院生に過度な研究成果を期待することになり、大学院生のレベルに合わせた大学院教育は後回しにされがちになる。充実した大学院教育とポストドク制度は、どちらも我が国の基礎科学を発展させるために重要な課題として考えるべきであろう。

〈海外留学のススメ〉

海外での研究経験は重要であり、行きたいと考えている人はぜひトライすべきという意見が口火を切った。さらに、行きたいと思ったときが行くべきときであるとの指摘がなされた。海外経験で得るものは多く、将来アカデミックに残るだけでなく、企業に行くにしても貴重な経験となるため、是非行って欲しいという意見が続いた。パネリストからは海外留学を強く勧める意見が多数挙げられた一方、実数として海外に行く人は大幅に減っているという問題が指摘された。海外には行きたいがその先が不安であるという意見と、ポストドクは先がないから博士に行かないと考えることとは、将来への不安が共通の要因として存在している。今回の議論では、実際に海外に行ったパネリストの話を中心に、留学先での研究生活で得られたことを議論した。海外での研究経験によって、日本での研究職だけでなく、海外のアカデミックポストやベンチャー企業への就職の可能性が広がり、多様な進路を考えられるようになったと意見がなされた。先を見ようと言っている、先が見えないのが問題であるが、それはアカデミックだけではなく、今の日本社会全体で起きている共通の問題である。逆にそういう時代にこそ、博士を持つことによって、国内にとどまらないキャリアパスを持つという選択が実は良いのかもしれない。また、博士課程において、仕事を計画、立案し、遂行する能力を身につけることは、どのような職種においても重要なスキルとなるであろう。これらのスキルを、博士課程進学の特長としてアピールすることは悪くないのではないかと議論された。

今回の企画において、余裕をもって研究と教育を進めるための、博士課程の大学院生の経済的援助、教員数の確保とポストドクの安定的な雇用など、大学院の研究教育

環境の構築の支援が必要であることが議論された。若い人たちがとにかく頑張って元気な日本の研究社会を作っていく、そのために私たちができることを考え、若い研

究者のサポートを行うことが重要であることを再認識する良い機会となった。

(文責：座長・胡桃坂仁志)

〈アンケート〉 集計結果 (四捨五入しています)

【問1】 あなたの年齢は？

① 24歳以下	57	32.0%
② 25～29歳	33	18.5%
③ 30～34歳	16	9.0%
④ 35～39歳	14	7.9%
⑤ 40～49歳	35	19.7%
⑥ 50～59歳	21	11.8%
⑦ 60歳以上	2	1.1%
計	178	100.0%

【問2】 あなたの身分・職種は？

① 学部学生	17	9.6%
② 大学院生 (修士)	44	24.7%
③ 大学院生 (博士)	25	14.0%
④ ポスドク	6	3.4%
⑤ 大学教員 (助教・講師・准教授)	39	21.9%
⑥ 大学教員 (教授)	22	12.4%
⑦ 研究員	6	3.4%
⑧ 主任研究員・チームリーダー・室長以上	6	3.4%
⑨ 企業	10	5.6%
⑩ その他 (招聘教授)	1	0.6%
⑩ その他 (記述なし)	1	0.6%
※ 未記入	1	0.6%
計	178	100.0%

【問3】 このセッションを何で知りましたか？ (※複数回答可)

① 学会ホームページ	50	25.0%
② 年会ホームページ	69	34.5%
③ 会報	6	3.0%
④ プログラム集	48	24.0%
⑤ ポスター	5	2.5%
⑥ 会場内の広告	13	6.5%
⑦ フェイスブック	1	0.5%
⑧ クチコミ	6	3.0%
⑨ その他 (ランチョンセミナー事前予約)	1	0.5%
⑨ その他 (記述なし)	1	0.5%
計	200	100.0%

【問4】 このセッションを開催した時間帯はどうでしたか？

① ランチョン形式でよかった	170	95.5%
② ランチョン以外の時間帯がよかった	6	3.4%
※ 未記入	2	1.1%
計	178	100.0%

【問5】 前半の講演はいかがでしたか？

① とても面白かった	83	46.6%
② まあまあ面白かった	61	34.3%
③ 普通	22	12.4%
④ あまり面白くなかった	2	1.1%
⑤ つまらなかった	0	0.0%
※ 未記入	10	5.6%
計	178	100.0%

【問6】 後半のディスカッションはいかがでしたか？

① とても面白かった	98	55.1%
② まあまあ面白かった	49	27.5%
③ 普通	12	6.7%
④ あまり面白くなかった	3	1.7%
⑤ つまらなかった	1	0.6%
※ 未記入	15	8.4%
計	178	100.0%

【問7】 今後このような試みを続けるべきだと思いますか？

① 是非続けるべき	145	81.5%
② 続けるべきだが方法を変えた方がよい	19	10.7%
③ やめた方がよい	0	0.0%
④ わからない	3	1.7%
※ 未記入	11	6.2%
計	178	100.0%

【問8】 このセッションに関する感想をお聞かせください。

- ・ 教員側が悪という流れが強かったが、学生側の意識も問題だと思う。相互からのインタラクションが大事。
- ・ 大学院教育に関係なく、自分が今まで知らなかった事、知っておかねばならないことをたくさん学ばせていただきました。
- ・ 普段は所属している研究室の先生としか関わりがないので、たくさんの教授の方のお話が聞けて面白かったです。
- ・ 教員のコミュニケーション能力の向上が必要と実感した。大学基準協会の評価を上げるために院生を増やそうとしている意図を感じます。数字をみて人を見ていない。
- ・ パネルディスカッション
- ・ スマホでないので参加出来なかった。
- ・ 知らなかったシステムなどを知れてよかったです。
- ・ リアルタイムにメッセージが現れるのが本音が見えて良かった。
- ・ 自分としてはこの時間帯でよかったが、ランチョン目的で来てる人は、食べたらずらり出たり、イヤホンきいてたりしたので、ランチョン目的でない、うしろに席がなくて立ってた人たちがいるので、この時間に、ランチョンでやるのが最適とはいえない。
- ・ 勉強になりました。院へ進学し、海外の経験も積みたいと実感できました。ありがとうございました。
- ・ もっと大きい会場でたくさんの人にきいてほしいです。
- ・ 面白かったがアンケートの意見に対するコメント時間が不足で消化不良（でも全体の時間があるので仕方ない）。
- ・ 大学毎の教育に対する取り組みの違いが大変参考になった。
- ・ 学生側からもパネラーを出しては？
- ・ 参加者を教員に絞ったスタイル、学生に絞ったスタイルなど参加者別にしていても面白いかも。
- ・ パネリストの方々のやりとりが大変面白かったです。
- ・ いろんな意味でちぐはぐな議論だった！
- ・ 学部、修士、博士に対する教育方針の前提がないのでまとまらない。留学も良いけど日本に帰ってきてポストがあるかわからないので若い人はトライしないのでは。博士もちが活躍できる例がないと。

- ・アンケート結果がすぐに反映されて、セッションが進んでいくのがおもしろかったです。
- ・修士教育もまじめに議論すべきでないですか？ 生命科学分野は集中講義などという、修士講義コマ数まびいて適当なこととしているところ多いのでは？
- ・キャリア形成に対する幅広い考えを聞くことができた。
- ・コメントを集める意味があまりなかったように感じた。パネリストにはコメントに対する意見・反論をしてほしかった。
- ・木村先生のご意見はどれも本当に納得するものばかりだった。自分の今と今後を考えるいい機会になった。胡桃坂先生の勢いとても良かった。
- ・不安や主張をディスカッションできたので、先生・学生間の心情が共有できた。
- ・今後このような試みは続けるべきだが方法を変えた方がよい。大学院(大学学部を含む)の教育に対してあまり関心のない人、「改善しなくても良い」に近い考えの人の意見を聞いてみたい。内容はおもしろかった。
- ・生の声を聞き Discussion 形式で行うのは効果的で良いと思った。
- ・毎年、身近な問題を取り上げてくれて、考えさせられるので良い機会だと思う。
- ・大学院生のキャリアパスについて、ここまで考えている先生方がいらっしゃる事に感動しました。胡桃坂先生の熱い話が心にひびきました。
- ・あつい議論であったと思う。院生の給料問題は財源も含めて議論すべき。
- ・もう少しケタイをつかったシステムを改善しては。たとえば司会の人がある場で思いついた設問を臨機応変に出せるようにするなど。
- ・副指導教官という制度をはじめて知った。うちの大学にも設置してほしい。
- ・研究室教育の見直しの契機になる。
- ・現状の問題点を確認することはできたが、その解決法のハードルが高そうだ。
- ・うまく構成されていた。もう少し時間をとってよかった。
- ・博士への進学は考えていないが、大変面白いセッションでした。大学院教育についてもっと考えてみようと思いました。
- ・とても良いセッションだと思います。ありがとうございました。
- ・いいかんじ。
- ・どんどんやってください。
- ・前向きなのはいいが理想論に終始しすぎている。日本のリアルな現状を知らなさすぎる。全体的にナイーブ。
- ・パネリストが喋ると、Web 上の意見を両方飲み込むのが大変だった。面白かった反面情報量がすごく多いと思いました。
- ・全員が同じ意見ばかりでつまらなかった。結論ありきで進行していた気がした。
- ・主指導、副指導の話で時間をとりすぎな感じでしたがそのようなシステムがまだない大学もあることを知りました。
- ・ずいぶん楽しく行うディスカッションでした。携帯形式が良かったです。
- ・博士修了後のことを考える上で、アカデミック分野(大学や研究所)だけでなく、一般企業の研究職に就いてる方々を呼んで欲しかった。
- ・携帯参加型で学生をはじめリアルな意見を聞いておもしろかった。大学の研究室で若い研究者が活躍できるように、制度、資金を作るという方針に大賛成です。学生に夢を与えると思います。
- ・自分が学生のときにこういうものがあればよかった。
- ・未来を考えるきっかけになった。
- ・設問が4つだったので、設問を1つにしてほり下げてほしい。
- ・リアルタイムでメッセージを送信できて、とりあげられる形式がよかった。参加できている感があり、よりよく考えられた。
- ・今後大学院教育を考えていく上で非常に参考になりました。ところでインターンシップは土日祝日に行うべきだと思います。あるいは春夏秋冬休み中に限定するように企業も考えてもらいたいと思います。また、理科大薬学部ではアドバイザー教員(別の研究室)がいます。
- ・キャリアについて皆さんが全体でどう考えているのか、が分かり大変興味深いです。
- ・副指導教員の話は大事だが長すぎてテーマがそれてしまっていると思った。留学の話は良かった。胡桃坂先生の司会も良かったと思います。
- ・学生と教員間に価値観・考え方に違いがあるので、それを認識する場としては良かったと思います。
- ・教育に関して熱心に考えている先生がいることを知れて良かった。興味のない先生こそ、こういうセミナーに出てほしい。
- ・学生に理解ある先生方がいらっしゃることに感動しました。
- ・同じ悩みを持つ人がいることがわかり、匿名性の意見出しのメリットが活かされていたと思う。
- ・聴いている方も参加できてとても面白かったです。
- ・まとまりはあまりなかった。
- ・社会全体に存在する労働問題が大学院教育とキャリアにも及んでいると思う。社会全体の労働問題を解決しないでアカデミックだけを解決することは困難だと思う。
- ・おもしろい。もっと長くても良い。午前中全部使っても良い。
- ・いろいろな意見を聞かされたがもう少し大学院教育そのものについて議論を深めてもらいたかった。
- ・育てたい学生像が2つあるが、そこを区別して考えないと、まとまりがつかないのでは。→研究 main の Dr. に皆がなる必要はない。
- ・司会、良かったです。いろいろな意見が聞けて、勉強になりました。
- ・とてもためになるセッションでした。研究室内でも、上司が少なく、博士が少なく、修士が多い状況です。博士の後のキャリア提示を大学(研究室)側がきちりと作り出さない…博士は増えません…。
- ・地方国大に勤務しておりますが、学生の意識が低いと、熱意ある学生へ割ける時間がない。
- ・正直、大学や教員の方、国が博士をどういう意図で求めているのか本音がわからない。結局出口(卒業後のキャリア)が改善されなければ今回の討論の意味も薄いと感じました。博士に対する絶対的なブランドが確立されなければ今後も博士・ポストドクは大変なのでは。なのでセレクションを厳しくして一定の質を確保するのは良いと思います。無意味に増やしているのなら、今後の進学者のためにもやめた方が良く思う。就職への改善を行っていても、就職に有利な研究室・分野の人が増えるだけでは、本当に研究を行う人たちが減少していく気がします。特に基礎系。長々とすいません。
- ・リアルタイムでコメントによる議論が行われるのは有意義であると感じた。
- ・率直な意見が沢山あって、初めて参加しましたが有意義な時間となりました。
- ・とてもよかったと思います。
- ・1人で悩むよりも将来はもっとポジティブで明るいと感じられました。大学院教育に関しては文科省が話しあってもらえることに期待したいです。

- ・先生方が学生のキャリアパスに興味を持っているということが分かって良かったです。
- ・もう少し問題や論点を絞ったほうが良い。でも司会がわるいので仕方ない。昔話とグチは不要。現状と、改善案について話してほしい。個々の研究室の問題とシステムの問題をきちんとわける。
- ・博士課程はアカデミックのキャリアパスしかないと思っていたが、外国ではさまざまなキャリアパスをえがけると知り、おどろきました。
- ・教員側、学生側両方の意見がみえてよかった。
- ・もり上がっていて興味深く感じました。「行きあたりばったり」の話は勇気と希望をもらいました。
- ・夕方時間帯がよい

【問9】 来年以降のセッションで取り上げて欲しいテーマがあればお教えてください。

- ・企業の人をふくめた討論
- ・修士で就職することについて。
- ・大学・大学院教育の充実から日本の未来を変える！！（小林先生の最後のまとめの続きを！）
- ・ブラック研究室について
- ・お金（授業料、奨学金、学振）→文科省の人をパネリストに。
- ・修士学生の進路選択について。
- ・教育の議論をもっとまじめに。また、パネラーの教育の具体例もしめしてほしい。
- ・留学についてももっと知りたい。
- ・女性の社会進出を考える前に、専業主婦希望の女性が多いことを理解した方がよい。働きたくない人に働くことを要求するのはムダ。
- ・大学院（大学学部を含む）の教育に対してあまり関心のない人、「改善しなくても良い」に近い考えの人の意見を聞いてみたい。
- ・研究費のとり方
- ・博士を採用した企業の例を実例として、企業に入った人の話を聞く。
- ・研究者とワークライフバランス
- ・女性博士号取得者のキャリア形成
- ・院生の給料。
- ・実際の修士、博士、学部生が話す時間があればいいと思う。
- ・重点化によるカリキュラム変更のさらなる見直し。
- ・留学のすすめなど、どうでもいい話。ガチでもっと大学院教育の問題を考えてほしい。教員の資質とか、ポストの問題とか。
- ・教授とのコミュニケーションのとり方
- ・とくになし
- ・お金（院通学や留学）問題
- ・「これでいいのか研究費配分！」「これでいいのか業績評価！」「これでいいのか大学学部講義！」しばらくはこれでいいのかシリーズを続ければ良いと思います。改善がなされた後は「これでいいのだ」シリーズに変えていけます。
- ・同じ設問を立てて、経年変化を見ていただきたいです。
- ・女性の教員を増やすという話がありましたが、その辺現実的につめた内容をお願いします。
- ・どういう人が博士に進学して欲しいか。能力はどのくらい必要なか、どういう人は向いてないのか。
- ・学部生向けのもやってほしい。
- ・文科省の方もパネルに参加しなければポストなどの問題は進まないと思います。
- ・研究職以外の進路について
- ・修士や博士で就職した人やアカデミックに進んだ若い人もパネリストに加えて、キャリアパスについて考えてみたい。
- ・大学院教育の質の保証が重要課題の一つ。研究室によって受けられる教育に差がありすぎるが結果は博士の学位と同じ。
- ・大学院生も登壇させても良いかも。
- ・「PIの側をいかに育てるか」(PIの責任が大だと思うので。今の状況も含めて)
- ・修士と博士の就職率のちがいが
- ・任期付き職員（ポスドク、テクスタ…）のキャリアなど。
- ・20年も30年も前の技術（自分の業績）に固執して新技術を取り入れず、学生の要望も聞かない保身にまわる研究室が多いことについて。
- ・大学格差を考えることもしてほしい。人も物も予算も差が大きいので。
- ・テーマは似たものでよいが、企業や官公庁の方をパネリストに加えてほしい。
- ・大まかなかんじは同じで良いと思う。
- ・博士課程を出た方々のキャリアパスについて知りたいです。
- ・文科ではなく、財務の役人をよんで、なぜ日本では教育の priority が低いのか議論してはどうか。

【問10】 本大会での属性調査（添付資料）をご覧になった感想をお聞かせください。

- ・たしかにシンポジウムのスピーカーにもっと女性を増やしてもよいですね。
- ・私は、女性には女性に向けたこと、好むことが傾向としてあると思うので、男女比について、女性が少ないというのは、そこまでこだわらなくていいと思う。もし、“女性だから…”という理由でやりたいことができない人が実際にいるのなら、それは問題ですが…。
- ・今すぐ答える時間がない（アンケート結果見る時間ナシ）。今回のランチョンセミナーのアンケート結果も後日 Web で公開してほしい。
- ・まだまだ女性少ないな。
- ・とても良かったです。
- ・女性の少なさに驚きました……。
- ・5年後には正会員が学生会員程度の女性比率に増えてほしいと思います。
- ・あまり必要ないかな。

- ・学生発表に関しては意外に女性の比率が多いと感じた。
- ・ちょっと情報が多すぎるかも。
- ・女性が少ない（修士以外）。
- ・女性のPIを増やすためには、女性専用枠を作るしかない。
- ・予想通り。
- ・読みにくかった。
- ・文字が小さい。
- ・まあ意外なところはなかった。
- ・女性研究者を支援する制度が必要になっている次期だと思います。
- ・現状について、男性・女性は満足なのか、どう思っているのか、むしろ知りたいと思いました。
- ・女性が少ないのという面があり、仕方がないのかもしれないが、女性が、女性がと言いつつ逆にならざるを得ないのでは。女性が、女性が、と言わないですむ社会になって欲しい。
- ・参考になる。
- ・なんとか女性を増やせないかなあ？
- ・女性が活躍できる機会をたくさん設けることが必要。
- ・女性の研究職への参画が、言われているほど簡単なことではないと感じた。
- ・男女比のバランスをとることは必要なのでしょうか。女性が研究者になりやすい社会である結果なのではないでしょうか。
- ・女性が少ないが、ゆっくり改善されつつあるのでは？
- ・オーガナイザーやスピーカーが固定化されていることが良くないのではないかと。

【問 11】 その他、ご自由にどうぞ。

- ・国の予算等のしくみから変えないと大学運営も教育も是正されないと思う。
- ・大変、参考になりました。司会も良く、ディスカッションがとてもしっかりあがりまして、とてもよかったです。ありがとうございました。
- ・前半の講演は面白かった。ただ時間不足。司会自身が意見を言うのは良かった。文科省の方にももっと話してほしい。
- ・博士、ポスドクの進路データを見たいです。
- ・博士修了者の進学先として、アカデミックや企業等で研究職にこだわった議論をすすめた理由が理解できません。アメリカもヨーロッパも報道やコミュニケーション、企業の営業も博士をもって、いろいろな分野に行ってます。そういう多様性を企画者は学生に示すべき！
- ・胡桃坂先生のお話もおもしろかったです。
- ・大学院としてどのような所を努力すればよいかの議論がなかった。
- ・ありがとうございました。
- ・今後も頑張ってください。
- ・博士に給料、小林さんお願いします！！
- ・前に映し出される文字が小さくて見辛かった。
- ・司会の中々うまかった。
- ・大学院教育に、グラント取得のノウハウを教える授業を組み入れるべき。
- ・今回の会場の意見や、パネリストの意見など、Web 公開して下さい。
- ・面白かった。
- ・大学は基本的に少子化のため斜陽とならざるを得ない。それで文科省に「どうかしてくれ」しか言えないのはあまりになさげなく、やはり斜陽やむなしと思う。
- ・副指導教員の話は参考になりました。小さな大学だと進路も限られるのでいろいろ考えています。自由にできると元気を付けるのもいいですが。経済的な制約（奨学金）などでやりたい様にできない人も多いと思います。
- ・私の研究室に配属される学生は大体は修士課程までです。修士1年春から約1年、インターンを含めて就職活動中心で、修士2年で修士論文発表会の日程が決まるころやっとなんか実験するような状況。始めから研究を希望しているわけではなく就職に有利だからという気持ちの学生が多いような気がします。研究職を希望する学生が少ないのは現在「研究」が地味でネクラ、悪いイメージになっているからでしょうか？ そのわりには口頭発表をすすめても嫌がるような学生がいます。
- ・キャリア選択肢が広いことを学生が知ること、選択肢を増やすためのスタートラインに学生が立てるようにしてあげることが大学院の意義を高めるのではないのでしょうか。
- ・学生の方の意見は普段聞けないものもあって面白いけど、他人のせいにしすぎな気もしました。
- ・仕事を創るといことがないと、キャリアも形成されない。就職先を確保するだけでは不十分で、大学は仕事の創造にもっと貢献すべき。
- ・地方大と都市部の大学の比較をしてほしい。
- ・内容が「月並み」になっていませんか？
- ・この議論を文科省に全部つたえてほしい！
- ・パネリストに地方大や中小大の人がいないのはおかしい。7人中5人が東京の人なんてありえない。
- ・本当にためになるお話でした。ありがとうございました。
- ・副指導の先生にも（自分の指導教官だけでなく）、違う視点からのアドバイスなどもっともらいに行こうと思いました。

〈ケータイアナライズシステム〉

〈アンケート〉 集計結果（四捨五入しています）

練習設問. 皆さんの属性について教えてください。

・学部学生	21	13.4%
・大学院生（修士）	49	31.2%
・大学院生（博士）	26	16.6%

・ポストドク、助教、講師、准教授、研究員等の非PI職	25	15.9%
・独立助教・講師・准教授、主任研究員等の junior PI 職 (非テニュア・テニュアトラック)	9	5.7%
・教授等の PI 職 (テニュア)	19	12.1%
・企業	8	5.1%
計	157	100.0%

設問 1-1. 大学院に進学した (する) 理由は何ですか? 学生の方のみ回答してください。

・アカデミック研究者になりたいから	26	22.4%
・もう少し研究を続けてみたいから	55	47.4%
・企業への就職に有利だと思うから	18	15.5%
・就職活動に失敗したから	1	0.9%
・周りが進学するし、なんとなく	8	6.9%
・その他	8	6.9%
計	116	100.0%

設問 1-2. 大学院に進学した理由は何ですか? 非PI 職と junior PI 職の方のみ回答してください。

・アカデミック研究者になりたかったから	15	45.5%
・もう少し研究を続けてみたかったから	13	39.4%
・企業への就職に有利だと思ったから	2	6.1%
・就職活動に失敗したから	0	0.0%
・周りが進学するし、なんとなく	0	0.0%
・その他	3	9.1%
計	33	100.0%

設問 1-3. 大学院に進学した理由は何ですか? PI 職の方のみ回答してください。

・アカデミック研究者になりたかったから	13	68.4%
・もう少し研究を続けてみたかったから	6	31.6%
・企業への就職に有利だと思ったから	0	0.0%
・就職活動に失敗したから	0	0.0%
・周りが進学するし、なんとなく	0	0.0%
・その他	0	0.0%
計	19	100.0%

設問 1-4. 大学院に進学した理由は何ですか? 企業の方のみ回答してください。

・アカデミック研究者になりたかったから	4	44.4%
・もう少し研究を続けてみたかったから	4	44.4%
・企業への就職に有利だと思ったから	0	0.0%
・就職活動に失敗したから	1	11.1%
・周りが進学するし、なんとなく	0	0.0%
・その他	0	0.0%
計	9	100.0%

設問 2. 教員ひとりに対する理想的な学生数は何人くらいでしょうか?

・1～3人	57	50.9%
・4～5人	42	37.5%
・6～8人	13	11.6%
・9人以上	0	0.0%
計	112	100.0%

設問 3. 大学院教育に何を求めますか？（複数回答可）

・ システムティックで質の保証された教育 ……………	23	14.0%
・ どこでも活躍できるような知的生産能力を身につける教育 …	118	72.0%
・ とにかく研究だけであればいい ……………	17	10.4%
・ その他 ……………	6	3.7%
計	164	100.0%

設問 4. 海外留学を考えていますか？

・ 既に行った ……………	34	23.0%
・ これから行く予定 ……………	18	12.2%
・ 行きたいが、行けないかもしれない ……………	78	52.7%
・ 行ったことはないし、これからも行きたくない ……………	18	12.2%
計	148	100.0%

コメント一覧

No	ハンドルネーム	コメ ン ト
1	SHOW	興味深い企画ですね。
2	508	博士課程三回生です
3	国立大助教	1. 論理的に考えさせる能力、アイデアを出す能力、建設的な批判をする能力、論文や申請書を書く能力、などを身につけるためのトレーニングが絶対的に足りない。 2. 講義や学会で手をあげて積極的に発言する学生がほとんどいない。これは出る杭は打たれる国民性によるものかも？
4	S5	M2 です
5	drosophila	大学院教育に関わる端くれとして興味深いです
6	ニスモ	今は修士ですが、博士に行くか就活するか迷い中です。博士に行きたいですが……
7	研究員	グラント、申請書の書き方も指導すべきでは。
8	hf	学部学生です。修士課程終了後の就職に不安を持っています
9	JJ.	6番さんと同じ境遇です。そろそろ決めないといけませんね……
10	ゴールキーパー	よろしくお願いします。
11	スズミ	よろしくお願いします！
12	オカ	オーバードクター
13	竹子	現在修士課程のため参加しました
14	PPAP	よろしくお願いします
15	たまろ	わからん
16	jh	文科省ではどれくらいが PhD 持ってるのでしょうか。論文や科研費申請書経験はある人が行政に組み込まれてるのですか？
17	M1 です。	よろしくお願いします
18	Marulro	Hi
19	NY	B4 です。来年以降の参考にさせていただきます。
20	とり	よろしく！
21	学生	文科省の職員が、学部卒で博士のことがわからない……。これが現実…。文科省の職員に博士取得者を増やすのが、先な気がします。
22	じゅげむ	学部生です、宜しくお願いします

23	Kiyopy	修士はともかく、博士に「もう少し」研究を続けたい、では無計画？
24	sendaitribune	アクセスできました
25	ひき	よろしくお願ひします
26	はらはら	パネリストが一流のアカデミック先生ばかり
27	oo	修士学生です、よろしくお願ひします。
28	H2AFZ	博士課程進学後のキャリアに大きな不安を抱えております
29	いしまる	よろしくお願ひいたします！
30	とり	国立のうちは9人だ。多すぎ
31	M	修士1年です。よろしくお願ひします。
32	レクチン	なし
33	砂糖	院卒は本当に就職に有利なんですか？
34	がす	学部だけでは実際研究できていない、就活や授業で時間を取られるから、とりあえず続けて見たいから修士に行ったではダメ？
35	研究員	大学院生にも給料を払うことを義務づけるべき。そうすればおのずと数は均衡するはず。
36	yamagata	大学院の授業料について議論してもらえますか？
37	るちあーの	研究所のポスドク(約10年勤務)を見ていると、見えない来年、5年後、10年後に対する不安が伝わってきます
38	toshi	修士1年です。企業研究者になりたいのですが不安です。インターンや募集も少なく就活はどのように動けばいいのでしょうか。
39	ねこ	指導教官と進学や博士取得後のキャリアパスについて話し合う機会がない
40	GT-R	現在のラボは1:20でさすがに多すぎます
41	508	いち研究室に3-4人の先生がいるイメージなのでトータル研究室として10人を超えるくらいになる感じです
42	さいこばす	1:14だ！
43	eel	少子化が進んでいるのに、学生定員をへらすべきではない、というのはおかしいのでは？
44	学生	私学なので毎年、学部生が6-9人、入って来ます。大学院には1割も進学しません。
45	博士学生	ポスドクになってしばらくしてから、やっぱり企業に行こう、ってのはそんなに難しいの？？
46	うみ	もう少し研究したい、というのは、やってみて博士に行く(またはアカデミアに就職する)かどうかをもう少し研究してからきめたい、ということでしょうか？明らかに博士課程進学後の進路は不透明。それをわかって不安に思うくらいなら進学はやめた方がよい。
47	SW	就職先が修士で出た時と博士で出た時とで同じであれば、あまり博士に魅力がないのではないかと
48	H2AFZ	私の大学院は、教育しているというよりは、ただ研究をそのまま継続するだけの機関という印象です。
49	D院生	教員は研究以外の仕事も入ってきており忙しそうだから、今でも学生にかかる時間は少ないイメージ。抱える学生が多いと、一人一人を考える時間が少なくなり、十分な相談ができないのではないかと
50	J.J.	ねこさん >> 確かにそうですね、卒業までしか話し合えないです
51	Kiyopy	博士課程に進学するか迷っている場合、基本的には「やめとけ」と指導してます！ そうしないのは、研究能力が高いかどうかではなく、つぶしが利く能力が見えている場合。
52	た	大学院に進学して、優秀な研究者であっても良い教育者ではない人が多いことを実感しました。
53	TT	学生も教員にキャリアパスの相談をしない。就職先を紹介しないとキャリアパスと思ってない。
54	くろー	研究室や分野によっても就活の有利、不利があるのが厳しいところ
55	寒い人	教授が雑務が多すぎて指導時間が少ない。研究費を取るためだったり、大学の会議だったり。

56	k	高い学費を払っているのに、教育してもらえない、業績も出ない、就職もできないってこともあるのかも。そういう意味で質の保障された教育や、どこにでもいける能力を身につけられることは必須かとおもいます。
57	jh	研究担当教員と教育担当教員を分けないと無理です。学生はユーティリティな能力を身につけたい、教員は専門の研究を進めたい。基本的にミスマッチ
58	A	研究で成功したすごい優秀な学生を、就職させたいですか？
59	„	指導能力のない助教、講師が指導教員になってることが多い気がします。
60	asahi	企業への就職が有利になるから大学院に進学したい、ではダメでしょうか？ 企業で専攻と関係のある職に就くには現状少なくとも修士の学位が必要であることが多いです。
61	508	話し合うけど将来はケースバイケースだからなあという結論になることが多いです
62	も	大学院教育を変えるなら教授陣の意識統一をするべきだと思う
63	RA	地方大学でも教員の数が減ってきて、雑用が多くて、教育研究の時間が減ってきているのが現状です……。少子化だからこそ、大学・大学院の教育研究に力を入れて、優秀な人材を育てる必要があるはずで、教員の定員をむしろ増やす方向に転換した方がいいと思います。
64	シウマイ	なんとなく修士に行く人が多すぎるのでは？ 主体的に過ごせば自然と能力も付き、就職もできると思います。
65	お	指導教官が、インターンシップなど就活に関わる事柄に対して嫌な顔をするので、自然と進路の相談をしなくなった
66	H2AFZ	研究が目的である研究室と、就職が目的である学生の間で齟齬が生じるのは必然的なことだと思います。
67	J.J.	アメリカでは博士課程で給料が出るから多種多様な人が博士まで進める。
68	修士1年	学生は受け身になっていることが問題ではないのか。受け身な学生は熱意がないように見えるし、指導する側もやる気がそがれる。結果として放置されているという思いになるのではないのか。
69	よ	少なくとも修士出は、企業ニーズがあるイメージです。テーマ云々より、自分で問題を解決しようという意思がある、多少叩かれてもへこたれないとかいうことです。
70	学生	ボスとの飲みケーションが大事だと、博士課程に進んでから、よくわかりました。その時にボスはわざと研究以外の話をしてくれます。感謝です。
71	め	だからドクターの質は落ちている？
72	SW (修士2年)	相談にのってもらわずとも、環境が整っていれば学生は自分たちでどうにかするのではないか
73	cam6	無計画に博士号取得者を増やすだけで、社会全体の博士のニーズは高まっていない。行政レベルで何かできることはないか。
74	jh	論文なしで博士あげるのはダメだと思います。博士取得でセクションが働かないから価値がなくなったと思います。
75	D 院生	タイムマネジメントの講義を大学院教育でやってほしい。自分の研究活動（プロフェッショナルになる訓練）とキャリアについて考える時間を、うまくやりくりする力をつけていく必要がある。
76	た	自分がどのような教育を受けたいか、具体的に語れ無い学生は少なからずいると思う。流れて今にいたるのに、望みが節は多い節はあると思います
77	J.J.	小林さん期待してます！
78	なな	おっしゃる通りで、教員の中には(特に50代以上)アカデミア以外の進路を見いだせない、しらない、許せない人がいる。こんなに時代が変わったのに。
79	sf	大学院の学費を下げる
80	k	大学院生はもう少しきちんとセクションして数を減らしていいので、おっしゃるように給料を出すなり、学費をなくすなりしてもらわないと、学生は将来への負担と金銭の負担しか残らない。
81	AK	教授が就活に理解を示していません。
82	Kiyopy	学生の人格を大人として尊重してますか？

83	碧	学部生用の就職支援セミナーと必修科目の実験（一つの実験でもサボると留年）が重なるせいで就活できずに院に行くしかなかったのですが
84	ニスモ	その通り、しかし、それで将来が明るくなるかはわからない
85	I.T	コミュニケーションとれそうな先生ととれなさそうな先生の差が大きい気がします
86	ある助教	研究を通して「自発的に物事を考える」事を学ぶのが大学院と考えてます
87	sf	修士課程では研究を頑張っても企業には評価されず、何もしないまま卒業する人と同様に扱われ、就活をずっとしている人の方がむしろ就職に有利な状況になると研究のモチベーションが下がります
88	砂糖	ボスも研究員も子供がいて飲みにいけません、どうしましょう
89	助教	モラトリアムで進学する学生が大半の現状で全大学院生に給料を出すのは反対。学振の枠を増やすなどで対応しては？
90	びち	選択肢として企業が博士の能力を信用していない以上は、学部卒や修士卒での就職を選びがちになるし、その進路上で研究室と密着することが良いとは考えづらいですね
91	とり	このセミナーいいけど、うちの教授がきいてないから意味なくて悲しい
92	。。	ラボローテーションとか導入してほしいですね
93	N	教員の人たちは、教育についてどれくらい真剣に向きあおうとしているのか？人材教育と研究推進の能力は別物なので一致しないことも多い。
94	D 院生	ポストク量産計画って、企業や行政で働く博士取得者を増やすための計画じゃなかったのですか？その段階で大学院教育を考えておく必要があったのに。なにか政策を立てるなら、その本来の目的を具体化して考えるようにしないと、なにを行なっても本末転倒になる気がします。
95	飲み会は好きだけど	酒の力を借りないとコミュニケーションとれないのは問題。
96	saku	自分の興味で研究室を選ぶのは間違いなのではないでしょうか？
97	rdntia	自分で選んだ大学院進路や研究室なのに、全て教員側が悪いように言うのはおかしい。学生側の甘えが大きすぎる。
98	k	教員数やポストを開けるのも大事だが、今いる教員にも「指導をきちんとしているか」とか「研究しているか」とかで定期的な査定をして、なにもしない人のポストを開けてほしい。
99	大学院教育	研究室ごとの格差が大きいのは事実だと思う。ただし研究室に配属される学部の段階では、各研究室で何を学べるのか分からないし、気付いても自由に研究室を変える事は難しい。システムとして課程中にも研究室間を自由に動けるような仕組みがあったらいいのでは。
100	D-loop	博士課程の学生に給料が必要なことは同意。しかしこれは教授がふところをいためなければだめ。そうしたらより博士課程に進学すべき学生を選択できる。free laborとして学生を受け入れることにより学生にとっても不幸な結果をもたらす。もちろん上記ができるためには、文科省からの大学への運営交付金を増加させる必要あり。地方大学などにも面白いアイデア、研究を行う人材は多くいるが、研究費がないことが大きな障害となっている。
101	ゆう	就活をしてみてわかったことは、博士課程学生は企業での研究がどんなものかイメージできていない。その点をもっと大学で教えれば視野が広がる学生も多いと思います。
102	Kiyopy	大学院重点化したのに、博士課程学生増えても少子化だから教員減らすのは、おかしい
103	けんじ	半年間インド旅行に行くのと就活するのは同じじゃないの？
104	asahi	つぶしが利く分野だからって博士が増えるとは限らないですよ。
105	No name	資源のない日本では、人材育成がとても重要なのではないのでしょうか。
106	ある助教	ここに聞きに来ない教授はキャリアパスに興味が無い
107	"	学生のキャリアパスを問題視していない先生はそもそもこのセミナーにきていないのでは
108	Kiyopy	博士課程中退は修士卒より高い学歴と評価して！
109	k	学生が確固たる研究職への目的意識がない限り、博士への進学は勧めない。修士後のリスクが高すぎるから。そもそも研究したくないなら早めに就職した方が収入も入るし社会経験も積めて絶対学生のためになるので、研究への意欲があまり高くない学生には積極的に就職を勧める

110	H2AFZ	博士課程に対する給与は、ネガティブドクターの増長に繋がりがねないと思う。セレクションを慎重にすべき。
111	B4	3,4年の間いくつかの研究室にローテーションで所属できるような制度がほしいです。それから大学院のラボを選びたいです
112	JJ.	>>〇〇〇さん 全くその通りですね
113	学生	インターンシップ！本人が希望して、行かせなきゃ、アカハラで訴えられう。就活決まってる学生を卒業させなきゃ、大学の就職課から文句言われてる先生たち。かわいそう。
114	た	副指導教官のシステムを知りませんでした。うちにはありません。
115	たま	確かに制度は充実しているかもしれないが、研究室を移しても毎日毎日元の指導教官と会うような環境ではその制度はとても活用しにくいのではないかな。
116	asahi	研究職のインターンは1～3週間かかるものが多く、行きたいとはちょっと言い出しにくいです。
117	n	教員と副指導教員との間で板挟みになってた先輩がいたから必ずしもいい制度というわけでは無い気がする
118	あい	ひまで元気なお年寄りを大学院に大量に入れたらどうでしょう？福祉と教育をまとめたら、国は予算くれるのでは？
119	M1	うちの研究室の教授もこのセミナーを聞いてほしい…
120	大学院教育	今のシステムをどう変えたら良いかという話も聞きたいです。
121	リーディング修士	複数の指導教員や分野を知りに行くことはとてもいいと感じています。ただ、学生が能動的でないと上手く行きません。
122	Kiyopy	企業の研究者を特任教員として、研究ではなく学生指導に参加して貰えば、企業が求めるものを知る機会になる
123	508	大学の就職課としては就職率>研究成果というよくわからない方針になっている感じが問題の一因かなと思います
124	D	私の場合は、副指導教員の先生に一度相談をさせていただいた後、3ヶ月に一度くらい副指導教員のほうから『最近どう？』とわざわざメールをしてきてくれます。感動しています。
125	たくていー	学生はお客様なのでしょうか？
126	さとう	学生は自分が何をしたいのかじっくり考える時間が必要だと思います
127	Kiyopy	この企画、期待を遥かに超える内容 参加して良かった。ありがとう！
128	とり	今検索してみたけど、うちの大学には副指導教官いなかった
129	JJ.	>>〇〇〇さん 微妙ですよ、学費は払ってますが…
130	508	インターンの問題は企業が大学に来て実験してる学生を取りに来てくれ。そうすれば、学生はインターンに行かず実験して、企業は優秀な学生を取れる。教授は企業の人を呼んでくれ
131	た	副指導教官の導入に、大学ごとで差があるのはなぜですか
132	rdntia	大学院進学目的は、自らの能力の向上に必要なものを、自ら発見して培うという方法を学ぶことにあると思います。その点で、学生はハングリー精神が足りないし、逆に教員側も、インターンなどそのような能力を養う機会などに反対する人は本質を理解できていないと思います。
133	TA	教育専任の教員を増やす
134	青 (M1)	副指導教官良さそうだけどさらに教員の仕事増えるな…
135	助教	大学教員は学生さまに気持ちよく学位を取ってもらおうのがお仕事です。
136	**	先生がアカハラになることを恐れすぎて、学生の進路や研究に口を挟まなくなってしまう結果、コミュニケーションがとれなくなってる気がする
137	地方大	本学は講座制。教授が指導教官、准教授が副指導教官。
138	LP	副指導教員に限らず研究室の中の縦の関係だけでなく、研究室を超えた横の関係が学生のメリットになるのでは

139	D	私の場合、副指導教員以外の先生にも相談させてもらってます。それは、研究科の集まる行事や、学会などでご挨拶させていただき、相談にのってもらったりしています。学生の相談に親身になってくださる先生が多いことに、学生は気付くべき。
140	508	うちは副指導制度あるけど、副指導教官を決めるのは教授だからなあ あんま意味なし
141	saku	うちの大学はかなり閉鎖的です
142	たま	副指導教官が垂れ込む怖さが払拭できないのはいかがなものなのか。副指導教官と指導教官に力関係があったら意味がないので、全く関係のない第三者がいた方がより機能しそうだと感じた。
143	じゅげむ	確かに、自分が関わっている研究が社会にどう還元されるのか、意味をもたらすのか あるいは単純な知的好奇心からなのかはきちんと知りたい
144	sf	学生の質と熱意について、受験すればほぼ誰でも修士課程に進学できることが原因の一つではないでしょうか？
145	なんでだろう	大学に副指導教官の制度があっても、活用してない研究室が多いです。
146	508	〇〇〇の意見は同意
147	Kiyopy	ブラック系が専攻内で幅をきかせてると副指導教官を導入しないだろう
148	asahi	副指導教員制度でなくても、研究室外の人脈が作れば良いけど…学生相談室ももっと活用できれば
149	M	コミュニケーションが取りやすい取りづらいに関しては、自分の考え次第な部分もあるかと思うのですが。指導側に問題があるとは限らないと思います。
150	ころん	大学教員は男性の方が多から、女性としては同性の副指導教官がいたら嬉しい…
151	asahi	無理とは思いますが、研究室ごとのドロップアウト率を公開して欲しいですね。
152	k	どこのラボでもポスドクがいるわけではないですよ、雇うためには一定の科研費とれないと、ラボの運営だけでいっぱいいっぱい
153	J.J.	アメリカは何で博士に給与なんて出せるんですか？
154	jh	助教などの中間管理職のことも考えてください。プレーヤーであるべきか、トレーナーであるべきか、全くコンセンサスがなく、業績評価も人により価値観が異なります。
155	student	英語で意思疎通ができないので、向こうで引きこもってしまいそうです…
156	SW	最終的にお金
157	GT-R	海外留学の詳細が不透明すぎるのが問題なのではないでしょうか？
158	な	学生は、高齢ポスドクや任期付き教員の行く末をじっと見てる。結局、彼らの問題が解決しないと、無理では？希望を持って進学する人は少ないでしょう。お手本、モデルがいないとキャリアパスも考え辛いな？と思います。
159	博士	博士課程が学部生教育に関わり、その報酬を出す。(TAの役割を強化する)
160	びち	英語の拙さを理由にしてたら一生海外に行けないよ
161	JH	イギリスいきたいけど Brexit の影響が不安です
162	yamagata	副指導教官いいですね。でもまた仕事が増えそうで怖いです。
163	No name	外に出ると、自分の国である日本の見方が変わります。
164	ra	うちの大学では半年ごとにチューター面談制度があります。
165	N	東山先生は猪突猛進型です。
166	H2AFZ	行き当たりばったりは今の時代でも通用するのでしょうか
167	学生	行き当たりばったり！ そういう話を、学生に沢山して下さいよ！
168	砂糖	将来日本にいる意味がないのは賛成
169	plum	行ってみたい気持ちはあるのですがお金が……

170	Kiyopy	司会者は司会しろ
171	bas	このセミナーは、なぜ大学や教員側が悪い前提で話が進んでいるのでしょうか。僕は修士の学生ですが、学生の中には甘い考えの人が多と思います。教員側が思う学生の問題点も挙げて、学生の考えとの相違点をまとめる必要があるのではないですか。
172	J.J.	>> ○○○さん 心に刻みます
173	asahi	ただ、ずっと海外だと家族の理解が不可欠ですね。
174	学生	海外ポスドク向けフェローシップを増やして欲しい。
175	mTOR	海外の研究室の見つけ方を教えて下さい
176	D 院生	博士としての資質がほしいなら、1つのことを深めることがもちろん重要かも知れないけれど、自分の専門を広い英知の中の1つであるという、俯瞰的に物事を見る視野を得ることが重要なんじゃないでしょうか。海外に行く、ラボを変える、というのは、それを実感する大切な機会だと思っています。
177	疑問	行き当たりばったりで大丈夫だったのは、なにより研究を誰よりもやってるから。それがないと、行き当たりばったりは成功はしない。今の学生はそこまでの熱意が研究にあるのか？
178	。。	独身なら留学はためらいなくできますが、共働きで新婚の場合なかなか留学しようとは思えません。
179	eel	行き当たりばったりで、どうにもならなかった人はここにはいない。
180	アメリカ	留学行ってきたけど、楽しいよ！
181	負け酒	研究職につかないとダメみたいな風潮きらい
182	RA	海外留学は絶対に行くべきです！目から鱗の体験ばかりで視野や世界が格段に広がります！
183	J.J.	起業家的な人が向いてるって事なんですかね w
184	学生	欧米以外への留学はどうですか？ シンガポールやオーストラリアもあり？
185	saku	学生の間違った考えを正すのも教員の仕事でしょ
186	りんご	ベンチャーとかかなりアクティブな提案だけど、将来考えたら不安。アドバイスするのは簡単だけど、
187	:	今どきメールとスカイプでインターンや就職が決まってしまうのだから、結局やる気と勇気次第に見える
188	J.J.	>> りんごさん 同意です
189	Kiyopy	でも、いい司会でした。ありがとうございます！喋りすぎも許容範囲です。
190	砂糖	将来お金持ちになりたい、どうすれば…
191	ー	大学発ベンチャー
192	ああああ	理想はいろいろ言えるけど、予算の保証がないと絵に描いた餅でしかない。文教予算が減り続ける現状を変えないと。ちなみにうちの研究科では主指導教員が学位主査になれないようにしました。
193	企業	も大変ですよ。どこでも猪突猛進の人達が活躍していると思います。そう人達が企業に来て欲しいです！
194	不安って？	何が不安？ 安定な仕事を求めるなら研究職をやめた方がよい。新しいものを作り続けることは不安との闘いだから。
195	plum	学部生で長期留学すると学年が下がってしまうし、ダブルディグリーはお金が掛かるし、院生で留学するのはさらに難しいのでは？
196	cam6	留学、良い面ばかりではない。歳を取りすぎると日本で仕事が見つからず、帰って来れない
197	お疲れ様です	来年も胡桃坂先生司会で！
198	tw	台湾でもいいと思います。
199	jh	文科省から研究室にインターンして論文出したらいい

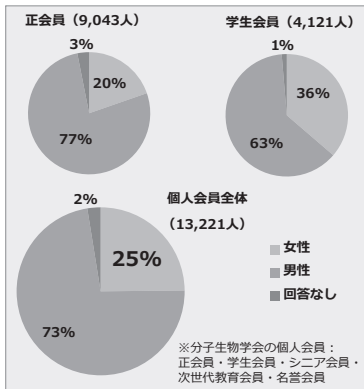
バランスの取れた研究環境を築くために

～2016属性調査、今後にどう活かす？～

疑問：シンポジウム・ワークショップなどのオーガナイザー・口頭発表者における女性比率は、学会員全体における女性比率と比べて低いのではないのでしょうか？

大学や研究機関での男女共同参画を推進するために、学術研究発表の場である学会の大切な役割の一つは、優れた研究に対して、性差などに関係なく、より積極的に発表し、評価される機会を創出することだと言える。上記の疑問をもとに、日本分子生物学会キャリアパス委員会は、年会発表者が属する性（属性）について、2009年度（男女共同参画委員会/当時）から継続調査を行っている。2016年の調査結果と、過去5年間から今後に向けての動向を考えた。

日本分子生物学会会員の男女比率 (2016年9月15日 現在)



2016年第39回日本分子生物学会年会発表者の属性調査

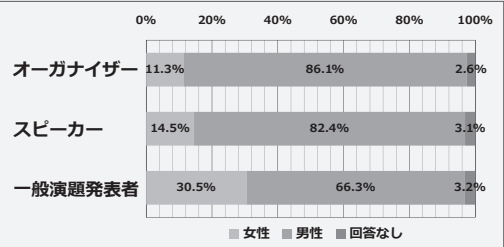
演題登録システム（日本語版・英語版）にアンケート設問を設置（回答は任意）し、8月3日までの演題登録者等3531名の協力により得られた回答結果である。尚、Late-Breaking Abstracts投稿分（316件）、登録後にシンポジウムスピーカーとして選択されたもの（160件）は含まない。一部のオーガナイザー等に関する調査では公開情報や学会会員データ（学会個人情報保護方針に依拠）なども併用した。



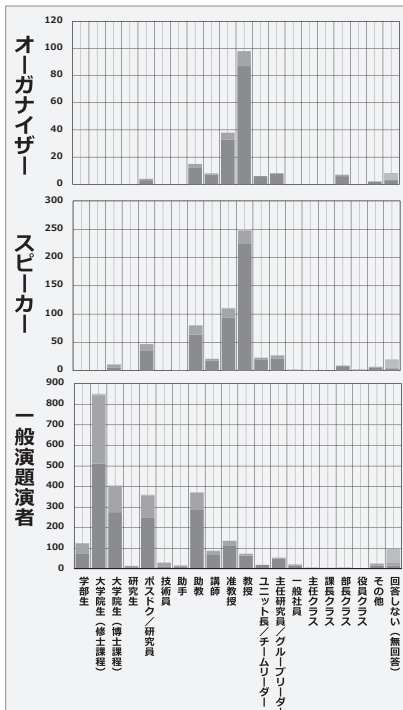
年会の発表者として、3種類の参加の仕方

参加方法	他薦	自薦+他薦	他薦	自薦
●シンポジウムオーガナイザー 指定：年会プログラム委員会で検討・依頼	他薦			
●シンポジウムスピーカー* 指定&公募：オーガナイザーが検討・依頼	他薦	自薦+他薦		
●一般演題発表者**：自発的な申し込み	他薦		自薦	

* 一般演題から選ばれたスピーカー（160名）は含まれない
** LBA発表者（316名）は含まれない



2016年発表者の職階を比較



職階に注目した理由

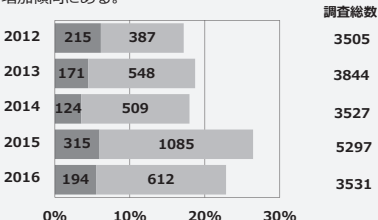
学術集会において発表者が担う役割や責任は、どのような立場（職階）で研究を遂行しているか、または経験によって異なる。学生会員→正会員となり、職階が変化する過程で、演題との関わり方（自身の研究成果発表～分野全体の展望をまとめる）が変化することを反映するのではないかと考えた。



本当にバランスのとれた状態を実現するためには、継続的な属性調査を行い、現状把握と取り組みの方向性を検討していくことが大切です。どうぞご協力をお願いいたします。

(Q1)「機会」はどのくらいあるのか

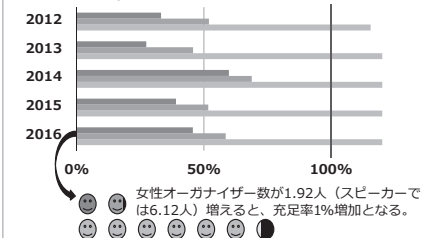
全発表者数におけるオーガナイザーまたはスピーカーとしての発表者の割合は、この5年間で約17%～27%の間で推移している。スピーカーとして参加する機会自体は増加傾向にある。



(注：数字は人数。オーガナイザー+スピーカー+一般演題発表者=100%、2015年は日本生化学会との合同大会)

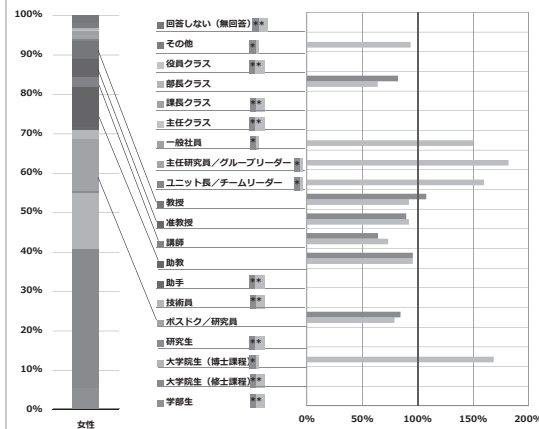
(Q2)その中で女性比率は適正？

各発表者カテゴリーについて、個人会員全体から期待する女性比率（約25%）と等しい状態を100%として示した（オーガナイザー、スピーカー、一般演題発表者）。例えば2016年のスピーカー612名については、女性が25%（152名）を占める場合が100%であるが、実際には14.5%（89名）なので充足率60%弱となる。



(Q3) 女性比率の増加がより期待される職階は？

2016年の調査結果より、各職階におけるオーガナイザーとスピーカーの割合に着目し、オーガナイザーとスピーカーの女性比率が、同じ職階からの発表者全体（オーガナイザー+スピーカー+一般演題発表者）における女性比率と等しい状態を100%として示した。このうち正会員が属する職階では、全体的にのびしろがある状態(<100%)であり、特にポスドク/研究員や講師でその傾向が強い。100%を超えている職階（一般社員など）もあるが実際の参加人数が少ないため、全体への寄与が小さい。
*対象となる女性参加者がいない（女性比率0%とは言えない）



今後どのような取り組みが可能？

一般演題発表者における女性比率が個人会員全体における女性の割合を上回っているのに対し、オーガナイザーやスピーカーでは下回る傾向が続いている。しかし、男女ともにスピーカーとして学会に参加する機会自体は増加傾向にあり（Q1グラフ）、一進一退しながらも期待される方向へと変化していることも事実である（Q2グラフ）。オーガナイザー及びスピーカーの女性比率を2016年参加者の職階ごとに比較すると（Q3グラフ）、ある程度参加者数が多いのびしろがあり、全体のバランス改善への寄与が期待される職階（学生以外）が複数存在する。

さらなる改善に向けて、女性研究者の研究時間確保と出産・子育てなどのライフイベントとの両立を目指すだけでなく、女性研究者の積極性を促す必要性も指摘されている。企画における学術的自由という大原則のもとで、研究者の性別にかかわらず、年会への一般演題発表以外での参加（スピーカー・オーガナイザー）が活性化されることは、優れた研究の発表機会としての年会の目的とも合致するのではないだろうか。

今後、年会発表における男女共同参画の望ましい形を検討するために、本調査の内容を見直しつつ、調査結果の活かし方を考えていきたい。

第6回(2018年)日本分子生物学会 国際会議支援募集のお知らせ

日本分子生物学会では、昨年に続き、2018年(2018年1月~12月)に開催計画のある国際会議に対しまして支援事業(開催補助金の助成)を行いますので、ここにお知らせいたします。

科学のグローバル化が進む一方で、国際会議を通しての情報の交換は科学の大きな必須手段の1つとなっています。しかし、日本で開催される質の高い国際会議の数は増えていない状況があります。また、関連分野の最新の研究に若い時から接することは優秀な研究者を育てる上で要の1つと考えられます。本支援は、日本(あるいはアジア)発の originality の高い国際会議を育て、若手研究者をサポートすること、日本発の研究を世界に向けて発信する場を設けることを目的として立ち上げられました。

本国際会議支援(開催補助金の助成)を希望される方は、下記の要項に従って、奮ってご応募ください。

特定非営利活動法人 日本分子生物学会
理事長 杉本亜砂子
国際会議支援・選考委員会 委員長 石川 冬木

■募集要件

1. テーマ: 分子生物学の分野ならどのような分野でも可-新しい領域、外国では見受けられないユニークなテーマが望ましい。
2. 開催規模: 参加人数は50名以上200名程度までとし、そのうち外国からの参加者が少なくとも20%程度いること、さらに口頭発表者の中で外国人が3割以上を占めることが望ましい。
3. 開催の形式:
 - 1) 分子生物学会会員が主催者あるいは共同主催者であること。教育・研究機関の主催、研究費主催のものは除きます。(組織委員(国内)については、できるだけ本学会への入会を推奨します)
 - 2) 共催: 他の団体との共催は可とするが、その場合、参加費に関して分子生物学会会員価格(特に学生会員を考慮されたい)が設定されていることが望ましい。
4. 留意事項:
 - 1) できる限り、国内の若手研究者の口頭発表の機会を作ることが望ましい。
 - 2) 本学会年会のサテライト会議(年会会期前後または近い時期での開催。開催場所は問わない。)とすることが望まれるが、他の時期・場所での開催も可能である。

3) 会議開催に際しては、分子生物学会が用意している支援システム(JTB西日本による国際会議トータル支援システムを長期契約のもとに割安価格で使用)、①基本システム代金:23万円(事前参加登録受付・演題投稿受付・カード決済等の基本システム設定)、②オプション/メインHP代金:25万円(全体デザイン・ページレイアウト・サーバ管理12ヶ月・更新メンテナンス12ヶ月)、③オプション/オンライン査読システム:8万円、④オプションその他、のうち基本システム①を必ず使用することを応募条件とします。

4) 支援が決定した後は、主催者は各種の報告書・広報ポスター・国際会議HP等に本学会からの支援を受けて開催されることを、表示する義務を負うものとします。

5) 採択された場合には、会議終了後、開催責任者にミーティングレポートを執筆いただきます。学会誌「Genes to Cells」に掲載しますことをご確認ください。

6) 残金が出た場合、補助金の返還を求められます。

■開催補助金と件数

援助する金額は、一件あたり100万円~250万円。年間2件程度。開催期間・参加予定人数によって金額の変動あり。学術振興会の国際会議等の大型支援を助成された場合は多少の減額あり。

(補助金の使用用途は限定せず自由度を持つものとします。他経費で補えないものが望ましい。ただし国際会議終了後、本学会への会計報告(収支決算書概要)提出の義務を有します。また、分子生物学会から支援を受けたことを、HP、要旨集などに明記いただきます。)

■応募方法

申請書は、分子生物学会ホームページからダウンロードして使用してください。

所定の申請書に、国際会議の目的、形態、予定講演者、おおよその予算規模と使用用途等を記載し、学会へ提出してください。

■申請書送付先

〒102-0072 千代田区飯田橋2-11-5

人材開発ビル4階

日本分子生物学会 国際会議支援・選考委員会 御中

TEL: 03-3556-9600

E-mail: info@mbsj.jp

■締切期日 2017年3月31日(金) (必着)

■スケジュール (開催補助金の交付)

- 2017年3月31日：応募締切
- 2017年4月～5月：選考
- 2017年6月：補助金の交付 (予定)

■選考

国際会議支援・選考委員会が選考に当たり、理事長承認のもとに決定します。

国際会議支援・選考委員会

石川冬木 (委員長)、五十嵐和彦、貝淵弘三、水島 昇、
吉田 稔

分子生物学会による、国際会議支援システム (参加登録～演題受付～カード決済 / Web 運用) 利用のご案内

分子生物学会では、日本発の国際会議を学会が支援するために経済的支援を行うことに加え、国際会議を開催する研究者の事務的な負担を減らすため、支援システム (JTB 西日本による国際会議トータル支援システム / Web 運用) をご用意しております。国際会議支援の詳細は同公募要項の中に書かれているとおりですが、同支援事業の応募とは別に、システムのみを使用されたいとの希望者につきましては、分子生物学会の会員であれば同額での利用が可能です。

システムのみを使用されたい場合は、学会事務局 (分子生物学会 国際会議支援システム・システム利用係り E-mail: info@mbsj.jp) まで E-mail にて、開催概要と連絡先を明記のうえ、お申込みください。(一旦、学会を経由してから、JTB 西日本の担当者をご紹介します)

《支援システムの概要》

本学会が JTB 西日本と長期契約を交わしたことに

り、JTB 西日本による国際会議トータル支援システムを通常より割安価格で利用できます。

- ①基本システム代金：23 万円 (事前参加登録受付・演題投稿受付・クレジットカード決済等の基本システム設定)
- ②オプション / メイン HP 代金：25 万円 (全体デザイン・ページレイアウト・サーバ管理 12 ヶ月・更新メンテナンス 12 ヶ月)
- ③オプション / オンライン査読システム：8 万円
- ④オプションその他、が利用できます。(メニュー詳細については、一旦、学会を経由した後、JTB 西日本の担当者が説明いたします)

なお、この支援のみを受ける場合も、分子生物学会の支援 (システム利用) を受けたことを当該会議の HP、要旨集などに明記いただきます。

特定非営利活動法人 日本分子生物学会 第20期新理事会準備会議記録

日 時：2016年10月6日(木) 15:00～17:15

場 所：東京国際フォーラム G棟4階「404」

出席者：第19期

荒木弘之（第19期理事長）、深川竜郎（庶務幹事）、本間美和子（庶務幹事）

第20期

阿形清和、稲田利文、上田泰己、木村 宏、胡桃坂仁志、後藤由季子、小林武彦、小原雄治、小安重夫、塩見春彦、杉本亜砂子、中島欽一、中山敬一、鍋島陽一、正井久雄、三浦正幸、水島 昇、山本 卓 第20期理事以上18名

委任状：五十嵐和彦、石川冬木、大隅典子、貝淵弘三、影山龍一郎、菊池 章、菅澤 薫、仲野 徹、西田栄介、深水昭吉、吉田 稔 以上11名

欠席者：白髭克彦（第20期）

事務局：福田 博（記録）、並木孝憲、山口恵子、金子香奈里

本会議成立について：

荒木弘之第19期理事長より挨拶があり、深川竜郎庶務幹事より、本会議の開催の位置付け、成立につき、定款（抜粋）の説明がなされた。第20期理事会任期に入る前の準備会議ではあるが、その取り扱いは理事会に準ずることが確認された。議事進行については慣例に従い、20期理事長被選挙権のない荒木理事長と深川、本間両庶務幹事が担当することとなった。20期理事18名が出席し、委任状11名を受理しており、本会議は細則第4章第8条により成立する旨の報告が行われた。

議事録署名人の選任について：

荒木理事長より、議事録署名人として、稲田利文20期理事と小安重夫20期理事が指名され、承認された。

議 事：

1. 第20期理事長（任期：2017年1月より2年間）の選出

議事に先立ち、荒木理事長より、慣例により19期の理事長・庶務幹事により議事を進めさせて頂き、司会を主として深川庶務幹事に任せるとの発言があった。深川庶務幹事よりフランクな意見交換をするために、本学会に関係する一言、例えば学会事業のどのような業務に関わってきたか、分子生物学会への思いなどを副えて自己紹介をしてはどうかとの提案がなされ、出席者全員より自己紹介がなされた。

次いで、荒木理事長より、第19期理事会から第20期へ申し送られる可能性の高い、次の検討案件につき

説明がなされた。（個々の議案について、正式には年会前日の新旧合同定例理事会にて検討される予定である）

(1) 女性理事枠について

第20期理事選挙では女性理事当選者は3名であった。昨年の定例理事会にて、女性理事枠（細則第2章 役員の選出 第2条に設置されていた時限特別措置）を時限通り中止扱いとしたが、何らかの対応が必要になるかもしれない。

(2) 現在検討中である第19期将来計画委員会からの提言「年会のあり方」、提案「学会のあり方」について

(3) Cold Spring Harbor Asia との連携について（篠原彰19期理事からの提案報告）本件については、後日、19期20期の両理事あてに篠原理事よりメール配信される予定である。

(4) 2018IUBMB Congress 関連報告

荒木理事長からの説明に対し出席者よりいくつかの質問が提出され、特に上記(2)に関係して活発な意見交換が行われた。

自由討論に入り、本学会の気風や理念をどのように考えられておられる方であるか、学会のあり方、若い人へのアピール、等々を考慮して理事長を選出することが重要ではないか等の意見が提出された。事務局より理事長選出に関する細則（第2章第3条）の説明が行われ、再度、意見交換が行われた。

20期理事により投票が行われ、第20期理事長として杉本亜砂子氏が選出された。

2. 第20期副理事長の件

事務局より細則第4条（副理事長の設置）の説明がなされたが、本件については次回の定例理事会（11/29開催予定、19期20期合同理事会）の議題とすることとなった。

上記、第20期新理事会準備会議の議決および確認事項を明確にするため、この議事録を作成し、議事録署名人はここに記名押印する。

2016年10月6日

特定非営利活動法人 日本分子生物学会
第20期新理事会準備会議

議 長 荒 木 弘 之 ㊟

議事録署名人 稲 田 利 文 ㊟

議事録署名人 小 安 重 夫 ㊟

特定非営利活動法人 日本分子生物学会 第19期・第20期 合同理事会記録

日時：2016年11月29日(火) 13:30～18:40

場所：パシフィコ横浜会議センター5階「511+512」

出席者：第19期

荒木弘之(19期理事長)、佐々木裕之(19期副理事長)、一條秀憲(39回年会長兼)、上村 匡(編集幹事兼)、小林武彦[○]、相賀裕美子、塩見春彦[○]、篠原 彰(40回年会長兼)、杉本亜砂子[○](20期理事長)、高橋淑子、林 茂生、深水昭吉[○]、水島 昇[○](会計幹事兼)、山本正幸、渡邊嘉典(広報幹事兼)、花岡文雄(監事)、深川竜郎(庶務幹事)、本間美和子(庶務幹事)、金井正美(広報幹事)

([○]印は20期継続理事)

第20期

石川冬木、稲田利文、菊池 章、後藤由季子、小原雄治、菅澤 薫、中島欽一、中山敬一、鍋島陽一、西田栄介、正井久雄、三浦正幸(19期集会幹事兼)、山本 卓、以上32名

欠席者：第19期

塩見美喜子(19期副理事長)、大隅良典、岡田清孝、貝淵弘三[○]、影山龍一郎[○]、糸 昭苑、小安重夫[○]、斎藤通紀、白髭克彦[○]、眞貝洋一、田畑哲之、長田重一、仲野 徹[○](集会幹事兼)、吉田 稔[○]、吉村昭彦、辻本賀英(監事)、石野史敏(41回年会長)

([○]印は20期継続理事)

第20期

阿形清和、五十嵐和彦、上田泰己、大隅典子、木村 宏、胡桃坂仁志、以上23名

事務局：福田 博(記録)、並木孝憲、山口恵子、金子香奈里

本理事会成立について：

深川竜郎庶務幹事より、理事28名、監事1名、幹事3名が出席し、委任状19名(理事)を受任しており、本理事会は細則第4章第8条により成立する旨報告された。

議事録署名人の選任について：

荒木弘之理事長より、議事録署名人として、菅澤薫理事と林茂生理事が指名され、承認された。

議 事：

1. 報告事項

1) 19期執行部報告(理事長、庶務幹事、広報幹事)

①理事長報告

荒木理事長より以下6点につき報告が行われた。

(i) 熊本地震への学会対応として、ホームページ

に「復興支援ネットワーク掲示板」を設置し、復興支援に関する情報を発信した。理事会MLで検討を行い、熊本大学「熊本地震復興事業基金」へ100万円を寄附した。また、被災された学生会員を対象に、申請に基づき2016年度学会費ならびに39回年会参加登録費を免除した。被災地域から演題投稿をし、採択された学生会員については39回年会会計より旅費支援が行われた(5万円×31名)。

(ii) 夏に実施された第20期の理事選挙において、女性理事の選出が3名であった。昨年の19期第2回理事会にて、女性理事枠(細則:役員を選出第2条における時限特別措置)を撤廃した直後の理事選挙であったが、本案件の取り扱いについては次期の理事会で再検討する必要があるかもしれない。

(iii) 本年6月に将来計画委員会を立ち上げ、種々の検討作業を行った(詳細は審議事項を参照)。

(iv) 上記(iii)とも関係するが、本年5月、生化学会から年会の合同開催依頼があり、執行部を中心として検討を重ねた。

(v) 2019年福岡年会をお世話いただく年会長について慎重に検討を行った(審議事項参照)。

(vi) 18期からの申し送りとなっていた「倫理要綱」が研究倫理委員会において作成された。本日の審議事項の議案として検討したい。

②会員現況

深川庶務幹事より、2016年11月16日現在の会員数につき以下のとおりに報告がなされた。また、参考資料として、ここ9年の学生会員数、学生の年会参加者数、年代別の正会員数・学生会員数の推移資料が配られ、詳細説明が行われた。

名誉会員 1名

正会員 9,041名(海外在住239含む)

シニア会員 50名

次世代教育会員 8名

学生会員 4,180名(海外在住66含む)

賛助会員 25社

合 計 13,305名(前年12月対比、-168)

③生物科学学会連合について

10月8日、東大で開催された生科連定例会議において、次期(2017-2018)生科連代表に

中野明彦氏が再選されたことが、深川庶務幹事（定例会議に出席）より報告された。引き続き、生科連の活動状況につき説明がなされた。

④ホームページについて

金井正美広報幹事より学会 HP の運用状況についての報告が行われた。HP のコンセプト、2013 年 1 月から現在までの月間アクセス統計、2013 年 2 月から運用を開始している Facebook の「いいね！」獲得状況につき説明がなされた。Facebook のファン（利用者）は男性 7 割、女性 3 割の比率となっている。

⑤大隅良典栄誉教授 ノーベル生理学・医学賞受賞報告

現理事でもある大隅良典会員がノーベル賞を受賞されたことは誠に喜ばしいことであり、学会としてはホームページに理事長からの祝意を掲載し、同時に、ノーベル財団、東工大、基生研にリンクを貼り、さらに『Genes to Cells』への大隅研究室からの投稿論文リストを掲載したことが、深川庶務幹事より報告された。

2) 第 39 回 (2016 年) 年会について

一條秀憲第 39 回年会長より、配布資料に基づき準備状況の報告がなされた。一般演題投稿数は Late-breaking を含め 3036 題、そのうち 160 演題は公募シンポジウムに採択された。事前参加登録は 4751 名と順調であったが、一昨年 (37 回横浜) と比べ企業展示が 60 小間減の 384 小間 (NBRP 等含む) となり、予算編成に苦慮した。バイテクセミナーは 18 枠を確保でき、全体運営として順調に準備が進んでいることが報告された。

本年会のもっとも重要なミッションは「基礎研究に徹する」ことの楽しさ、大切さ、素晴らしさを (再) 認識する機会を提供することであり、そのような年会を目指し、組織委員一同、準備に当たってきた。

引き続き、年会企画のプログラム概要につき詳細説明がなされた。明日からの年会運営に際し、理事各位のご協力をお願いしたい。

3) 第 40 回 (2017 年) 年会準備状況

篠原彰第 40 回年会長より 2017 年の合同年次大会の準備状況につき報告がなされた。

○名称：2017 年度生命科学系学会合同年次大会 Consortium of Biological Sciences 2017 (略称：ConBio2017)

○会期：2017 年 12 月 6 日(水)～9 日(土)の 4 日間

○会場：神戸ポートアイランド

○大会長：篠原 彰 (第 40 回日本分子生物学会 年会 年会長)

大野茂男 (第 90 回日本生化学会大会 会頭)

○プログラム委員：主催学会からのプログラム委員に、協賛学会から推薦された委員を加え、プログラム委員会を組織する。

【大会開催コンセプト】

これまで分子生物学会・生化学会の 2 学会で行ってきた合同大会 (BMB) の枠組みを広げ、生命科学分野の広い分野の学会と連携することにより、旧来の学問領域の垣根を越えた研究者間の相互交流の場を提供し、各専門領域のさらなる深化、発展を促す新しい大会の在り方を企図したい。

協賛学会には各学会の特色がわかるようなシンポジウムを 1 つずつ企画してもらう。協賛学会から推薦されたプログラム委員には、分子生物学会、生化学会のプログラム委員と協力して公募ワークショップ企画や一般口頭発表の採択にあたってもらう予定である。また、協賛学会の会員には分子生物学会、生化学会の会員と同じ条件での大会参加登録、演題登録、公募ワークショップ企画提案を認める方向で準備を進めている。

【プログラム案】

①プレナリーレクチャー

フォーラム枠と同じ夕方の枠で開催する予定。

②シンポジウム

分子生物学会、生化学会、FAOBMB、協賛学会、CSHA からの提案企画。約 30 枠を予定。

③ワークショップ

分子生物学会、生化学会、協賛学会の会員からの公募企画。約 100 枠を予定。

④一般演題 (ポスター発表、口頭発表)

ポスター発表は 3 日間のみで開催。一般口頭発表の開催枠は約 50 枠を予定。

⑤フォーラム

分子生物学会、生化学会の総会や授賞式、受賞講演、キャリアパス委員会企画や男女共同参画企画などの学会企画は、原則フォーラム枠(夕方からの時間帯)で行うこととしたい。

⑥高校生研究発表

初の試みとして土曜日に行う予定である。

【その他】

①オンデマンド配信

新しい試みとして、プレナリーレクチャー、指定シンポジウム・公募ワークショップのうち、配信希望のあった企画について、会員参加者のみに限定した「オンデマンド配信」を予定している。会員参加者は講演終了後の一定期間 (例

えば会期翌日から2ヵ月)内であれば、聞き逃した講演をWebで視聴することが可能となる。オーガナイザーにはあらかじめ企画の配信希望有無を確認したい。また、要旨登録の際には個別演題についても配信可否を確認する等の手順を取りたい。未発表データの流出がないようにセキュリティには万全を期したい。

②会計案分比率

ConBio2017の大会会計は、会員数、大会参加者数、演題投稿数等の数値から、分子生物学会65:生化学会35の割合で案分することが決定している。両学会からの出資金(補助金)についてもこの案分比率とし、分子生物学会の開催補助金は500万円、生化学会補助金2,692,308円からの会計スタートとなる。

③バーコードシステム

協賛企業への参加者情報のフィードバックのため、参加章へのバーコード印字を予定している(出展ブースに設置する読取用機器の費用は出展料に含める予定)。企業へのアピール、次回年会のための分析に繋がることを期待している。

篠原年会長による詳細説明の後、出席理事よりオンデマンド配信、バーコードシステムに関していくつかの質問、要望が出された。大会組織(両学会)による企画シンポジウムと協賛学会枠のシンポジウムのテーマ調整などについても質問が出され、それについては過去の分類別発表演題数データ等を見ながら、両大会長にてバランスを見ていきたいとの説明がなされた。また、小林武彦キャリアパス委員長からは、近年の開催実績、アンケート結果で高評価を得ている点等を踏まえ、同委員会企画のセミナーを例年どおりにランチョンの時間帯で開催できるよう考慮してもらえないかとの要望が出された。

その他、出席理事より提出された要望等に関して、引き続き両大会長に検討してもらおうこととなった。

4) 第41回(2018年)年会準備状況

金井正美組織委員(石野史敏第41回年会長代理)より2018年の年会開催概要につき報告がなされた。第41回年会は、次世代が研究を目指すきっかけとなるような年会の開催を念頭に、サイエンスに特化し、特に学生にとって魅力的なプログラムとなるよう鋭意企画準備中である。

○会期:2018年11月28日(水)~11月30日(金)

○会場:パシフィコ横浜

○組織委員:

年会長 石野 史敏(医科歯科大・難治研
エピジェネティクス分野)

組織委員長 澁谷 浩司(医科歯科大・難治研
分子細胞生物学分野)

プログラム委員長 仁科 博史(医科歯科大・難治研
発生再生生物学分野)

組織委員 井関 祥子(医科歯科大大学院分
子発生学分野)

金井 正美(医科歯科大・実験動
物センター)

IT担当委員 幸田 尚(医科歯科大・難治研
エピジェネティクス分野)

(*今後、産業界から組織委員1名が参画する予定)

5) 理事選挙結果報告

深川庶務幹事より第20期理事選挙結果の報告がなされた。2016年10月6日に東京で開催された第20期新理事会準備会議において、杉本亜砂子氏が第20期理事長に選出された。

6) 上村匡編集幹事より、配布資料に基づき、学会誌『Genes to Cells』の編集報告が行われた。

①従来からの「Original Article」に加え、重要な発見をすばやく出版することを目的とした短めのフォーマットである「Brief Report」(スペースを含み20,000字・図表3点以内)が順調に投稿を増やしている。

②為替レートの影響を大きく受けたことなどにより、本誌の収支は、本年は、かろうじて黒字を確保した状況である。

③Associate Editorの大隅良典荣誉教授がノーベル生理学・医学賞を受賞された。大隅研究室からの本誌投稿論文を学会ホームページに掲載した。

④伝統絵画のなかに生命科学の遊び心を加えた本誌の表紙デザインは、丸6年となる今日でも高い評価を得ている。表紙ができるまでの裏話を盛り込んだタペストリーを第39回年会展示会場にて展示するので、ご覧いただきたい。また、表紙デザインに関するアイデアがあれば、ぜひ編集室または編集幹事までお寄せいただきたい。

7) 各種学術賞、研究助成候補への学会推薦状況について

①相賀裕美子賞推薦委員長より、2016年に本学会より推薦した各種学術賞候補者について報告がなされた。引き続き、塩見春彦研究助成選考委員長より、2016年の研究助成推薦状況と結果等について報告が行われた。

②研究助成選考委員会内規について

塩見研究助成選考委員長より、各種財団の研究助成への学会推薦（審査）に際し、従来は特に定まった本委員会独自の規定がなかったので、19期研究助成選考委員会にて内規案を作成したことが報告された。内規案が配付され、提案資料の通り制定された。

「各種研究助成の学会推薦（審査）手続きに関する、研究助成選考委員会内規」

（2016年11月29日 第19期・第20期合同理事会にて制定）

【推薦審査の手順】

1. 学会への推薦依頼の応募締め切り（財団等の締め切りの1ヶ月前）後、ただちに委員長は委員に応募書類の写しを郵送し審査依頼を行う。応募書類の写し等は選考委員の責任で審査後廃棄する。
2. 委員は、応募書類を審査し、推薦可能な候補者と推薦すべきでない候補者を決定する。推薦可能な候補者については順位をつける。いずれも簡単な理由とともに委員長に期日（おおむね財団等の締め切りの10日前）までにメールで報告する。
3. 委員長も原則として審査に加わるものとする。
4. 委員長は審査集計結果に基づき、推薦可能件数内で委員の評価が高い者を上位から推薦する。このとき、一人の委員からでも推薦すべきでないと評価された候補者は、原則として推薦しない。

【利害関係者の審査対応】

1. 委員長および委員本人、および所属研究室メンバーからの応募に関しては、当該委員はその候補者の審査に加わらない。採点集計時には平均点（審査合計点を審査員の数で割る）の順位で審査することにし、公平性を保つ措置を講ずることとする。
2. 委員長および委員の共同研究者、親族、過去の研究室メンバー、および利害関係者と見なされる研究者からの応募には、当該委員はその旨を申し出た上で採点を行う。採点集計に当該委員の採点を加えるか否かの判断は委員長が行う。
3. 委員より利害関係者であるか否かの判断が困難であるとの申し出が提出されたときは、委員長が個別に判断する。

【重複申請についての取り扱い】

1. 外部財団等の研究助成の推薦に際して、年度内の複数の応募を妨げない。

8) キャリアパス委員会報告

- ①小林武彦キャリアパス委員長より、配付資料に基づき、2016年の本委員会活動についての詳細説明がなされた。39回年会においてキャリアパス委員会主催の2つのランチョンセミナー

を開催するので、理事各位においては積極的に参加いただきたい。配付された資料は次のとおりであった。

- ・キャリアパス委員会の活動
- ・2016年第39回年会発表者の属性調査
- ・「女子中高生夏の学校2016～科学・技術・人との出会い～」参加報告
- ・ランチョンセミナー2016「卓越研究員制度の活かし方」ポスターちらし
- ・ランチョンセミナー2016「これでいいのか大学院教育！」ポスターちらし
- ・「卓越研究員制度」に関するアンケート結果（セミナー事前アンケート）
- ・「大学院教育」に関するアンケート結果

②今年度から始まった卓越研究員制度につき、小林キャリアパス委員長より詳細説明がなされ、種々の意見交換が行われた。

9) 研究倫理委員会報告

白髭克彦研究倫理委員長が欠席のため、荒木理事長より以下の報告が行われた。

①一部で新聞報道もなされていたが、本年8月17日、学会あてに匿名による論文疑義の告発状（東大医学部の研究室を中心とした論文に見られる問題点について）が送られてきた。東大広報室からプレスリリースがなされているが、8月末の告発状第2弾については、本学会は受理していない。執行部ではすみやかに情報収集を行い、その後9月に研究倫理委員全員と理事長出席のもと、研究倫理委員会を開催し、その対応につき検討を行った。その時点で、すでに東京大学より本調査を開始すること（予備調査を行った結果）が発表されていたため、学会としては本個別案件には対応せず、状況を注視することとした旨報告された。

②上記論文問題とは別に、研究倫理委員会では委員会企画の研究倫理フォーラムの開催準備を進めた。今回は統計の専門家を招き、基礎研究者向けの統計学の講演をしてもらうこととなった。年会会期2日日夜のフォーラム枠にて開催するので、理事会関係者においてもぜひ参加いただきたい。

○研究倫理委員会企画・研究フォーラム「生物学実験に使う統計学」

- ・日時：2016年12月1日(木) 18:15～18:45
- ・場所：第10会場（パシフィコ横浜会議センター 411+412）（軽食を配付）
- ・講演：新谷 歩（大阪市大・医・医療統計学教授）

* 新谷氏の主な専門はICUにおけるせん妄研究、糖尿病、リウマチ、癌、感染症、腎臓病など多分野にわたる臨床データの統計解析である。

- ③日本分子生物学会 倫理要綱(案)について
19期研究倫理委員会において、18期からの申し送りでもあった「倫理要綱」(案)を作成したことが報告された。荒木理事長より倫理要綱(案)が読み上げられ、その後、意見交換に入った。活発な討議が行われたが、本会合では時間的制約もあるので、年会終了後にあらためて、倫理要綱案(電子データ)を理事会MLに配信し、再度意見を求めた後に、可能であれば1月にHP(会報2月号)で発表できるように、作業を進めることとなった。
- 10) 富澤基金・基金運営委員会報告
山本正幸基金運営委員長より、富澤基金による第6回(2016年)日本分子生物学会 若手研究助成結果につき報告がなされた。
(i) 第6回応募の受付期間: 2016年1月13日~2月10日
(ii) 応募総数: 115名(男性96名、女性19名 ※性別は名前からの推定による)
(iii) 選考:
・第1次審査: 書類審査
・第2次審査: 5月14日、11名のヒアリングを実施
(対象者は12名であったが1名辞退)
(iv) 審査経過と第6回助成対象者:
審査経過詳細については、会報114号(2016年6月号)に結果報告を掲載済みであるので参照されたい。第6回若手研究助成の助成対象者は以下の6氏である。
- 大谷美沙都(奈良先端科学技術大学院大学)
植物のロバストな細胞形質発現を支えるRNAを介した環境応答システムの解明
Environmental response system mediated by RNA for robust expression of cell function in plants
- 大畑樹也(浜松医科大学)
転写にともなう条件的ヘテロクロマチン形成機構の解明
Understanding the mechanism of facultative heterochromatin formation mediated by transcription
- 尾崎省吾(Focal area of Infection Biology, Biozentrum, University of Basel)
バクテリア細胞周期を駆動する遺伝子群が織り

なすネットワーク

Uncovering genetic interactions driving the bacterial cell cycle.

- 倉石貴透(金沢大学医薬保健研究域薬学系)
ショウジョウバエモデルを用いた無菌的な自然免疫活性化機構の解明

Sterile activation of innate immune signaling in Drosophila larvae

- 島田裕子(筑波大学生命領域学際研究センター)
栄養と発育をつなぐ神経内分泌機構の研究
Nutrient-dependent regulation of neuroendocrine system in the developmental transition

- 榎本悟史(東北大学大学院生命科学研究科)
オーキシン排出担体PINの極性局在を制御する細胞膜ドメイン形成機構の解析

Studies on molecular mechanisms of microdomain formation at plasma membranes that govern polar localization of auxin efflux carrier PIN proteins

- 11) 第5回(2017年)国際会議支援選考結果報告
篠原彰国際会議支援選考委員長より、第5回目となる国際会議支援については、3件の応募があり、選考委員会における慎重な審査を経て、理事長承認のもと、以下の3会議(計500万円)が採択されたことが報告された。

《会議名称》

(和文) SMCタンパク質: 分子から疾患まで

(英文) SMC proteins: from molecules to diseases

開催責任者: 平野 達也(理化学研究所・主任研究員)

会 期: 2017年6月13日(火)~16日(金)

会 場: 南陽市文化会館(山形県南陽市)

助成金額: 200万円

《会議名称》

(和文) 第3回国際昆虫ホルモンワークショップ:
伝統的研究から高次生命現象理解と応用科学展開への挑戦

(英文) The 3rd International Insect Hormone Workshop: From traditions to new challenges for understanding higher biological systems and expanding applied sciences

開催責任者: 丹羽 隆介(筑波大学大学院生命環境科学研究科・准教授)

会 期: 2017年7月9日(日)~14日(金)

会 場: ホテルエビナール那須(栃木県)

助成金額: 200万円

《会議名称》

(和文) 第4回アジア太平洋地域ショウジョウバエ研究会

(英文) 4th Asia-Pacific Drosophila Research Conference

開催責任者：松野 健治（大阪大学大学院理学研究科・教授）

会 期：2017年5月8日(月)～11日(木)

会 場：大阪大学コンベンションセンター

助成金額：100万円

続いて、篠原委員長より過去に採択された会議の一覧資料（個々の助成金額が会議開催予算に対しどのような比率となっているか等）が配られ、さらに本支援事業の立上げの経緯、事業の位置付け、今後の方向性等について補足説明がなされた。意見交換の後、本事業の継続が確認され、ただし学会全体予算との兼ね合いもあり、次回募集（会報2017年2月号）では援助金額は1件あたり100～250万円、年間2件程度とすることとなった。

次期国際会議支援選考委員会の委員長就任予定者である石川冬木理事より、本事業の理念につき質問が出され、本事業立上げ時の理事長であった小原雄治理事より補足説明がなされた。石川理事より来期の審査・選考に際し、次期の委員会の中で理念の確認を行い、杉本亜砂子20期理事長へ報告したいとの方針が示された。

12) 生命科学教育について

篠原生命科学教育担当理事より高校などへの講師派遣の状況（2013年6月から現在までの実績）、および年会における高校生発表の状況（過去4回の実績と第39回年会の発表予定）について報告がなされた。

生命科学教育事業については、夏に開催されている『SSH生徒研究発表会』に学会ブースを出展し、高校生や引率の先生に本学会の活動内容を紹介している。また、本年は学会HPの『生命科学教育』ページのデザインを見やすいようにリニューアルしたことが報告された。

13) 2018 IUBMB Congress について（日本学術会議 IUBMB 分科会からの依頼に関係して）

①一條秀憲理事（学術会議 IUBMB 分科会委員長）より、IUBMB と日本学術会議、生化学会との関係、今回の案件（検討依頼）に関する背景についての説明がなされた。

・ IUBMB について

International Union of Biochemistry and Molecular Biology 1955年設立、77カ国、生化学・分子生物学の教育研究の世界的促進を

目的としている。

・3年に1回 IUBMB congress がほぼアメリカ大陸、ヨーロッパ、アジアオセアニアの順で開催される。

・第20回は2006年に日本で開催（IUBMB2006 京都 / 本庶会長）、第23回2015年はブラジル開催、次回の第24回 IUBMB congress が2018年、韓国で開催される。

・日本はこれまでは生化学会が窓口となって加盟してきた。

・年間約160万円の加盟料は日本学術会議からの支出。学術会議・基礎医学委員会のもとに IUBMB 分科会が属している（委員会構成は、一條秀憲（委員長）、菊地章、中野明彦、山本雅之の4氏）

② 今回の IUBMB 分科会 / 生化学会からの依頼事項

11月下旬、IUBMB 2018（韓国）オーガナイザーの Oh 教授から菊池章理事（IUBMB 分科会幹事）へ日本の BMB 宛てにシンポジウムの企画依頼が入った。生化学会（先方は分子生物学会も含めての意味と考えられている可能性が高い）から1つか2つのシンポジウムセッションを IUBMB2018 で設けないかという依頼である。生化学会では、理事会の議論として、分子生物学会と生化学会が合同でシンポジウムを2つほど企画するのが望ましいという結論に至っているとのことである。同内容は、過日、水島昇生化学会会長（分子生物学会理事）から荒木理事長、杉本次期理事長への正式検討依頼案件となっている。

以上の経緯を確認した後、自由討論に入り、種々の意見交換がなされた。出席理事より、従来、学術会議では IUBMB の対応組織は生化学会と考えてきたこと、分担金（加盟料）の変更についてはかなりの努力を要するのではないかと意見が提出された。

討議の結果、杉本亜砂子次期理事長より、これまで分子生物学会としては IUBMB と直接の接点を持っていなかったこともあるので、本案件については、広く本学会の『国際対応』（IUBMB2018、CSHA、FAOBMB 等）の検討課題の1つに含み、次期理事会で慎重に検討していきたいとの説明がなされ、継続審議扱いとなった。

14) その他

深川庶務幹事より、第39回通常総会の議事進行と報告担当者の確認、さらに第6回富澤基金贈呈式の式次第の確認がなされた。

2. 審議事項

1) 平成 28 年度 (2016 年度) 決算承認の件

水鳥昇会計幹事より平成 28 年度活動計算書の収支について詳細説明がなされた。前年度より所管庁である東京都からの指導があり NPO 法人会計基準に基づいた計算書となっている。28 年度会計は約 681 万円の赤字決算となった。赤字となった大きな要因は 2 つあり、1 点は『Genes to Cells』の出版社からの総利益折半の精算が減額となったこと (精算時の為替レートの影響も大)、もう 1 点は、昨年の BMB2015 (38 回年会) の決算が最終的な学会本部での税金支払い等を考慮すると実質赤字であったことがあげられる。会費収入については前年に比べ、学生会員の納入率がやや下回っており、また会員数そのものもやや減少傾向にある。続いて、経常費用の事業費の内訳別収支の説明がなされた。さらに「日本分子生物学会 若手研究助成 富澤純一・桂子基金」の決算について報告が行われた。

本決算においては、消費税約 113 万円を納めており、その他の税務処理についても顧問契約を交わしている税務専門家の指示のもと、収益事業部分の法人確定申告を行ったことが報告された。

本決算は、10 月 27 日に宮城秀敏公認会計士の監査を受け、さらに同年 11 月 7 日に花岡文雄監事、11 月 9 日に辻本賀英監事による会計監査を受け、配付資料のとおり監査報告書が提示されている旨報告がなされた。

続いて、花岡監事より 11 月 7 日に学会事務所において会計監査を実施し、監査報告書に記載したとおり、帳簿ならびに会計証憑類は正確に整えられており、同決算を認めたことが報告された。

審議の結果、本決算は理事会で承認され、第 39 回通常総会に諮られることとなった。

2) 平成 29 年度 (2017 年度) 活動予算承認の件

水鳥会計幹事より、平成 29 年度活動予算書と同活動予算・事業費の内訳について説明が行われた。

前年決算の実績をふまえて各科目を微調整している。年会会計が通常の単独開催会計に戻ったので、前年 BMB2015 案分収支よりも予算規模が大きくなっているが、学会全体予算としては引き続き厳しい状況にある。本学会は年会運営と学会誌の出版収入で黒字を捻出できないと他の事業費の予算編成に苦慮するバランスとなっている。最終的に、来年度は法人として 313 万円の赤字予算を編成したことが説明された。

審議の結果、同予算書は理事会で承認され、第

39 回通常総会に諮られることとなった。

3) 第 42 回 (2019 年) 年会長について

荒木理事長より、第 42 回年会については、年会長を九州大学生体防御医学研究所 佐々木裕之会員に依頼したいことが諮られ、承認された。

続いて、佐々木裕之副理事長より鋭意準備にあたりたいとの挨拶がなされた。2019 年は 7 年ぶりの福岡での開催となる。理事会関係者のご協力をお願いしたい。

4) 第 20 期理事会の体制、各幹事、各種委員会委員長・委員の委嘱について

杉本第 20 期理事長より、役員・幹事・各委員会名簿 (案) が配付され、調整中であるキャリアパス委員会構成を除いて、原案どおりに承認された。20 期のキャリアパス委員会は 12 月中には決定できる予定である。将来計画委員会についても、今後しかるべき時期までに立ち上げていく予定であることが報告された。

《次の審議事項 5. 6. については、19 期の理事長、庶務幹事を除き、19 期理事は退席し、20 期新理事のみの審議となった》

5) 第 20 期監事の選任

杉本第 20 期理事長から、第 20 期の監事として岡田清孝会員、近藤寿人会員が推薦され、承認された。監事については第 39 回通常総会で承認を得た後、正式選任となる。

6) 第 20 期副理事長の選任

深川庶務幹事より副理事長選出に関する細則の説明がなされ、その後、第 20 期出席理事により投票が行われ、副理事長として、小林武彦氏と小安重夫氏が選任された。

杉本 20 期理事長より、小安重夫副理事長については、副理事長として次期執行部に入っていたいただきたいとの説明があり、了承された

7) 第 19 期将来計画委員会からの提言・提案等について

本年 6 月、第 19 期の将来計画委員会が設置され (委員会構成: 小林武彦理事 (委員長)、一條秀憲理事、塩見美喜子副理事長、杉本亜砂子理事、水鳥昇理事、渡邊嘉典理事の 6 名、会合には理事長、執行部メンバーも陪席)、8 月 6 日に第 1 回将来計画委員会を開催した。その後メール会議にて検討作業を進め、8 月末に第 19 期将来計画委員会からの提言書 (案) 『【提言】 年会のあり方について 【提案】 学会のあり方について』がまとめられた。同提言書を 19 期理事会 ML に配信し意見を求めたが、返信は 1 名のみであった。その後、同提言資料は、新理事会準備会議 (10 月 6 日開催)

でも配られ、活発な議論がなされたことが荒木理事長より報告された。新理事会準備会議では種々の意見・指摘が提出され、本日、一部修正された提言書の再配付となった。

続いて、小林委員長より【提言】【提案】の各条文の詳細について説明がなされ、さらに年会のあり方の下記2条文については、深川庶務幹事より補足説明がなされた。

-
- ・これまで日本分子生物学会は年会運営を年会長に一任していたが、開催形式等の重要事項の決定に関しては理事会と連携して決定していく旨、提案したい。
 - ・円滑な年会運営のため、年会長は年会開催の4年前を目安に決定されることが望ましい。他学会との合同開催等を含め、今後の年会運営のあり方については、継続的な審議を行うことを提案したい。

年会のあり方、学会のあり方、ともに多種多様な意見が活発に提出されたが、理事会として全体的な方向性を示すといった結論には至らず、本案件の検討は次期理事会へ申し送られることとなった。

8) Cold Spring Harbor Asia との連携・対応について
本件について10月～11月と理事会MLにてメール審議されてきたが、多様な意見があり、篠原理事より現在、CSHA への積極的交渉は保留にしていることが報告された。現段階では、全体意見を集約できる状況ではないことがあらためて確認された。

9) 第19期から第20期への申し送り（全般）について

出席者による自由討論の後、杉本次期理事長より、現在、重要な問題が山積しており、20期理事の方々にはぜひ様々な場面で協力をいただきたいとの要請がなされた。検討すべき課題が多いので、来期は必要に応じて将来計画委員会に複数のワーキンググループを設置したらどうかと考えている。

案件は大きく分けて以下の3点を想定している。

- ①学会のあり方(他学会との関係をどうすべきか)
- ②国際対応 (IUBMB2018、CSHA、FAOBMB その他)
- ③社会的責任 (論文不正問題対応を含む)

10) その他

- ・出席理事より研究倫理問題への学会対応に関して積極的に関与すべきとの意見が提出された。

- ・杉本次期理事長より、20期理事における理事就任回数を調べてみた結果と、それについてのコメントが出された。女性理事枠の再検討とも関係するが、特に女性理事においては、あまりに同じ方ばかりが選出されている(同じ人に仕事が割り振られている傾向がある)。
- ・出席理事より「日本の科学を考えるガチ議論(通称：ガチ議論サイト)」があたかも分子生物学会が直接、管理・運用するサイトであるかのような疑念を抱かせるとの意見が提出され、討議の結果、広報幹事および事務局にて事実関係を確認することとなった(*年会終了後、金井広報幹事が同サイト運営者に連絡を取り、同サイトに本学会と連携していない旨が明記されており、また本学会に直接リンクしている箇所も無いことが確認された)。
- ・荒木理事長より退任の挨拶がなされた。

上記、第19期・第20期合同理事会の議決および確認事項を明確にするため、この議事録を作成し、議事録署名人はここに記名押印する。

2016年11月29日

特定非営利活動法人 日本分子生物学会
第19期・第20期合同理事会
議長 荒木 弘之 ㊟
議事録署名人 菅 澤 薫 ㊟
議事録署名人 林 茂 生 ㊟

特定非営利活動法人 日本分子生物学会 平成 29 年度 (第 39 回) 通常総会記録

日 時：平成 28 年 12 月 2 日(金) 11:30 ~ 12:05

場 所：ポスター・展示会場内

特設会場 (パシフィコ横浜 展示ホール)

社員数 (正会員+名誉会員+シニア会員+次世代教育会員):
9,100 名

出席者数: 4,764 名(本人出席 85 名、表決委任者 4,679 名)

議事内容:

1. 定款第 25 条に基づき、荒木弘之理事長より本総会議長として三浦正幸会員が指名された。さらに定款第 29 条に基づき、議事録署名は、一條秀憲会員(第 39 回年会会長兼)と荒木理事長が担当することが確認された。

2. 三浦議長より、定款第 26 条(総会の定足数)に基づき、上記表決委任者(委任状)を含めて出席 4,764 名となり、本総会は成立する旨報告された。

3. 経過報告(事業報告)

1) 理事長報告

荒木理事長より、総会資料(2 頁:2016 年度事業報告)に基づき、事業活動全般と、さらに下記 5 点について報告が行われた。

①熊本地震への学会対応として、熊本大学「熊本地震復興事業基金」へ 100 万円を寄附した。また、ホームページに「復興支援ネットワーク掲示板」を設置し、復興支援に関する情報を発信した。

②夏に実施された第 20 期の理事選挙は、女性理事枠(細則:役員を選出 第 2 条における時限特別措置)を撤廃した直後の理事選挙であったが、女性理事の選出は 3 名であった。本案件については今後また何らかの働きかけを検討する必要があるかもしれない。

③日本生化学会から年会の合同開催依頼があったことへの対応なども含め、執行部と将来計画委員会で種々の検討作業を行った。理事会でも、年会運営における年会組織と理事会との関係や今後の年会や学会のあり方について議論されたが、結論には至っていない。本件については次期理事会への申し送りとしたい。

④研究倫理委員会で作成した「倫理要綱」(案)を理事会で検討した。内容が固まり次第、学会ホームページで公告する予定である。

⑤ 11 月 29 日に開催された第 19 期・第 20 期合同理事会において、福岡で開催予定の第 42 回(2019 年)年会については、佐々木裕之会員(九州大学・生体防御医学研究所)に年会長をお願い

することが決定した。

2) 庶務報告

深川竜郎庶務幹事より以下の報告が行われた。

①会員現況:〔2016 年 11 月 16 日現在〕名誉会員 1 名、正会員 9,041 名、シニア会員 50 名、次世代教育会員 8 名、学生会員 4,180 名、賛助会員 25 団体、総計 13,305 名(前年 11 月対比、-168)

②第 20 期理事選挙:選挙管理委員会のもとで 2016 年 6 月~7 月の間で会員による投票が行われ、第 20 期理事が選出された。10 月には新理事会準備会議が開かれ、杉本亜砂子氏が第 20 期理事長に選出された。

③学会ホームページへはコンスタントにアクセスを得ている。Facebook の「いいね!」は 1,400 を獲得しており、ファン(利用者)は男性 7 割、女性 3 割の比率となっている。

④生命科学教育事業について

・会員のボランティアによる人材データベースを作成しているが、本年も講師派遣を希望する高校等とのマッチングを行い、出前授業を実施した。

・本日午後、高校生発表会(ポスター発表・口頭発表)があるので、ぜひ会員の方にも参加いただきたい。

3) 編集報告

上村匡編集幹事より『Genes to Cells』について以下の報告が行われた。

①従来の「Original Article」に加え、重要な発見を迅速に出版することを目的とした短めのフォーマットである「Brief Report」が順調に投稿を増やしている。

②為替レートの影響を大きく受けたことなどにより、本誌の収支は、本年は、かろうじて黒字を確保した状況である。

③伝統絵画のなかに生命科学の遊び心を加えた本誌の表紙デザインは、丸 6 年となる今日でも高い評価を得ている。表紙ができるまでの裏話を盛り込んだタペストリーを本年会展示会場にて展示しているので、ご覧いただきたい。また、表紙デザインに関するアイデアがあれば、ぜひ編集室または編集幹事までお寄せいただきたい。

4. 議事

1) 平成 28 年度(2016 年度)決算承認の件

水島昇会計幹事より総会資料(3~16 頁)に

基づき、平成 28 年度活動計算書の収支について詳細報告が行われた。

2016 年 10 月 27 日、公認会計士宮城秀敏氏の会計監査を受け（総会資料の独立監査人の監査報告書を参照）、同年 11 月 7 日に花岡文雄監事、11 月 9 日に辻本賀英監事の監査を受けた。

審議の結果、本決算は異議なく承認された。

- 2) 平成 29 年度（2017 年度）活動予算書承認の件
水島会計幹事より総会資料（17～19 頁）に基づき、平成 29 年度活動予算書について説明が行われた。

審議の結果、同活動予算書は異議なく承認された。

- 3) 第 20 期監事選任の件

定款第 14 条に基づき、荒木理事長より第 20 期監事として岡田清孝会員、近藤寿人会員が推薦され、承認（選任確認）された。

5. 第 39 回（2016 年）年会長挨拶

一條秀憲第 39 回年会長より挨拶があり、年会開催状況についての報告が行われた。本年会は「基礎研究に徹する」ことの楽しさ、大切さ、素晴らしさを（再）認識する機会を提供することを目指し、準備に当たってきた。幸いにも天候にも恵まれ、盛況となっている。参加者や運営側の組織委員、プログラム委員、スタッフなどへの謝辞が述べられた。

6. 第 40 回（2017 年）年会長挨拶

篠原彰第 40 回年会長に代わり、深川庶務幹事より 2017 年の年会開催企画案について報告が行われた。

・名称：2017 年度生命科学系学会合同年次大会

Consortium of Biological Sciences 2017
(略称：ConBio2017)

・会期：2017 年 12 月 6 日(水)～9 日(土)

・会場：神戸ポートアイランド

これまで分子生物学会・生化学会の 2 学会で行ってきた合同大会（BMB）の枠組みを広げ生命科学分野の広い分野の学会と連携することによる、コンソーシアム形式の大会を目指したい。

新しい試みとして、プレナリーレクチャー、指定シンポジウム・公募ワークショップのうち、配信希望のあった企画について、会員参加者のみに限定した「オンデマンド配信」を予定している。また、協賛企業への参加者情報のフィードバックのため、参加章へバーコードを印字し、企業の出展ブースに読取用機器を設置する「バーコードシステム」を導入したい。

7. 第 41 回（2018 年）年会長挨拶

石野史敏第 41 回年会長に代わり、深川庶務幹事より 2018 年の年会開催概要について報告された。

・会期：2018 年 11 月 28 日(水)～30 日(金)

・会場：パシフィコ横浜

次世代が研究を目指すきっかけとなるような年会の開催を念頭に、サイエンスに特化し、特に学生にとって魅力的なプログラムとなるよう鋭意企画準備中である。

8. 杉本亜砂子第 20 期理事長より挨拶がなされた。

生命科学の基礎研究は厳しい環境にあるが、本学会会員でもある大隅良典栄誉教授のノーベル生理学・医学賞の受賞という喜ばしいニュースがあり、また基礎研究の徹底を目指す今年の年会も活気があって、将来はまだまだ明るいという思いになる。本学会の活性化に努めたい。

9. 三浦議長より閉会の挨拶があり、第 39 回総会が終了した。

上記、平成 29 年度通常総会の議決および確認事項を明確にするため、この議事録を作成し、議事録署名人はここに記名押印する。

平成 28 年 12 月 2 日

特定非営利活動法人日本分子生物学会
平成 29 年度通常総会

議長 三浦正幸 ㊟
議事録署名人 荒木弘之 ㊟
議事録署名人 一條秀憲 ㊟

平成 28 年度 (2016 年度) 決算報告

平成 28 年度 (2016 年度) 活動計算書

平成 27 年 10 月 1 日から平成 28 年 9 月 30 日まで

特定非営利活動法人 日本分子生物学会

科 目	金 額	
I 経常収益		
1 受取入金		
正会員受取入金	494,000	
学生会員受取入金	1,166,000	
次世代教育会員入金	1,000	1,661,000
2 受取会費		
正会員受取会費	53,862,500	
学生会員受取会費	8,669,500	
賛助会員受取会費	1,200,000	
シニア会員受取会費	141,000	
次世代教育会員会費	39,000	63,912,000
3 受取寄付金	8,400,000	8,400,000
4 受取助成金	1,200,000	1,200,000
5 事業収入		
(1)学術集会、研究発表会、講演会の開催等による分子生物学に関する学術研究事業	157,399,068	
(2)分子生物学に関する機関誌及び論文図書等の発行事業	10,166,091	
(3)その他目的を達成するために必要な事業	0	167,565,159
6 その他収益		
受取利息	22,655	
雑収入	121,000	143,655
経常収益計		242,881,814
II 経常費用		
1 事業費		
(1)人件費		
給与手当	11,040,391	
法定福利費	1,679,354	
福利厚生費	24,463	
人件費計	12,744,208	
(2)その他経費		
業務委託費	90,927,127	
編集業務費	4,498,471	
印刷費	16,708,726	
通信運搬費	8,014,912	
旅費交通費	12,869,991	
会議費	2,729,512	
支払手数料	1,249,569	
消耗品費	2,048,203	
会場費	35,820,959	
機材費	16,229,808	
諸会費	70,000	
広報費	3,024	
補助金	5,000,000	
雑費	775,907	
その他経費計	196,946,209	
事業費計		209,690,417
2 管理費		
(1)人件費		
給与手当	16,199,804	
法定福利費	2,456,995	
福利厚生費	35,797	
人件費計	18,692,596	
(2)その他経費		
事務所家賃	3,791,683	
業務委託費	1,427,760	
会員管理システム運用管理費	2,829,902	
印刷費	1,666,548	
通信運搬費	3,611,244	
旅費交通費	1,581,084	
会議費	231,337	
支払手数料	1,375,840	
消耗品費	477,534	
雑費	509,366	
租税公課	1,209,900	
寄付金支出	1,000,000	
特定預金支出 (退職給付引当金)	1,600,200	
その他経費計	21,312,398	
管理費計		40,004,994
経常費用計		249,695,411
当期正味財産増加額		△ 6,813,597
前期繰越正味財産額		199,448,175
次期繰越正味財産額		192,634,578

(単位：円)

平成 28 年度（2016 年度）貸借対照表

平成 28 年 9 月 30 日現在

特定非営利活動法人 日本分子生物学会

科 目	金 額		
I 資産の部			
1 流動資産			
現金預金	252,502,025		
前払費用	4,746,044		
立替金	8,083,195		
流動資産合計		265,331,264	
2 固定資産			
工具器具備品	1		
敷金	1,802,000		
固定資産合計		1,802,001	
資産合計			267,133,265
II 負債の部			
1 流動負債			
未払金	108,913		
未払法人税等	70,000		
未払消費税	73,000		
前受会費	575,500		
前受金	1,000,000		
預り金	62,451,274		
流動負債合計		64,278,687	
2 固定負債			
退職給付引当金	10,220,000		
固定負債合計		10,220,000	
負債合計			74,498,687
III 正味財産の部			
前期繰越正味財産		199,448,175	
当期正味財産増加額		△ 6,813,597	
正味財産合計			192,634,578
負債及び正味財産合計			267,133,265

(単位：円)

平成 28 年度 (2016 年度) 財産目録

平成 28 年 9 月 30 日現在

特定非営利活動法人 日本分子生物学会

科 目	金 額	金 額
I 資産の部		
1 流動資産		
現金預金		
現金	28,421	
郵便振替 00110-1-901302	39,009,424	
普通預金 三菱東京 UFJ 銀行 春日町支店	1,637,058	
普通預金 三菱東京 UFJ 銀行 所沢支店	2,271,501	
普通預金 三菱 UFJ 信託銀行 上野支店	223,965	
普通預金 三井住友銀行 飯田橋支店	51,639,920	
普通預金 三井住友信託銀行 芝営業部	342,274	
普通預金 静岡銀行 東京営業部	1,135,368	
定期預金 三菱東京 UFJ 銀行 春日町支店	10,114,755	
定期預金 みずほ銀行 本郷支店	10,099,339	
定期預金 三井住友銀行 飯田橋支店	30,000,000	
定期預金 三菱 UFJ 信託銀行 上野支店	10,000,000	
定期預金 三井住友信託銀行 芝営業部	36,000,000	
定期預金 静岡銀行 東京営業部	60,000,000	
前払費用 事務所家賃 10 月分	313,086	
前払費用 事務所火災保険 H28.10 - H30.8	23,958	
前払費用 2016 年分 Genes to Cells オンライン費用	4,350,000	
前払費用 新理事会準備会議会場費	40,000	
前払費用 男女共同参画シンポジウム参加費用	19,000	
立替金 編集経費 (2016 年 1 月分以降)	8,083,195	
流動資産合計		265,331,264
2 固定資産		
工具器具備品 電話取付一式	1	
敷金 学会事務所・編集室	1,802,000	
固定資産合計		1,802,001
資産合計		267,133,265
II 負債の部		
1 流動負債		
未払金 通信運搬費 (宅急便代、NTT、メールサーバ)	34,119	
未払金 印刷費 (コピー・FAX 代)	35,931	
未払金 支払手数料 (クレジットカード決済処理)	28,279	
未払金 雑費 (外部倉庫)	10,584	
未払法人税等	70,000	
未払消費税	73,000	
前受会費 平成 28 年度以降会費	575,500	
前受金 GTC 編集費・出版社補助金	1,000,000	
預り金 富澤基金	61,135,368	
預り金 源泉所得税他	1,315,906	
流動負債合計		64,278,687
2 固定負債		
退職給付引当金	10,220,000	
固定負債合計		10,220,000
負債合計		74,498,687
III 正味財産の部		
前期繰越正味財産	199,448,175	
当期正味財産増加額	△ 6,813,597	
正味財産合計		192,634,578
負債及び正味財産合計		267,133,265

(単位：円)

「日本分子生物学会 若手研究助成 富澤純一・桂子基金」

平成 28 年度（2016 年度）会計報告

特定非営利活動法人 日本分子生物学会

●平成 28 年度（2016 年度）富澤基金 決算報告書

平成 27 年 10 月 1 日から平成 28 年 9 月 30 日まで

科 目	決 算 額	備 考
収入の部		
預金利息	16,375	
当期収入合計	16,375	
前期繰越金	79,674,666	
合 計	79,691,041	
支出の部		
研究助成金	18,000,000	第 6 回研究助成者は 6 名（1 人 300 万円）
選考経費 / 会場費	157,829	ヒアリング（2016.5.14）
選考経費 / 旅費	145,200	〃
事務・雑費	252,644	貸金庫使用料（静岡銀行）25,920 円、 送金手数料等 5,724 円、遠方からのヒアリング 出席者（*不採択）旅費支払 221,000 円
当期支出合計	18,555,673	
次期繰越金	61,135,368	
合 計	79,691,041	

●平成 28 年度（2016 年度）富澤基金 貸借対照表

平成 28 年 9 月 30 日現在

借 方		貸 方	
科 目	金 額	科 目	金 額
資産の部		負債の部	
普通預金	1,135,368	流動負債	0
定期預金	60,000,000	基金会計（期首）	79,674,666
		今年度収支差額	- 18,539,298
		基金正味財産	61,135,368
合 計	61,135,368	合 計	61,135,368

●平成 28 年度（2016 年度）富澤基金 財産目録

平成 28 年 9 月 30 日現在

科 目	摘 要	金 額
普通預金	静岡銀行 東京営業部	1,135,368
定期預金	静岡銀行 東京営業部	60,000,000
合 計		61,135,368

平成 28 年度（2016 年度）計算書類の注記

特定非営利活動法人 日本分子生物学会

1. 重要な会計方針

計算書類の作成は、NPO 法人会計基準（2010 年 7 月 20 日 2011 年 11 月 20 日一部改正 NPO 法人会計基準協議会）によっております。

(1) 固定資産の減価償却の方法

有形固定資産の減価償却は定率法を採用しております。

(2) 引当金の計上基準

退職給付引当金は従業員の退職給付に備えるため、当期末における退職給付債務に基づき当期末に発生していると認められる金額を計上しております。

なお、退職給付債務は期末自己都合要支給額に基づいて計算しております。

(3) 消費税等の会計処理

消費税等の会計処理は、税込方式を採用しております。

2. 事業費の内訳

別紙（65 頁参照）

3. 固定資産の増減内訳

（単位：円）

科 目	期首取得価額	取 得	減 少	期末取得価額	減価償却累計額	期末帳簿価額
工具器具備品	955,847	0	0	955,847	△ 955,846	1
敷金	1,802,000	0	0	1,802,000	0	1,802,000
合計	2,757,847	0	0	2,757,847	△ 955,846	1,802,001

【監査報告】

平成 28 年度（2016 年度）決算に関して、平成 28 年 10 月 27 日、独立監査人 宮城秀敏公認会計士の監査を受けました。その計算書類が、我が国において一般に公正妥当と認められる会計基準に準拠して、平成 28 年度の収支、正味財産増減の状況及び同年度末日現在の財政状態をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。との監査報告書の提出を受けました。その後、同年 11 月 7 日に花岡文雄監事、11 月 9 日に辻本賀英監事による監査を終了しました。（両監事による会計監査は、帳簿並びに関係書類の閲覧など必要と思われる監査手続きにより行われた）ここにご報告いたします。

特定非営利活動法人 日本分子生物学会
 第 19 期理事長 荒 木 弘 之
 理事（会計幹事）水 島 昇

平成 28 年度 (2016 年度) 事業費の内訳

特定非営利活動法人 日本分子生物学会
(単位:円)

科 目	(1)学術集会、研究発表会、講演会の開催等による分子生物学に関する学術研究事業				(2)分子生物学に関する機関誌及び論文図書等の発行事業				(3)その他目的を達成するために必要な事業				合 計	
	年 会	年会その他	国際会議支援	会報発行	Genes to Cells 編集	Genes to Cells オンライン	ホームページ関係	社会貢献・教育活動	各種委員会(キャリアパス、男女共同参画、その他)	事業費その他(研究倫理、その他)	事業費計	管理部門	合 計	
I 経常収益														
1. 受取人會金	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1,661,000	1,661,000	
2. 受取會費	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	63,912,000	63,912,000	
3. 受取寄付金	8,400,000	0	0	0	0	0	0	0	0	8,400,000	0	8,400,000	8,400,000	
4. 受取助成金	1,200,000	0	0	0	0	0	0	0	0	1,200,000	0	1,200,000	1,200,000	
5. 事業収入	157,399,068	0	0	0	0	0	0	0	0	157,399,068	0	157,399,068	157,399,068	
(1)学術集会、研究発表会、講演会の開催等による分子生物学に関する学術研究事業	0	0	0	0	10,166,091	0	0	0	0	10,166,091	0	10,166,091	10,166,091	
(2)分子生物学に関する機関誌及び論文図書等の発行事業	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
(3)その他目的を達成するために必要な事業	0	0	0	0	10,166,091	0	0	0	0	10,166,091	0	10,166,091	10,166,091	
事業収入計	157,399,068	0	0	0	10,166,091	0	0	0	0	10,166,091	0	10,166,091	10,166,091	
6. その他収益	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	143,655	143,655	
経常収益計	166,998,068	0	0	0	10,166,091	0	0	0	0	10,166,091	0	177,165,159	177,165,159	
II 経常費用														
(1) 人件費														
給与手当	3,807,526	0	0	733,357	733,357	0	1,188,883	2,932,582	297,173	11,040,391	16,199,804	27,240,195	27,240,195	
法定福利費	579,088	0	0	111,681	111,681	0	181,909	446,725	45,499	1,679,354	2,456,905	4,136,349	4,136,349	
福利厚生費	8,436	0	0	1,627	1,627	0	2,651	6,508	662	24,463	35,397	60,260	60,260	
人件費計	4,395,050	0	0	846,665	846,665	0	1,373,343	3,405,815	343,334	12,744,208	18,692,966	31,436,804	31,436,804	
(2) その他経費														
事務所家賃	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3,791,683	3,791,683	
業務委託費	84,217,867	0	0	0	0	4,350,000	2,031,480	327,780	0	90,927,127	1,427,760	92,354,887	92,354,887	
編集業務費	0	0	0	0	4,498,471	0	0	0	0	4,498,471	0	4,498,471	4,498,471	
会員管理システム運用管理費	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2,829,902	2,829,902	
印刷費	13,162,702	0	0	3,325,320	0	0	0	64,584	5,400	16,708,726	1,666,348	18,375,274	18,375,274	
通信運搬費	3,067,811	0	0	4,889,825	0	0	0	23,520	33,756	8,014,912	3,611,344	11,626,156	11,626,156	
旅費交通費	11,981,653	136,980	0	0	0	0	0	413,758	204,600	12,869,991	1,581,084	14,451,075	14,451,075	
会議費	2,082,159	11,058	1,728	0	0	0	540	625,936	10,359	2,729,512	231,337	2,960,849	2,960,849	
支払手数料	1,228,293	1,296	0	3,240	0	0	0	7,128	5,184	1,249,569	1,375,340	2,625,109	2,625,109	
消耗品費	1,792,997	0	0	247,202	0	0	0	8,004	0	2,048,203	477,534	2,525,737	2,525,737	
会費	35,814,009	6,550	0	0	0	0	0	0	0	35,820,359	0	35,820,359	35,820,359	
機材費	16,229,808	0	0	0	0	0	0	0	0	16,229,808	0	16,229,808	16,229,808	
雑費	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	70,000	70,000	
広報費	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3,024	3,024	
補助金	0	0	5,000,000	0	0	0	0	0	3,024	5,000,000	0	5,000,000	5,000,000	
雑費	689,537	0	0	0	0	0	0	0	0	775,907	509,366	1,285,273	1,285,273	
租税公課	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1,209,900	1,209,900	
寄付金支出	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1,000,000	1,000,000	
特定預金支出(退職給付引当金)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1,600,200	1,600,200	
その他経費用計	170,290,836	156,284	5,001,728	8,465,587	4,498,471	4,350,000	2,032,020	576,994	203,943	196,946,209	21,312,988	218,259,607	218,259,607	
経常費用計	174,655,886	156,284	5,001,728	9,312,252	5,345,136	4,350,000	3,405,363	2,110,330	547,277	209,690,417	40,004,594	249,695,411	249,695,411	
増減額	△ 7,656,818	△ 156,284	△ 5,001,728	△ 9,312,252	4,820,955	△ 4,350,000	△ 3,405,363	△ 2,110,330	△ 347,277	△ 32,525,258	25,711,661	△ 6,813,597	△ 6,813,597	

※事務局の人員費(給与手当等)は担当業務別に合わせ、事業費の各科目に区分しております。
※第 38 回年会(BMB2016)法部の収支は、NPO 法人会田基準にて科目分けがなされています。

監査報告書

特定非営利活動法人 日本分子生物学会
理事長 荒木 弘之 殿

平成28年11月7日

特定非営利活動法人 日本分子生物学会

監事 花岡文雄 

平成28年11月9日

特定非営利活動法人 日本分子生物学会

監事 辻本 領英 

私たちは、日本分子生物学会の平成28年度における財産並びに収支の状況について監査を行った。帳簿並びに関係書類の閲覧など必要と思われる監査手続きを用いて計算書類の正確性を検討した結果、計算書類は、財産並びに収支の状況を正しく示していると認める。

以上

独立監査人の監査報告書

平成28年10月27日

特定非営利活動法人 日本分子生物学会
理事長 荒木 弘之 殿

宮城公認会計士事務所

公認会計士 宮城 敏文 

私は、特定非営利活動法人 日本分子生物学会の平成27年10月1日から平成28年9月30日までの平成28年度の計算書類、すなわち、活動計算書、貸借対照表及び財産目録並びに平成27年10月1日から平成28年9月30日までの平成28年度の富澤基金 会計報告、すなわち、富澤基金 決算報告書、貸借対照表及び財産目録について監査を行った。この計算書類及び会計報告の作成責任は理事者であり、私の責任は独立の立場から計算書類及び会計報告に対する意見を表明することにある。

私は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、私に計算書類及び会計報告に重要な虚偽の表示がないかどうかの合理的な保証を得ることを求めている。監査は、試査を基礎として行われ、理事者が採用した会計方針及びその適用方法並びに理事者によって行われた見積り等の評価も含めた全体としての計算書類及び会計報告の表示を検討することを含んでいる。私は、監査の結果として意見表明のための合理的な基礎を得たと判断している。

私は、上記の計算書類及び会計報告が、我が国において一般に公正妥当と認められる会計基準に準拠して、特定非営利活動法人 日本分子生物学会の平成28年度の収支、正味財産増減の状況及び同年度末日現在の財政状態並びに富澤基金の平成28年度の収支及び同年度末日現在の財政状態をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

特定非営利活動法人 日本分子生物学会と私との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以上

平成 29 年度 (2017 年度) 活動予算書

平成 29 年度 (2017 年度) 活動予算書

平成 28 年 10 月 1 日から平成 29 年 9 月 30 日まで

特定非営利活動法人 日本分子生物学会

科 目	金 額	
I 経常収益		
1 受取入金		
正会員受取入金	500,000	
学生会員受取入金	1,200,000	1,700,000
2 受取会費		
正会員受取会費	54,100,000	
学生会員受取会費	9,000,000	
シニア会員受取会費	200,000	
次世代教育会員受取会費	100,000	
賛助会員受取会費	1,160,000	64,560,000
3 受取寄付金	6,000,000	6,000,000
4 受取助成金	300,000	300,000
5 事業収入		
(1)学術集会、研究発表会、講演会の開催等による分子生物学に関する学術研究事業	196,670,000	
(2)分子生物学に関する機関誌及び論文図書等の発行事業	13,000,000	
(3)その他目的を達成するために必要な事業	0	209,670,000
6 その他収益		
受取利息	30,000	
雑収入	150,000	180,000
経常収益計		282,410,000
II 経常費用		
1 事業費		
(1)人件費		
給与手当	11,300,000	
法定福利費	1,770,000	
福利厚生費	20,000	
人件費計	13,090,000	
(2)その他経費		
業務委託費	113,500,000	
編集業務費	4,500,000	
印刷費	18,620,000	
通信運搬費	7,800,000	
旅費交通費	15,000,000	
会議費	800,000	
支払手数料	1,080,000	
消耗品費	3,000,000	
会場費	48,100,000	
機材費	15,000,000	
諸会費	70,000	
広報費	100,000	
補助金	3,500,000	
雑費	1,080,000	
その他経費計	232,150,000	
事業費計		245,240,000
2 管理費		
(1)人件費		
給与手当	16,200,000	
法定福利費	2,450,000	
福利厚生費	40,000	
人件費計	18,690,000	
(2)その他経費		
事務所家賃	4,100,000	
業務委託費	1,450,000	
会員管理システム運用管理費	2,700,000	
印刷費	1,700,000	
通信運搬費	3,600,000	
旅費交通費	2,000,000	
会議費	300,000	
支払手数料	1,400,000	
消耗品費	500,000	
雑費	500,000	
租税公課	1,700,000	
特定預金支出 (退職給付引当金)	1,660,000	
その他経費計	21,610,000	
管理費計		40,300,000
経常費用計		285,540,000
当期正味財産増加額		△ 3,130,000
前期繰越正味財産額		192,630,000
次期繰越正味財産額		189,500,000

(単位：円)

平成 29 年度 (2017 年度) 活動予算 事業費の内訳

特定非営利活動法人 日本分子生物学会
(単位:円)

科 目	(1)学術集会、研究発表会、講演会の開催等による分子生物学に関する学術研究事業			(2)分子生物学に関する機関誌及び論文図書等の発行事業			(3)その他目的を達成するために必要な事業			合計			
	年会	年会その他	国際会議支援	会報発行	Genes to Cells 編集	Genes to Cells オンライン	ホームページ関係	社会貢献・教育活動	各委員会(キーノート、男女共同参画、その他)	事業費その他(研究倫理、その他)	事業費計	管理部門	合計
I 経常収益													
1. 受取入会金	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1,700,000	1,700,000
2. 受取会費	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	64,560,000	64,560,000
3. 受取寄付金	6,000,000	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6,000,000	0	6,000,000
4. 受取助成金	300,000	0	0	0	0	0	0	0	0	0	300,000	0	300,000
5. 事業収入											0		0
(1)学術集会、研究発表会、講演会の開催等による分子生物学に関する学術研究事業	196,670,000	0	0	0	0	0	0	0	0	0	196,670,000	0	196,670,000
(2)分子生物学に関する機関誌及び論文図書等の発行事業	0	0	0	0	13,000,000	0	0	0	0	0	13,000,000	0	13,000,000
(3)その他目的を達成するために必要な事業	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
事業収入計	196,670,000	0	0	0	13,000,000	0	0	0	0	0	209,670,000	0	209,670,000
6. その他収益	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	180,000	180,000
経常収益計	202,970,000	0	0	0	13,000,000	0	0	0	0	0	215,970,000	66,440,000	282,410,000
II 経常費用													
(1) 人件費													
給与手当	3,900,000	0	0	750,000	750,000	0	1,200,000	1,400,000	3,000,000	300,000	11,300,000	16,200,000	27,500,000
法定福利費	600,000	0	0	120,000	120,000	0	190,000	230,000	460,000	50,000	1,770,000	2,450,000	4,220,000
福利厚生費	10,000	0	0	0	0	0	0	0	10,000	0	20,000	40,000	60,000
人件費計	4,510,000	0	0	870,000	870,000	0	1,390,000	1,630,000	3,470,000	350,000	13,660,000	18,690,000	31,780,000
(2) その他経費													
事務所家賃	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4,100,000	4,100,000
業務委託費	106,370,000	300,000	0	0	0	4,550,000	2,000,000	100,000	350,000	30,000	113,500,000	1,450,000	114,950,000
編集業務費	0	0	0	0	4,500,000	0	0	0	0	0	4,500,000	0	4,500,000
会員管理システム運用管理費	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2,700,000	2,700,000
印刷費	15,000,000	0	0	3,300,000	0	0	0	100,000	200,000	20,000	18,620,000	1,700,000	20,320,000
通信運搬費	3,800,000	0	0	4,000,000	0	0	0	0	0	0	7,800,000	3,600,000	11,400,000
旅費交通費	14,000,000	100,000	0	0	0	0	0	400,000	300,000	200,000	15,000,000	2,000,000	17,000,000
会議費	300,000	0	0	0	0	0	0	0	500,000	0	800,000	300,000	1,100,000
支払手数料	1,000,000	0	0	0	0	0	0	10,000	70,000	0	1,080,000	1,400,000	2,480,000
消耗品費	2,800,000	0	0	200,000	0	0	0	0	0	0	3,000,000	500,000	3,500,000
会費	48,000,000	0	0	0	0	0	0	0	100,000	0	48,100,000	0	48,100,000
機材費	15,000,000	0	0	0	0	0	0	0	0	0	15,000,000	0	15,000,000
諸会費	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	70,000	70,000
広報費	0	0	0	0	0	0	0	50,000	50,000	0	100,000	0	100,000
補助金	0	0	3,500,000	0	0	0	0	0	0	0	3,500,000	0	3,500,000
雑費	1,000,000	0	0	0	0	0	0	80,000	0	0	1,080,000	500,000	1,580,000
租税公課	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1,700,000	1,700,000
特定預金支出(退職給付引当金)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1,660,000	1,660,000
その他経費計	207,270,000	400,000	3,500,000	7,500,000	4,500,000	4,350,000	2,000,000	740,000	1,590,000	300,000	232,150,000	21,610,000	253,760,000
経常費用計	211,780,000	400,000	3,500,000	8,370,000	5,370,000	4,350,000	3,390,000	2,370,000	5,060,000	650,000	245,240,000	40,300,000	285,540,000
増減額	-8,810,000	-400,000	-3,500,000	-8,370,000	7,630,000	-4,350,000	-3,390,000	-2,370,000	-5,060,000	-650,000	-29,270,000	26,140,000	-3,130,000

学術賞、研究助成の本学会推薦について

本学会に推薦依頼あるいは案内のある学術賞、研究助成は、本号に一覧として掲載しております。そのうち、応募にあたり学会等の推薦が必要なものについての本学会からの推薦は、賞推薦委員会または研究助成選考委員会の審査に従って行います。応募希望の方は、直接助成先に問い合わせ、申請書類を各自お取寄せのうえ、ふるってご応募下さい。

本学会への推薦依頼の手続きは次の通りです。

1. 提出物

- 1) 本申請に必要な書類（オリジナルおよび募集要項に記載されている部数のコピー）
- 2) 本学会の選考委員用および学会用控に、上記申請書類のコピー計6部
- 3) 申込受付確認のための返信封筒（返信用の宛名を記入しておいて下さい）
- 4) 論文（別刷は各種財団等応募先の必要部数をご用意下さい。委員会用の論文は不要です）

2. 提出先

※賞推薦についての送付先

日本分子生物学会・賞推薦委員長 後藤由季子
〒102-0072 千代田区飯田橋2-11-5
人材開発ビル4階
日本分子生物学会事務局気付

※研究助成についての送付先

日本分子生物学会・研究助成選考委員長 影山龍一郎
〒102-0072 千代田区飯田橋2-11-5
人材開発ビル4階
日本分子生物学会事務局気付

3. 提出期限

財団等の締切りの1カ月前まで。提出期限後に受取った場合や、提出書類が不備な場合は、選考の対象にならないことがあります。推薦手続きのことでご不明な点がありましたら、学会事務局までお問合わせ下さい。

※研究助成（学会推薦）に関する留意事項

学会推薦した会員が財団等の研究助成対象者となった場合には、その研究成果を将来、学会誌「Genes to Cells」に論文あるいは総説として発表して頂くように要請いたします。

応募に際しては、その旨をご了解くださるようお願いいたします。

※各種学術賞（学会推薦）に関する留意事項

- 委員会の内規により、外部財団等の各種学術賞への推薦は、原則として一人につき年度あたり1件となっておりますので、ご了解ください。
- 重複申請があった場合、すでにある賞等の推薦が決定されている候補者は、それ以降審査する他の賞等の推薦候補者として原則的に考慮いたしません。応募に際し、ご留意くださるようお願いいたします。

研究助成一覧

名 称	連 絡 先	件 数	締 切	助成内容等	概 要
第 48 回三菱財団 自然科学研究助成	(公財)三菱財団 ☎ (03) 3214-5754 〒 100-0005 千代田区丸の内 2-3-1	総額 2 億 8,000 万円	2017 年 2 月 7 日	1 件当たり 2,000 万円まで	自然科学のすべての分野にかかわる独創的かつ先駆的研究を支援。
山田科学振興財団 2017 年度研究援助	(公財)山田科学振興財団 ☎ (06) 6758-3745 〒 544-8666 大阪市生野区巽西 1-8-1	15 件程度 (本学会の 推薦枠は 5 件)	2017 年 2 月 24 日	1 件当たり 100 ～ 500 万円、 総額 3,000 万円	自然科学の基礎的研究に対しての研究費援助。 [推薦書は山田財団HPより ダウンロード http://www.yamadazaidan.jp/]
山田科学振興財団 国際学術集会開催助成 (2019 年開催)		総額 800 万円以内	2016 年 4 月 1 日～ 2017 年 2 月 24 日 (募集期間)	総額 800 万円以内	以下の要件を満たす学術集会を山田コンファレンスもしくは山田シンポジウムと称し、これらの開催を援助する。 ①基礎科学の適切なテーマについて、国際的視野で最高レベルの研究を総括する。 ②研究者の世代間の対話によって、若い世代の研究の発展の基礎を構築する。 ③異分野間の交流を図り、cross-disciplinary な討論を通じて新しい発展を模索する。 詳細 山田財団 HP 参照。
第 33 回国際生物学賞	国際生物学賞委員会 ☎ (03) 3263-1724 〒 102-0083 千代田区麹町 5-3-1 日本学術振興会内	1 件 (1 件)	2017 年 * 4 月 22 日	賞状、賞牌、 1,000 万円	生物学の研究において世界的に優れた業績を挙げ、世界の学術進歩に大きな貢献をした研究者。第 32 回の授賞分野は「多様性の生物学」。
平成 29 年度 持田記念学術賞	(公財)持田記念医学薬学振興財団 ☎ (03) 6229-1282 〒 160-0003 新宿区本塩町 7-6 四谷ワイズビル	2 件以内 (1 件)	2017 年 5 月 22 日	1 件 1,000 万円	学術賞は次の 6 項目の研究分野で、研究の進歩発展のため顕著な功績のあった研究者に贈呈。 (1)バイオ技術を基盤とする先端医療に関する研究
平成 29 年度 研究助成		総額 2 億 8,500 万円 95 件	2017 年 * 6 月 7 日	1 件 300 万円	(2)バイオ技術を基盤とするゲノム機能 / 病態解析に関する研究
平成 29 年度国内または 海外留学補助金		総額 1,000 万円	2017 年 * 6 月 7 日	1 件 50 万円	(3)免疫 / アレルギー / 炎症の治療ならびに制御に関する研究 (4)循環器 / 血液疾患の病態解析 / 治療制御に関する研究 (5)創薬・創剤の基盤に関する研究 (6)創薬の臨床応用に関する研究
平成 30 年度笹川科学 研究助成	(公財)日本科学協会 ☎ (03) 6229-5365 〒 107-0052 港区赤坂 1-2-2 日本財団ビル	生物系で 86 件 (28 年度実績)	募集期間 2017 年 * 10 月 1 日～ 10 月 15 日	1 件当たり 100 万円まで	人文・社会科学および自然科学(医学を除く)の独創性・萌芽性をもつ研究に関するもの。4 月 1 日現在、35 歳以下の若手研究者へ助成。
上 原 賞	(公財)上原記念生命科学財団 ☎ (03) 3985-3500 〒 171-0033 豊島区高田 3-26-3	2 件以内 (1 件)	2017 年 * 9 月 1 日	金牌、 2,000 万円	生命科学の東洋医学、体力医学、社会医学、栄養学、薬学一般および基礎医学、臨床医学で顕著な業績を挙げ、引き続き活躍中の研究者。
第 33 回井上学術賞	(公財)井上科学振興財団 ☎ (03) 3477-2738 〒 150-0036 渋谷区南平台町 15-15-601	5 件以内 (2 件)	2016 年 9 月 20 日	賞状、金メダル、 200 万円	自然科学の基礎的研究で特に顕著な業績を挙げた者(ただし締切日現在満 50 歳未満)。
第 33 回井上研究奨励賞		40 件	2016 年 9 月 20 日	賞状及び銅メダル、 50 万円	過去 3 年間に、理学・工学・医学・薬学・農学等の自然科学の基礎的研究において、新しい領域を開拓する可能性のある優れた博士論文を提出し博士の学位を取得した研究者で、37 歳未満の者
第 9 回井上リサーチ アワード		4 名以内 (うち 1 名以上 女性研究者)	2016 年 7 月 29 日	1 人当たり 500 万円	開拓的發展を目指す若手研究者の独創性と自立を支援する目的で、研究を助成。研究期間は 2 年。

名 称	連 絡 先	件 数	締 切	助成内容等	概 要
第 26 回木原記念財団 学術賞	(公財)木原記念横浜生命科学振 興財団 ☎ (045) 502-4810 〒 230-0045 横浜市鶴見区末広町 1-6	1 件 (1 件)	2017 年 * 9 月 29 日	賞状、 200 万円	生命科学の分野で優れた独創的 研究を行っている国内の研究者 であり、今後のさらなる発展が 大きく期待できる者。原則とし て締切日現在 50 歳以下を対象と する。
住友財団 2017 年度 基礎科学研究助成	(公財)住友財団 ☎ (03) 5473-0161 〒 105-0012 港区芝大門 1-12-6 住友芝大門ビル 2 号館	総額 1 億 5,000 万円 90 件程度	2017 年 * 6 月 30 日 (受付番号の Web 取得 締切日: 6 月 16 日)	1 件当たり 500 万 円まで	理学(数学、物理学、化学、生物学) の各分野及びこれらの複数にまた がる分野の基礎研究で萌芽的 なもの。若手研究者(個人または グループ)を対象とする。
第 59 回藤原賞	(公財)藤原科学財団 ☎ (03) 3561-7736 〒 104-0061 中央区銀座 3-7-12	2 件 (1 件)	2017 年 * 12 月 20 日	副賞 1,000 万円	推薦の対象は自然科学分野に属 するもの。わが国に国籍を有し、 科学技術の発展に卓越した貢献 をした者。
平成 30 年度科学技術 分野の文部科学大臣 表彰科学技術賞およ び若手科学者賞	文部科学省 研究振興局振興企画課奨励室 ☎ (03) 6734-4071 〒 100-8959 千代田区霞が関 3-2-2	科学技術賞 140 件(年)のうち、 研究部門は 40 件(28 年度) 若手科学者賞 は 100 名程度 (学会推薦枠は定 まっていないが推 薦は若干名まで)	2017 年 * 7 月 26 日	表彰状及び副賞	我が国の科学技術の発展等に寄 与する可能性の高い独創的な研 究又は発明を行った個人又はグ ループを表彰。 萌芽的な研究、独創的視点に立 った研究等、高度な研究開発能 力を示す顕著な研究業績を挙げ た 40 歳未満の若手研究個人。
平成 29 年度島津賞	(公財)島津科学技術振興財団 ☎ (075) 823-3240 〒 604-8445 京都市中京区 西ノ京徳大寺町 1	1 件 (推薦枠は若干件)	2017 年 * 9 月 30 日	賞状、賞牌、 副賞 500 万円	科学技術、主として科学計測お よびその周辺の領域における基 礎的な研究において、著しい成 果をあげた功労者を対象とする。
島津科学技術振興 財団研究開発助成		総額 1,200 万円	2017 年 * 9 月 30 日	1 件当たり 100 万円以下	上記同様を研究対象とする、国内 の研究機関に所属する 45 歳以下 の新進気鋭の研究者。国籍不問。
東レ科学技術賞	(公財)東レ科学振興会 ☎ (03) 6262-1655 〒 103-0021 中央区日本橋本石町 3-3-16 (日本橋室町ビル)	2 件前後 (2 件)	2017 年 * 10 月 6 日	1 件につき 賞状、金メダル、 500 万円	理学・工学・農学・薬学・医学(除 臨床医学)の分野で、学術上の 業績顕著な者、学術上重要な発 見をした者、効果が大きい重要 な発明をした者、技術上の重要 問題を解決し貢献が大きい者。
東レ科学技術研究助成		総額 1 億 3,000 万円 10 件程度 (2 件)	2017 年 * 10 月 6 日	特に定めず最大 3,000 万円程度 まで	今後の研究の成果が科学技術の 進歩・発展に貢献するところが 大きいと考えられる、独創的、 萌芽的な研究を活発に行ってい る若手研究者(原則として 45 歳 以下)。
ノバルティス研究 奨励金	(公財)ノバルティス科学振興財団 ☎ (03) 6899-2100 〒 106-6333 港区虎ノ門 1-23-1 虎ノ門ヒルズ森タワー 29F	約 35 件 指定機関から の推薦必要	2017 年 * 9 月 15 日	1 件 100 万円	生物・生命科学、関連する化学 および情報科学の領域における 創造的な研究に対して助成。
第 49 回内藤記念科学 振興賞	(公財)内藤記念科学振興財団 ☎ (03) 3813-3861 〒 113-0033 文京区本郷 3-42-6 NKD ビル 8 階	1 件 (1 件)	2017 年 * 10 月 2 日	金メダル、 1000 万円	人類の健康の増進に寄与する自 然科学の基礎的研究において、 独創的テーマに取り組み、その 進歩発展に顕著な功績を挙げた 研究者。
第 49 回海外学者 招へい助成金		前期・後期各 10 件以内 (前期・後期 各々 1 件)	2017 年 * 6 月 1 日・ 10 月 2 日	1 件 20 ~ 80 万円 まで (エリアによる)	同上のテーマに取り組み、国際 的に高い評価を得ている外国の 研究者を招へいする受入れ責任 者(当該学術集会の組織委員長) に助成。
ブレインサイエンス 財団研究助成		15 件以内	2017 年 * 10 月 6 日	1 件 80 ~ 100 万円	脳科学の広い分野における独創 的な研究計画への助成。
塚原伸見記念賞	(公財)ブレインサイエンス振興 財団 ☎ (03) 3273-2565 〒 104-0028 中央区八重洲 2-6-20	1 件		賞牌ならびに 副賞 100 万円	生命科学の分野において優れた 独創的研究を行っている 50 歳以 下の研究者。
海外派遣研究助成		若干件	2018 年 * 1 月 12 日	1 件 30 万円まで	我が国における脳科学の研究の 促進を図るため、国際学会、シ ンポジウム等への参加、あるい は短期間の研究者の派遣を助成。
海外研究者招聘助成		若干件		1 件 30 万円まで	脳科学研究分野において独創的 テーマに意欲的に取り組んでい る外国人研究者の短期間の招聘 を助成。

名 称	連 絡 先	件 数	締 切	助成内容等	概 要
平成 30 年度研究助成	(公財)長瀬科学技術振興財団 ☎ (06) 6535-2117 〒 550-8668 大阪市西区新町 1-1-17	20 件程度	2017 年 * 11 月 14 日	1 件 250 万円	有機化学(材料化学を含む)及び生化学並びに関連分野における研究が助成対象。
第 14 回日本学術振興会賞	(独)日本学術振興会 研究者養成課 「日本学術振興会賞」担当 ☎ (03) 3263-0912 〒 102-0083 千代田区麹町 5-3-1	25 件程度 (機関長推薦 扱いとして 学会推薦枠 も若干件あり)	2017 年 * 4 月中旬 (受付日指定)	賞状、賞碑、 研究奨励金 110 万円	人文、社会科学及び自然科学にわたる全分野が対象。博士の学位を取得しており、国内外の学術誌等に公表された論文、著書、その他の研究業績により学術上特に優れた成果を上げたと認められた研究者(45歳未満)。
第 8 回日本学術振興会有志賞		16 件程度 (1 件)	2017 年 * 6 月中旬 (受付日指定)	賞状、賞碑、 学業奨励金 110 万円	我が国の学術研究の発展に寄与することが期待される優秀な大学院博士課程の学生を顕彰(34歳未満)。
(一財)材料科学技術振興財団 山崎貞一賞	(一財)材料科学技術振興財団 ☎ (03) 3415-2200 〒 157-0067 世田谷区喜多見 1-18-6	各分野 1 件	2017 年 * 5 月 2 日	賞状、金メダル、 300 万円	授賞対象は、「材料」、「半導体及び半導体装置」、「計測評価」、「バイオサイエンス・バイオテクノロジー」の 4 分野からなり、論文の発表、特許の取得、方法・技術の開発等を通じて、実用化につながる優れた業績をあげている者。
平成 28 年度研究助成	(公財)光科学技術研究振興財団 ☎ (053) 454-0598 〒 430-0926 浜松市中区砂山町 325-6	20 ~ 30 件 総額 5,000 万円	2017 年 * 7 月 15 日	助成金総額 約 5,000 万円	光科学に関係する研究に対して助成。対象課題有り。
2017 年度朝日賞	朝日新聞社 CSR 推進部 「朝日賞」事務局 ☎ (03) 5540-7453 〒 104-8011 中央区築地 5-3-2	ここ最近 は 4 ~ 5 件 (1 件)	2017 年 * 8 月 31 日	正賞(ブロンズ像) と副賞 500 万円	学術、芸術などの分野で傑出した業績をあげ、わが国の文化、社会の発展、向上に多大の貢献をされた個人または団体に贈られる。
第 29 回加藤記念研究助成	(公財)加藤記念バイオサイエンス研究振興財団 ☎ (042) 725-2576 〒 194-8533 町田市旭町 3-6-6	28 件程度	2017 年 * 9 月 30 日	1 件 200 万円	バイオサイエンス分野における有能な若手研究者を発掘し、その創造的かつ先駆的研究を支援する。40 歳以下の研究者。
第 7 回三島海雲学術賞	(公財)三島海雲記念財団 ☎ (03) 5422-9898 〒 150-0012 渋谷区広尾 1-6-10 ジラフフェビル	自然科学部門 で 2 件以内 (2 件)	2017 年 * 9 月 30 日	1 件 200 万円	自然科学部門は、食の科学に関する研究が対象。国内外の学術誌等に公表された論文、著書、その他の研究業績により独創的で発展性のある顕著な業績を挙げている 45 歳未満の若手研究者。
平成 29 年度三島海雲学術研究奨励金		全部門計 50 件程度	2017 年 1 月 10 日 ~ 2 月 25 日	個人研究奨励金は 1 件 100 万円	食の科学に関する学術研究。若手研究者および女性研究者の積極的応募を期待する。
第 5 回ヤマト科学賞	ヤマト科学(株)内 ヤマト科学賞選考委員会事務局 ☎ (03) 5639-7070 〒 135-0047 江東区富岡 2-11-6 HASEMAN ビル	1 件	2017 年 * 11 月 30 日	賞状、賞牌、 副賞 100 万円	独創性、創造性に富む、気鋭の研究者を顕彰。対象分野はライフサイエンス、マテリアルサイエンス、インフォメーションサイエンス等の自然科学、技術分野およびその融合領域分野。
平成 29 年度小野医学研究助成	(公財)小野医学研究財団 ☎ (06) 6232-1960 〒 541-8526 大阪市中央区道修町 2-1-5	12 件以内	2017 年 * 6 月 1 日 ~ 7 月 31 日 (受付日)	1 件 200 万円	助成テーマは脂質代謝異常に伴う疾患の病態生理に関する研究(27 年度)。①基礎医学②臨床医学③疫学④薬学⑤その他の領域研究奨励助成は満 40 歳以下に限る。
平成 29 年度小野医学研究奨励助成		16 件以内		1 件 100 万円	

●件数の()内は、応募に当たり学協会等からの推薦が必要な場合、本学会の推薦枠を示しています。

*は、本年度の案内を受取っておらず、昨年締切日を参考に示してあります。

締切日を過ぎているものは、本年度応募は終了していますが、参考資料として掲載しました。

各種学術集会、シンポジウム、講習会等のお知らせ

○広島大学知のフォーラム

「広島大学から世界へ～世界のトップ研究者に聞く 第3弾～」

広島大学知のフォーラム「広島大学から世界へ～世界のトップ研究者に聞く 第3弾～」では、“細胞周期・増殖分子機構の基本原理の解明”の業績により2001年ノーベル生理学・医学賞を受賞したRoyal Society前総長、現Francis Crick Institute所長のPaul Nurse博士をお招きしご講演、さらにその後一般市民を対象としたパネルディスカッションをしていただきます。本フォーラムは、第1回の山中伸弥博士・John Gurdon博士、第2回の梶田隆章博士をお招きしたノーベル賞受賞者による講演会の第3弾です。今回は、Paul Nurse博士に生命科学分野における最先端研究の紹介とその進展に伴う社会に及ぼす影響や将来展開についての思索や、若い研究者をいかに育てるか、中学高校での科学教育のあり方など、幅広い視点でお話をさせていただきます。

日 時：2017年4月5日(水) 14:30～17:00

会 場：広島大学サタケメモリアルホール（東広島キャンパス）

（JR山陽本線 西条駅からバスで約20分）

講 演 者：Sir Paul Nurse

主 管：広島大学健康長寿研究拠点、研究大学強化促進事業

参 加 費：無料（事前参加登録要）

事前参加登録：<http://appform.hiroshima-u.ac.jp/20170405/>

言 語：英語（同時通訳有り）

参加対象：どなたでもご参加いただけます（高校生以上推奨）

○千里ライフサイエンスセミナー

がんシリーズ第6回「エピゲノム情報に基づくがんの制御」

日 時：2017年5月31日(水) 10:00～16:50

場 所：千里ライフサイエンスセンタービル 5階
山村雄一記念ライフホール

趣 旨：

網羅的エピゲノム解析技術の進歩とともに、がん細胞におけるエピゲノム異常の全体像が明らかとなってきました。がん細胞におけるエピゲノム異常の原因として、エピゲノム修飾因子自体の遺伝子変異や炎症に代表される周囲環境の変化が重要な役割を果たすことも示されつつあります。さらに、発がん過程におけるエピゲノム異常の意義に関する知見も蓄積し、エピゲノム制御を標的とした新たな治療戦略の可能性も示されています。本セ

ミナーでは、がんエピゲノム研究分野において最前線で活躍する研究者の方々にご登壇いただき、がんエピゲノム解析の最先端とともに、エピゲノム異常の原因、さらには、がんの発生、維持、進展におけるエピゲノム制御の意義に関する最新の知見を紹介いただきます。加えて、エピゲノム制御を標的とした創薬の現状と問題点について理解を深め、エピゲノム情報に基づくがんの制御についての将来展望を議論したいと思います。

プログラム：

1. 細胞悪性化とエピゲノム異常
油谷浩幸（東京大学先端科学技術研究センター教授）
2. 急性骨髄性白血病の制御に必須なヒストン制御因子
北林一生（国立がん研究センター研究所 分野長）
3. iPS細胞技術によるがんエピゲノムの理解
山田泰広（京都大学iPS細胞研究所 教授）
4. エピゲノム修飾を介したオートファジー制御とがん
中西 真（東京大学医科学研究所 教授）
5. ヒストン脱アセチル化酵素研究の新展開とエピゲノム創薬への展望
吉田 稔（理化学研究所 主任研究員）
6. 隣がん層別化治療を目指したエピゲノム標的探索
立石敬介（東京大学大学院医学系研究科 講師）
7. BRD4阻害剤の研究開発動向
田中 実（田辺三菱製薬株式会社 副主任研究員）
8. 胃癌で誘導されるエピゲノム異常と小分子を用いた領域特異的エピゲノム制御
金田篤志（千葉大学大学院医学研究院 教授）

コーディネーター：

- 油谷浩幸（東京大学先端科学技術研究センター 教授）
山田泰広（京都大学iPS細胞研究所 教授）

参加費：無料

申込要領：氏名、勤務先、所属、〒所在地、電話番号、Eメールアドレスを明記の上、Eメールで下記宛お申し込み下さい。件名は「千里ライフサイエンスセミナー L1」として下さい。

申 込 先：千里ライフサイエンスセミナー L1 係

E-mail：sng@senri-life.or.jp

URL：<http://www.senri-life.or.jp/seminar-1.html>

〒560-0082 大阪府豊中市新千里東町1-4-2
千里ライフサイエンスセンタービル 20階

TEL 06-6873-2001

主 催：公益財団法人千里ライフサイエンス振興財団

担 当：湯通堂 隆（Takashi Yutsudo, PhD.）

公益財団法人千里ライフサイエンス振興財団

〒560-0082 大阪府豊中市新千里東町 1-4-2
Tel : 06-6873-2001 FAX : 06-6873-2002
E-mail : sng@senri-life.or.jp

○第19回マリンバイオテクノロジー学会大会 開催のお知らせ

第19回マリンバイオテクノロジー学会大会を下記の要領で開催します。

大会日程：平成29年6月3日(土)～6月4日(日)

会場：東北大学青葉山新キャンパス（農学部・農学研究科）

大会役員：大会会長：木島明博*、副会長：鈴木 徹*、
実行委員長：中野俊樹*

実行委員（順不同）：栗田喜久（総務責任者）*・
小川智久*²・半澤直人*³・西川正純*⁴・佐々
木洋*⁵・臼井利典*⁶

* 東北大学農学研究科、*² 東北大学 生命科学
研究科、*³ 山形大学理学部、*⁴ 宮城大学
食産業学部、*⁵ 石巻専修大学理工学部、
*⁶ (株)ジーオー・ファーム

大会事務局：〒986-2242 宮城県牡鹿郡女川町小乗浜字向3-1
東北大学女川フィールドセンター内
第19回マリンバイオテクノロジー学会大会
大会実行委員会

Email : mbt2017@excite.co.jp（お問い合わせ
はメールにてお願いいたします。）

懇親会：開催日：平成29年6月3日(土) 18:00～20:00

大会の内容：1. 一般講演（口頭発表，ポスター発表）
2. シンポジウム（一般：2.5時間，ミニ：
1.5時間）

発表形式：1. 口頭発表：一般講演は質疑応答を含め15
分 液晶プロジェクターを使用
2. ポスター発表：学生を対象とした優秀ポ
スターの表彰を予定

一般講演のセッション：1. 微生物 2. 微細藻類
3. 海藻・付着生物 4. 魚介類
5. 天然物化学・未利用資源
6. バイオミネラルイゼーション
7. 環境・環境適応 8. その他

シンポジウム申込の締切：平成29年2月28日(火)

発表申込みの締切：平成29年3月20日(月)

講演要旨の締切：平成29年3月20日(月)

事前参加申込登録の締切：平成29年5月2日(火)

事前参加登録費：会員5,000円 学生2,000円

非会員9,000円 学生非会員4,000円

当日参加費：会員7,000円 学生3,000円

非会員10,000円 学生非会員5,000円

懇親会費：一般6,000円 学生3,000円

*協賛いただきました学協会（分子生物学会）の会員
の方は、当学会会員と同等の参加費で参加いただけます。
なお、発表は学会会員に限ります。

参加・講演申込方法：希望者は大会ウェブサイト上の登
録ページよりご登録ください。

第19回大会ウェブサイト：

<http://www.senkyo.co.jp/mbt2017/>

学会ウェブサイト：<http://marinebiotechnology.jp/>

日本分子生物学会 賛助会員一覧

(2017年2月現在)

アサヒグループホールディングス株式会社
株式会社エー・イー企画
科学技術振興機構 バイオサイエンスデータベースセンター
科研製薬株式会社 薬理部
協和発酵キリン株式会社 研究開発本部企画推進グループ
コスモ・バイオ株式会社 開発部
サーモフィッシャーサイエンティフィック ライフテクノロジーズジャパン株式会社
第一三共株式会社 モダリティ研究所
タカラバイオ株式会社 事業開発部
株式会社ダスキン 開発研究所
田辺三菱製薬株式会社
東洋紡績株式会社 ライフサイエンス事業部
株式会社トミー精工
ナカライテスク株式会社 開発企画部広報課
日本ゼオン株式会社
日本甜菜製糖株式会社 総合研究所第二グループ
日本ベクトン・ディッキンソン株式会社 BD バイオサイエンス
日本たばこ産業株式会社 植物イノベーションセンター
浜松ホトニクス株式会社 システム営業部
富士レビオ株式会社 研究推進部バイオ研究グループ
フナコシ株式会社
三菱化学株式会社 経営戦略部門 RD 戦略室
ヤマサ醤油株式会社 R & D 管理室
湧永製薬株式会社 湧永満之記念図書館
ワケンビーテック株式会社 学術部

(25社、50音順)

■第 40 回日本分子生物学会年会 (ConBio2017) 公式サイト

URL: <http://www.aeplan.co.jp/conbio2017/>

■日本分子生物学会 Facebook 公式アカウント

URL: <http://www.facebook.com/mbsj1978/>

特定非営利活動法人

日本分子生物学会 事務局

〒102-0072 東京都千代田区飯田橋 2-11-5

人材開発ビル 4 階

TEL: 03-3556-9600 FAX: 03-3556-9611

E-mail: info@mbsj.jp

2017年度

生命科学系学会合同年次大会



第40回 日本分子生物学会年会



第90回 日本生化学会大会

2017年12月6日(水)～9日(土)

神戸ポートアイランド

神戸ポートピアホテル、神戸国際会議場、神戸国際展示場、神戸商工会議所

第40回日本分子生物学会年会

第90回日本生化学会大会

年会長：篠原 彰 (大阪大学蛋白質研究所)

会 員：大野 茂男 (横浜市立大学医学部)

演題投稿受付期間 2017年7月3日(月)～7月18日(火)

事前参加登録期間 2017年7月3日(月)～10月16日(月)

ConBio2017
Consortium of Biological Sciences 2017



共催：FAOBMB

協賛

自然史学会連合

日本RNA学会

日本味と匂学会

日本真菌学会

日本遺伝学会

日本遺伝子細胞治療学会

日本宇宙生物科学学会

日本栄養・食糧学会

日本エビジェネティクス研究会

日本解剖学会

日本癌学会

日本寄生虫学会

日本ケムカルバイオロジー学会

日本細菌学会

日本酸化ストレス学会

日本時間生物学会

日本実験動物学会

日本神経病理学会

日本人類遺伝学会

日本生物物理学会

日本蛋白質科学会

日本動物学会

日本比較内分泌学会

日本微生物生態学会

日本病理学会

日本プロテオーム学会

日本放射線影響学会

日本免疫学会

日本薬理学会

<http://www.aeplan.co.jp/conbio2017>

連絡先

2017年度生命科学系学会合同年次大会(ConBio2017) 運営事務局(株式会社エーイー企画 内)
〒101-0003 東京都千代田区一ツ橋2-4-4 岩波書店一ツ橋別館4階
Tel:03-3230-2744 Fax:03-3230-2479 E-mail:conbio2017@aeplan.co.jp

The Molecular Biology Society of Japan NEWS

日本分子生物学会 会報

(年3回刊行)

第116号 (2017年2月)

発行——特定非営利活動法人 日本分子生物学会

代表者——杉本亜砂子